第四章　第120次調査Ａ区の概要

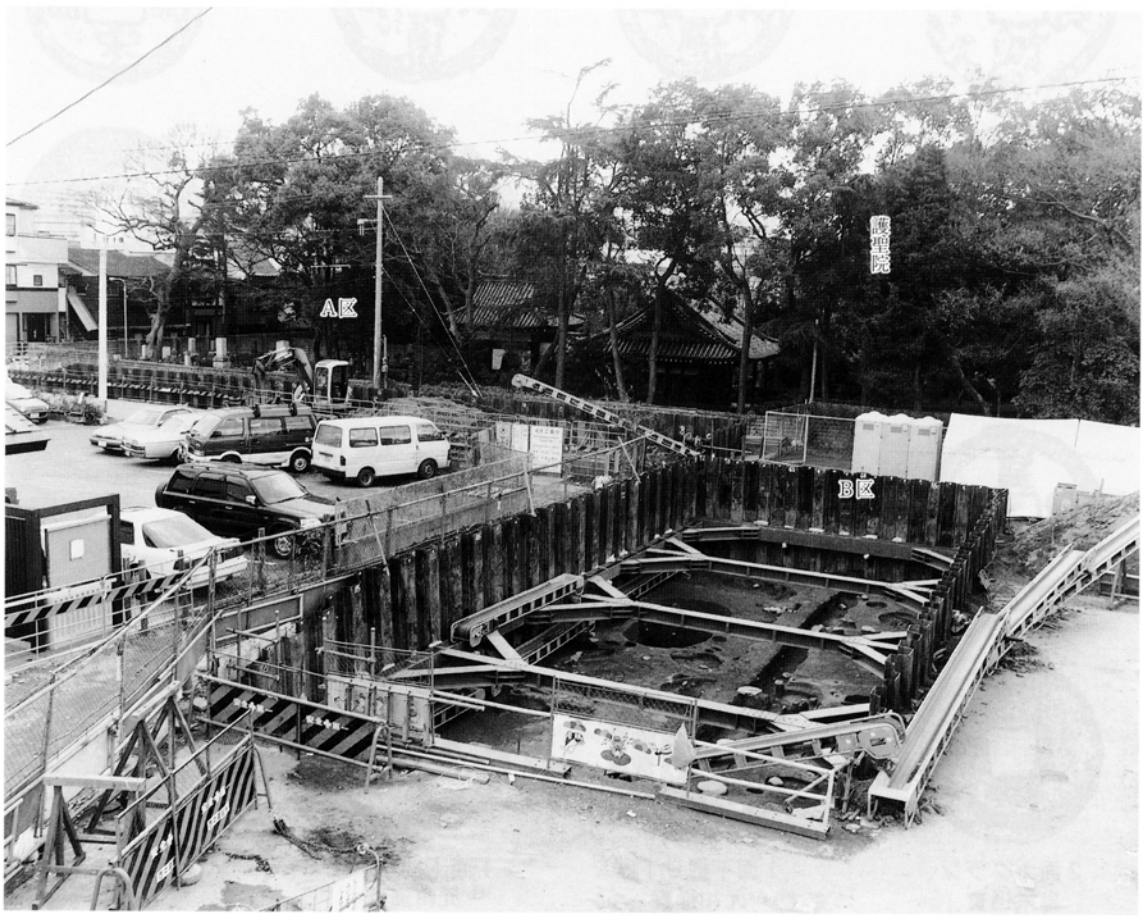
１．発掘調査の方法

第120次調査では、第102次調査・第107次調査とは異なり、矢板打ち込みから地中梁工事までが、事前に行われることになった。したがって、周囲の矢板打ち込み、現地表下130cm までの表土掘削・搬出、地中梁工事などの終了を待って、平成11年10月28日、発掘調査に着手した。

第120次調査では、調査対象地が二地点に分かれた。発掘調査期間としては継続した調査であったため、調査次数・調査番号はひとつになっているが、調査内容は全く異なり、設定した遺構検出面の枚数も違う。したがって、本報告にあたっても、両者を分け、調査時の呼称であるＡ区・Ｂ区を用いて、別々に報告することにした。

発掘調査にあたっては、前二地点と同様、道路用地の一部分が通路として既に使用されていたため、矢板打ち込み範囲が著しく限定され、大量の未掘部分を生んだ。この調査対象からはずれた部分は、前二地点とは異なり、民家に接しておらず、残土置き場として使用することができた。

Ａ区の発掘調査では、良好な整地面の累重がみられ、これら整地面を手がかりに遺構検出面を設定した。調査前の表土搬出直後の面は、標高４ｍ程度で、灰色粘土の整地面を露呈していた。しかし、顕著な遺構はほとんどなく、遺構検出面としては有効ではなかった。実は、この標高は、調査区に隣



Ph.112　120次調査地点遠景（南より）

接した聖福寺塔頭護聖院の現地表と大差なく、近世頃の寺院の敷地内と思われた。そこで、さらに20～30cm 下に確認できた、炭層直下の整地粘土層を第１面として、調査を開始した。

以下、長辺方向にトレンチを設定、遺構壁面に表れた土層の変化を参照しつつ遺構検出面を設定し、第２面から第５面までの掘り下げ、精査を実施した。

２．基本層序

第120次調査Ａ区の基盤は、北西側では砂丘砂である。この砂丘上面は、調査区の丁度中程から急激に下降し、南東側では、汚染された砂の堆積となる。砂丘の傾斜は、浅い谷状地形の存在に起因すると思われるが、本調査地点での谷地形は、博多遺跡群のこれまでの地形復元からは、想定されていなかった。この地形環境の復元については、第６章で検討を加える。

調査区南東側に堆積した、汚染された砂の堆積の下層には、グライ化した泥土層が、水平方向に堆積しており、湿地状態であったことを示している。すなわち、砂丘が落ち込んだ谷状地形は湿地となり、おそらく人為的に埋め立てられ、生活域に取り込まれたと思われる。埋立による.と思われる砂の直上から、第1面までの間には、分厚い整地層が堆積している。整地層には、遺構の掘り込み面・焼土面・粘土面などから、数回の単位が認められ、たびたび整地と建て替えが行われた様子がうかがわれる。Ａ区で調査した第１面から第３面までは、この整地層中に設定した遺構面である。第４面は、埋立と考えられる砂層の上面から砂丘面にかけて、第５面は、埋立下部にあたる。

Ph.113　調査区南東端トレンチ（北西より）

3．各遺構検出面の概要

第１面

標高3.6～3.8m で設定した遺構面である。灰色粘土による整地面で、直上を炭層が覆っていた。火災により廃絶した生活面であろう。

調査区南東端で、井戸の切り合いが検出された。上位にある041号遺構は15世紀末頃、下位の042号遺構は14世紀の井戸と思われる。

第１面の時期としては、14世紀前半から中頃と思われる。

第２面

標高3.2～3.5m である。黄灰色粘土面を指標に設定した。調査区の南東側で、薄く炭を被り、玉砂利が集中する部分が検出された（101号遺構、後述）。

14世紀前半を中心とする時期の遺構を検出した。

第３面

標高2.9～3.1m を測る。黄色粘土面で設定した。一部では薄い焼土を挟んで直下にも同様の粘土面があり、第３Ｂ面として部分的に設定している。

13世紀後半を主とする。

第４面

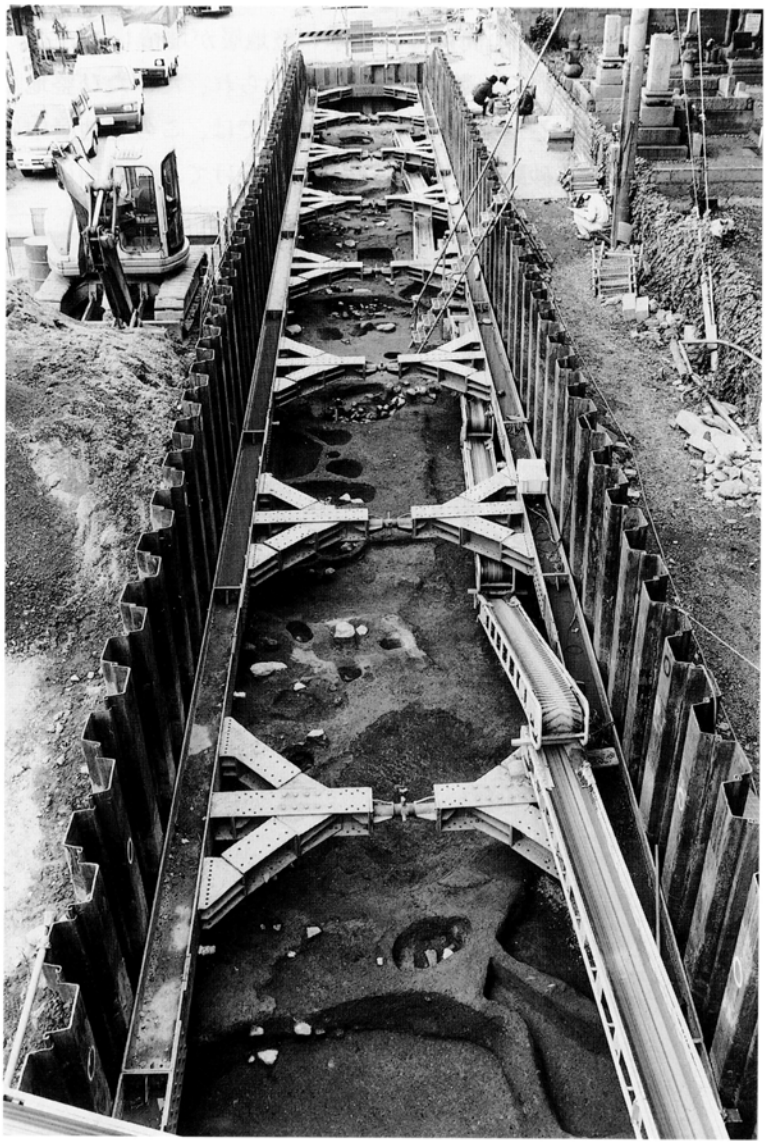
標高2.9～2.3m と、北西から南東に傾斜する。砂質土層の上面で設定した。

調査区中央で東西方向に土質の変化がみられたが、第５面の池状遺構（408号遺構）の埋土が露出したものである。

13世紀の遺構を検出した。

第５面

標高2.9～2.2m を測る。最下層の確認のために設定した遺構検出面である。砂丘谷部に営まれた溝（410号遺構、12世紀後半）が、最も遡る遺構となる。なお、砂丘状に営まれた土壙墓（376号遺構）は、11世紀代の可能性がある。



Ph.114　第１面全景（南東より）

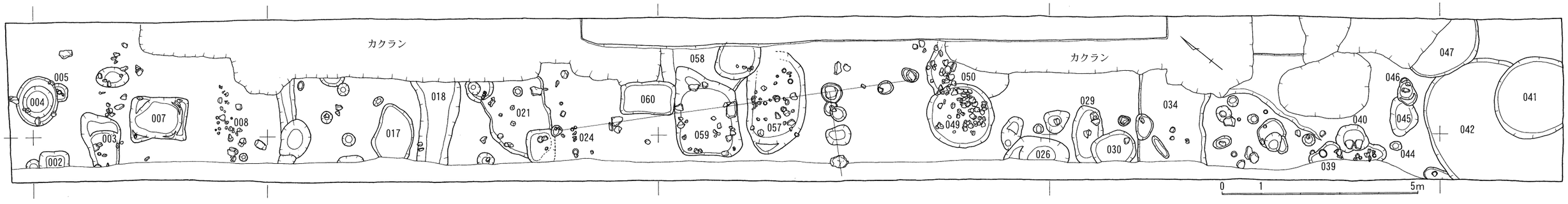


Fig. 135　第１面遺構全体図（1/100）

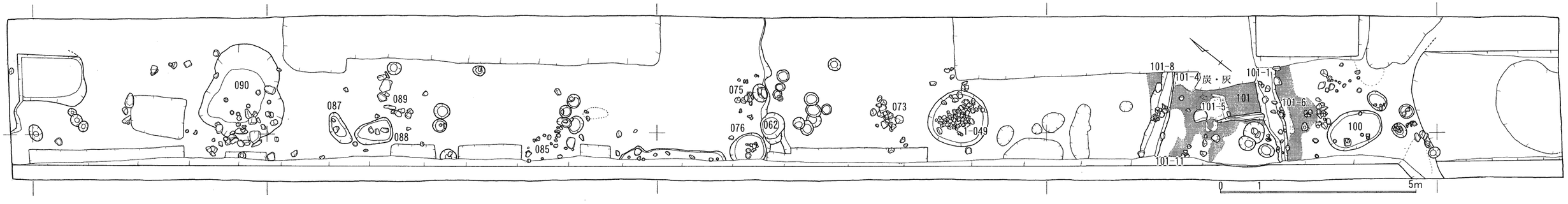


Fig. 136　第２面遺構全体図（1/100）

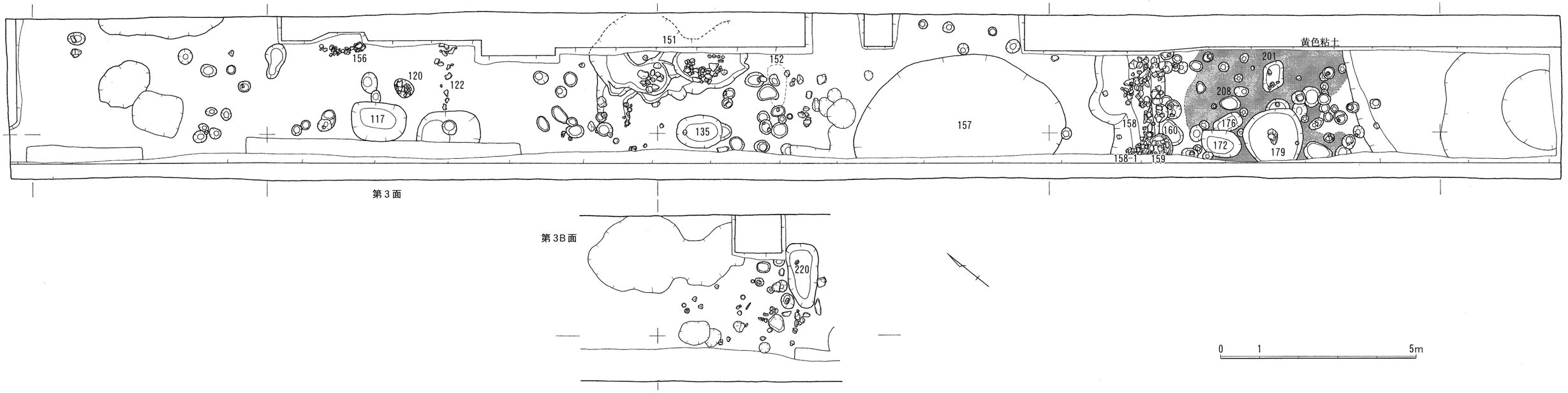


Fig. 137　第３面遺構全体図（1/100）

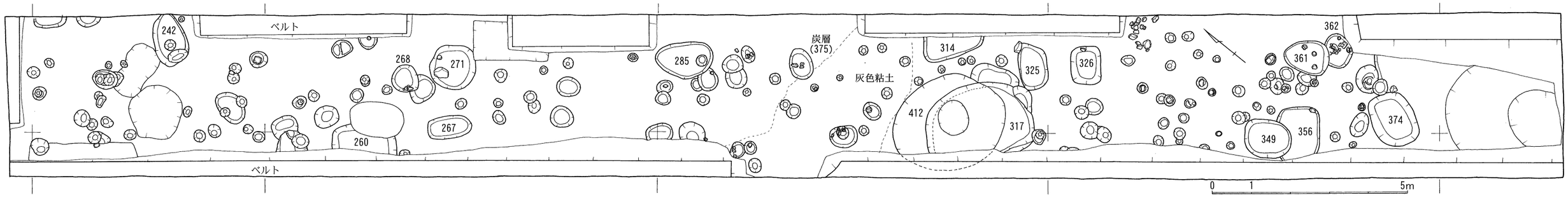


Fig. 138　第４面遺構全体図（1/100）

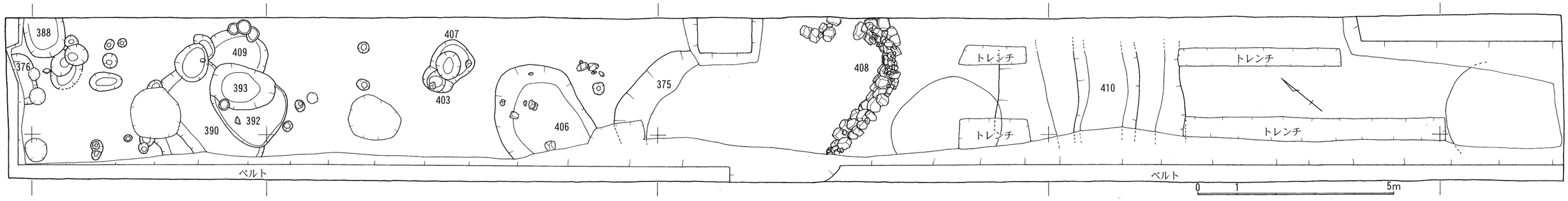


Fig. 139　第５面遺構全体図（1/100）

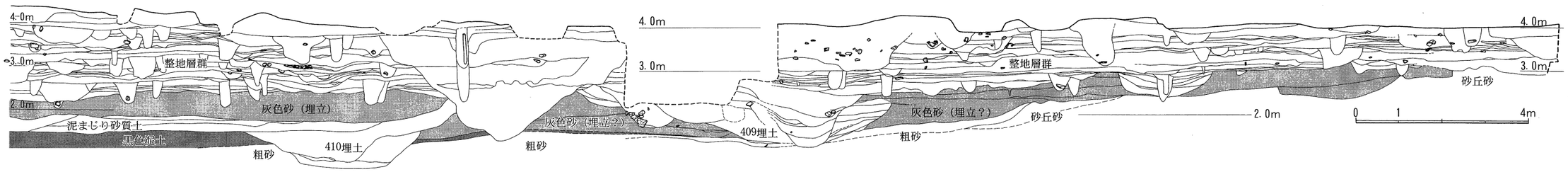


Fig. 140　120次Ａ区南西壁土層実測図（1/100）

4．遺構と遺物

（1）埋葬遺構

376号遺構

第5面の、北西辺において検出した土壙墓である。砂丘状に営まれている。過半が調査区外にでると思われ、全容は知り得ない。極めて遺存状態が悪く、取り上げられなかったが、人間の下肢骨と思われる骨片が出土しており、土壙墓と考えて大過なかろう。

出土遺物は少なく、時期を決め難いが、底部篦切りで丸底に作る土師器坏の小片が出土しており、11世紀代の遺構である可能性がある。

Ph.115　376号遺構人骨出土状況（東より）

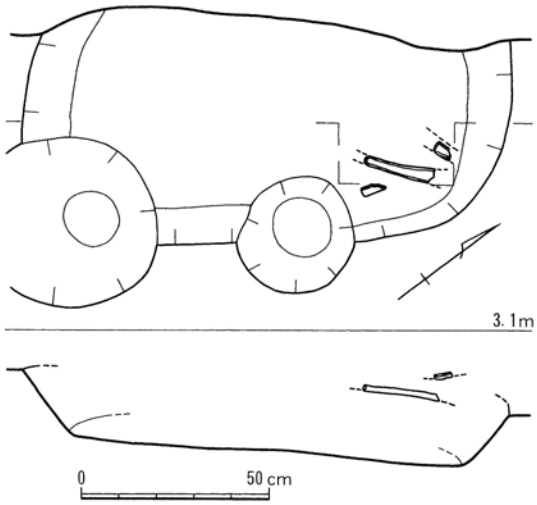


Fig.141　376号遺構実測図（1/20）

（2）土坑

007号遺構

第1面で検出した土坑である。長辺140cm、短辺100cm の長方形を呈し、深さは130cm を測る。

出土遺物を Fig.142に図示する。1～7は、**土師器**である。1～5は皿で、体部中程で屈曲して丸みを持つ2・5と、直線的に短く立ち上がる1・3・4とが見られる。6・7は坏である。これらの皿・坏の底部は、回転糸切りされる。8は、**褐釉陶器**の茶入れである。胎土は極めて肌理が細かく、薄く作られている。9は、**白磁**の口禿皿である。10～12は、**青磁**である。10は碗で、口縁部は外反する。11は、皿である。畳付まで釉がかかり、高台内のみ丸く露胎とする。13～15は**瓦質土器**である。13は香炉で、口縁下に丸く隆起した珠文と菊花の印花文とが並ぶ。脚が付いていたと思われるが、剥離している。14・15は、すり鉢である。16～22は、**土師質土器**である。16～20はすり鉢、21はこね鉢、22は土鍋である。

Ph.116　007号遺構（南東より）

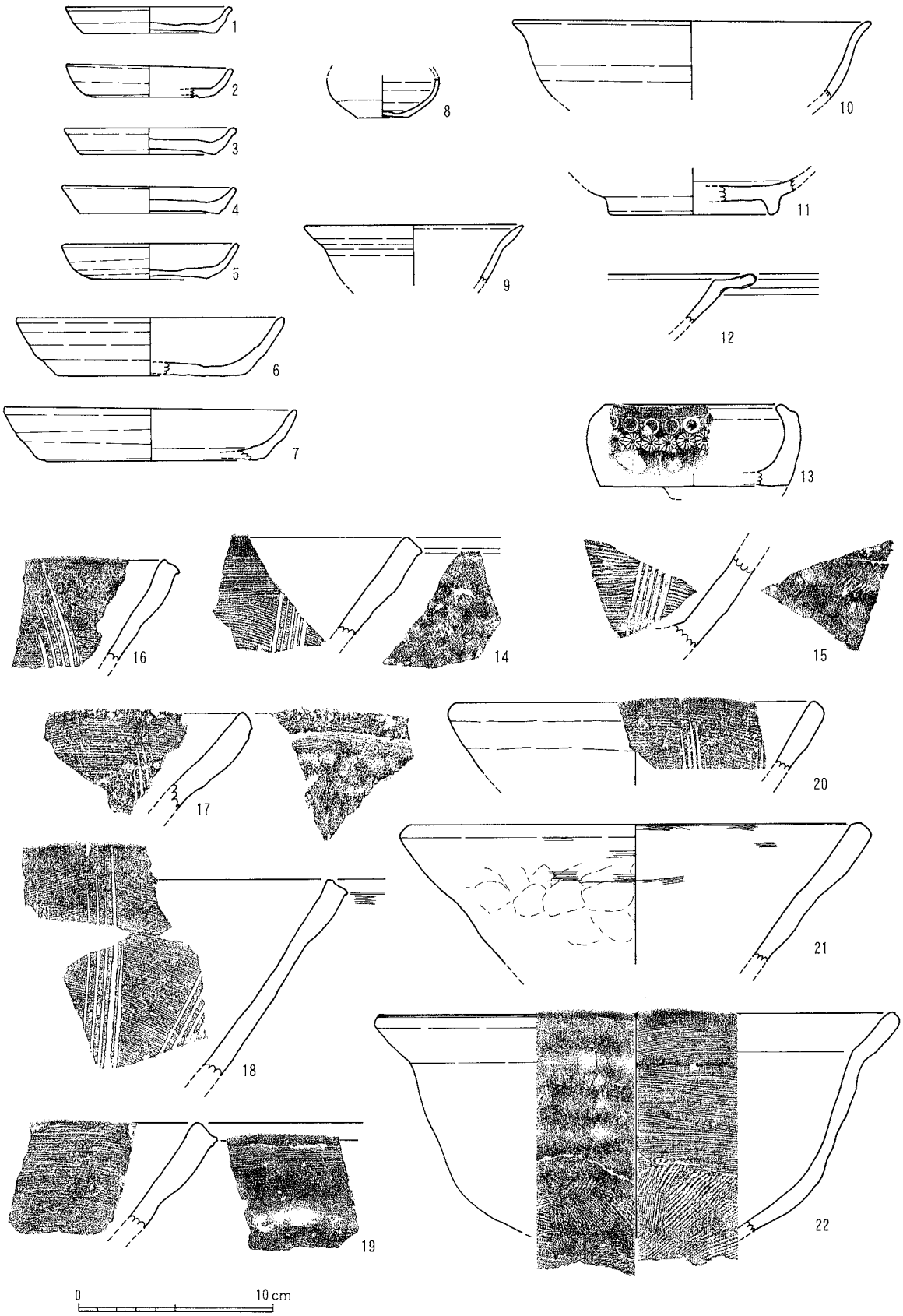


Fig. 142　007号遺構出土遺物実測図（1/3）

22の外面には、厚く煤が付着している。この他、青磁・天目茶碗・鉄滓などが出土している。

14世紀後半に位置づけられよう。

008号遺構

第１面から検出した、遺物の集積遺構である。幅60cm、長さ170cm にわたって、土師器の皿・坏、瓦質土器のすり鉢・銅銭などが、散布していた。上層からの掘り下げに際して出土しており、精査したが明瞭な掘り方は確認できなかった。なお、遺物は、標高3.95～3.7m にかけて、北から南に緩やかに下降しつつ出土している。

出土遺物を **Fig.143**に示す。１～13は、**土師器**である。１～９は皿で、３・４の口縁部には油煙が付着しており、灯明皿として用いられたことを示している。10～13は坏である。10は、肉厚で、体部の立ち上がりが急で筒状を呈している。通有の坏とは明らかに一線を画しており、注意を要する。14は**青磁**の端反碗、15は**天目茶碗**である。16は**土師質土器**のすり鉢、17は**瓦質土器**のすり鉢である。内面は、使用のため擦れてすり目が消えている。18は、土師器の**土鍋**である。19は**平瓦**で、コビキ痕がみられる。20・21は、**石製品**である。20はぎっちょう玉、21は砥石である。

14世紀後半の廃棄土坑であろう。

021号遺構

第１面で検出した土坑である。不整形の大形の土坑だが、掘り込みは浅い。

出土遺物を **Fig.144**に示す。１～５は**土師器**である。１～３は皿である。１は小振りだが器高が高いタイプ、２は偏平なタイプ、３は体部が丸みを持つタイプで、底部は回転糸切りする。４・５は、坏である。５は大形の坏で、口径18.2cm を測る。回転糸切りである。６は、**瓦質土器**の香炉である。口縁下に浅い沈線を巡らし、菊花のスタンプを押す。７は、**青白磁**の腰折皿である。内面見込みには、鳳凰の羽と思われる印花文、体部に菊弁を彫る。８は、**土鍋**である。９～14は**瓦質土器**で、９～11は火鉢、12～14はすり鉢である。15は、**平瓦**である。小口の面取りなど、丁寧に調整されている。

14世紀後半～15世紀の廃棄土坑と考えられる。

Ph.117　085号遺構（北西より）

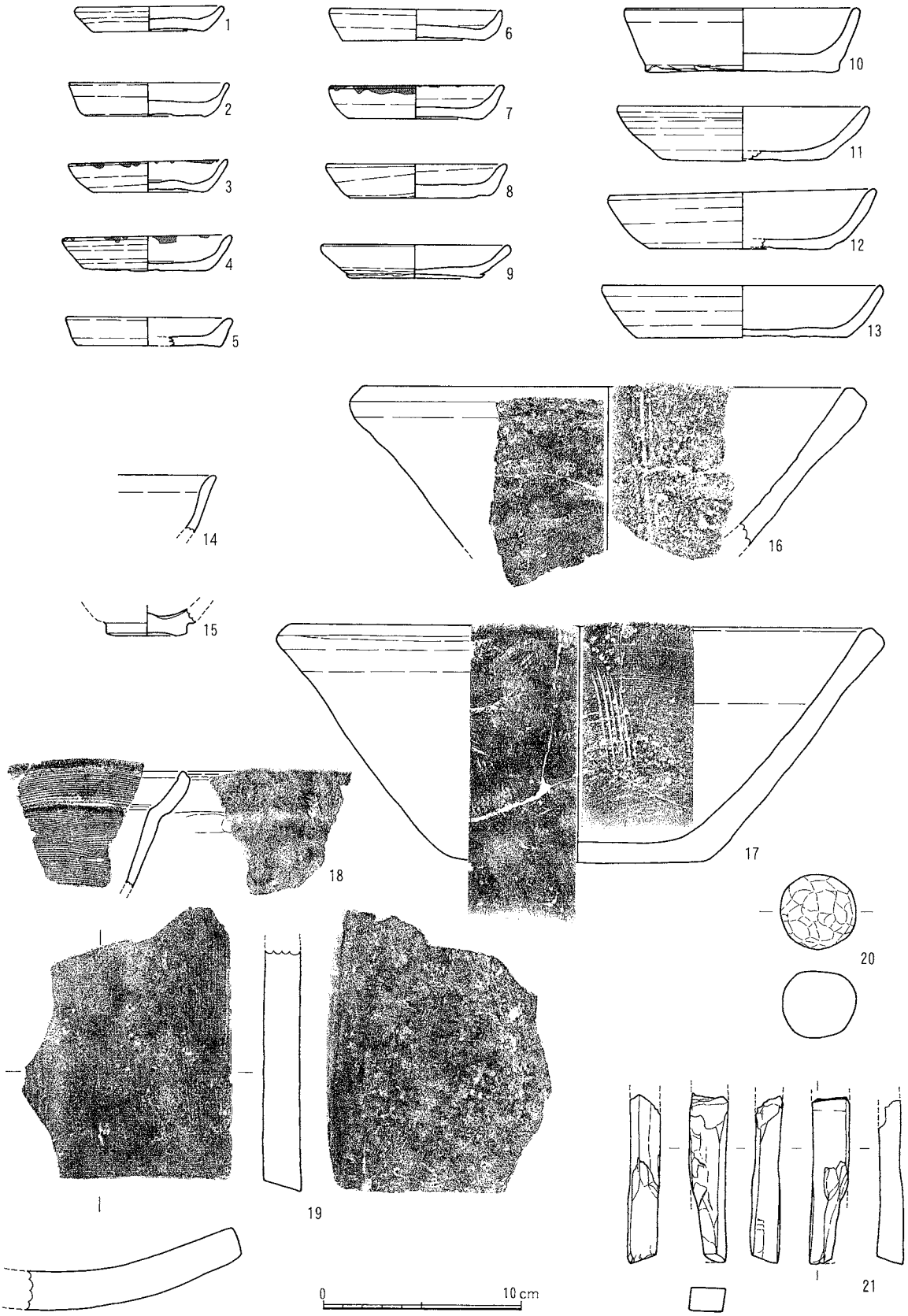


Fig. 143　008号遺構出土遺物実測図（1/3）

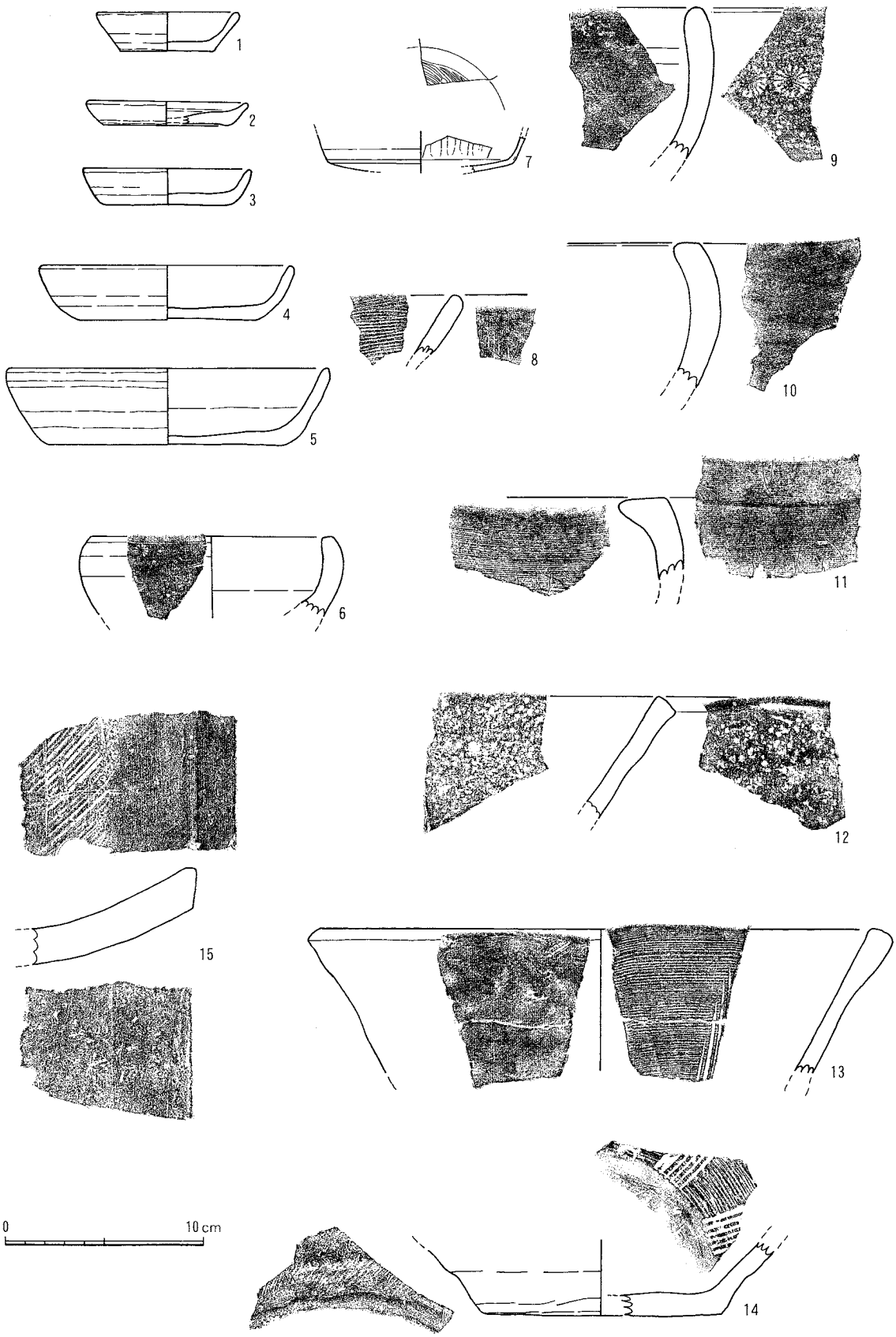


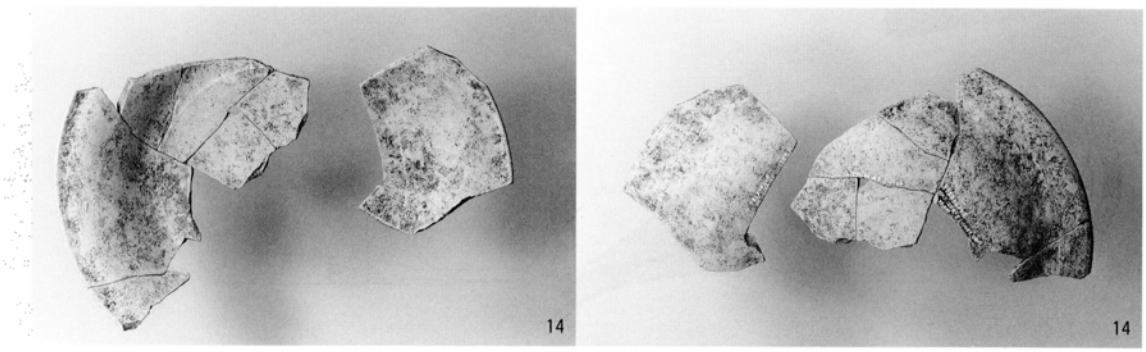
Fig. 144　021号遺構出土遺物実測図（1/3）

049号遺構

第１面より検出した土坑である。径170cm 前後の円形を呈し、土坑内からは大量の礫がまとまって出土している。土坑の上面では、礫は土坑の北側に間断なく延びており、廃棄というよりも意図的におかれた可能性が高い。機能・性格は、明らかにし得なかった。

１～14は、**土師器**である。１～７は皿である。全体に器高の高めなものが多い。８～12は、坏である。以上は在地の土師器で、底部を回転糸切りする。13も坏であるが、口径に対して底径が著しく小さく、体部は大きく開く。器壁は薄く、強いロクロ目がつく。胎土は精良で、灰白色を呈する。搬入土師器であろう。14は**京都系土師器**で、伊野分類のIa-１類である。内外面に赤色顔料で、紅葉の葉を散らす。15は、**須恵器系陶器**の卸皿である。口縁部直下には菊花のスタンプを巡らし、内底部には篦で卸目を刻む。生産地は不明だが、特異な製品で、注文生産品であろう。16は**青磁**碗、17・18は**白磁**碗である。17の見込みは露胎で、白砂が輪状に巡り、赤茶色の胎土目が三ヶ所につく。19は、**瓦質土器**のこね鉢である。20は**土師質土器**のすり鉢、21は**備前焼**のすり鉢である。間壁編年Ⅳa 期に属する。22は、土師器の

Ph.118　049号遺構（北東より）



Ph.119　049号遺構出土遺物

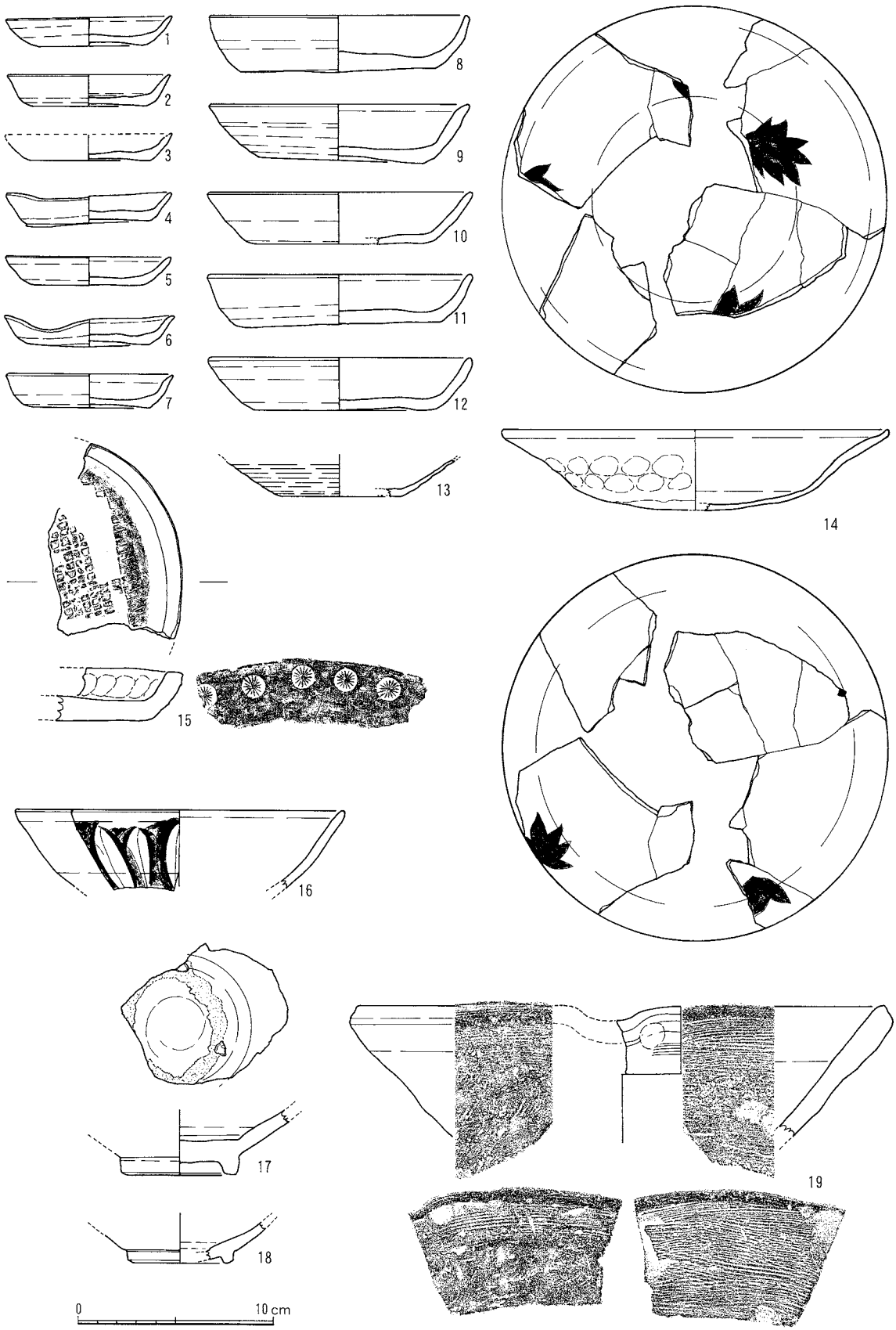


Fig. 145　049号遺構出土遺物実測図１（1/3）

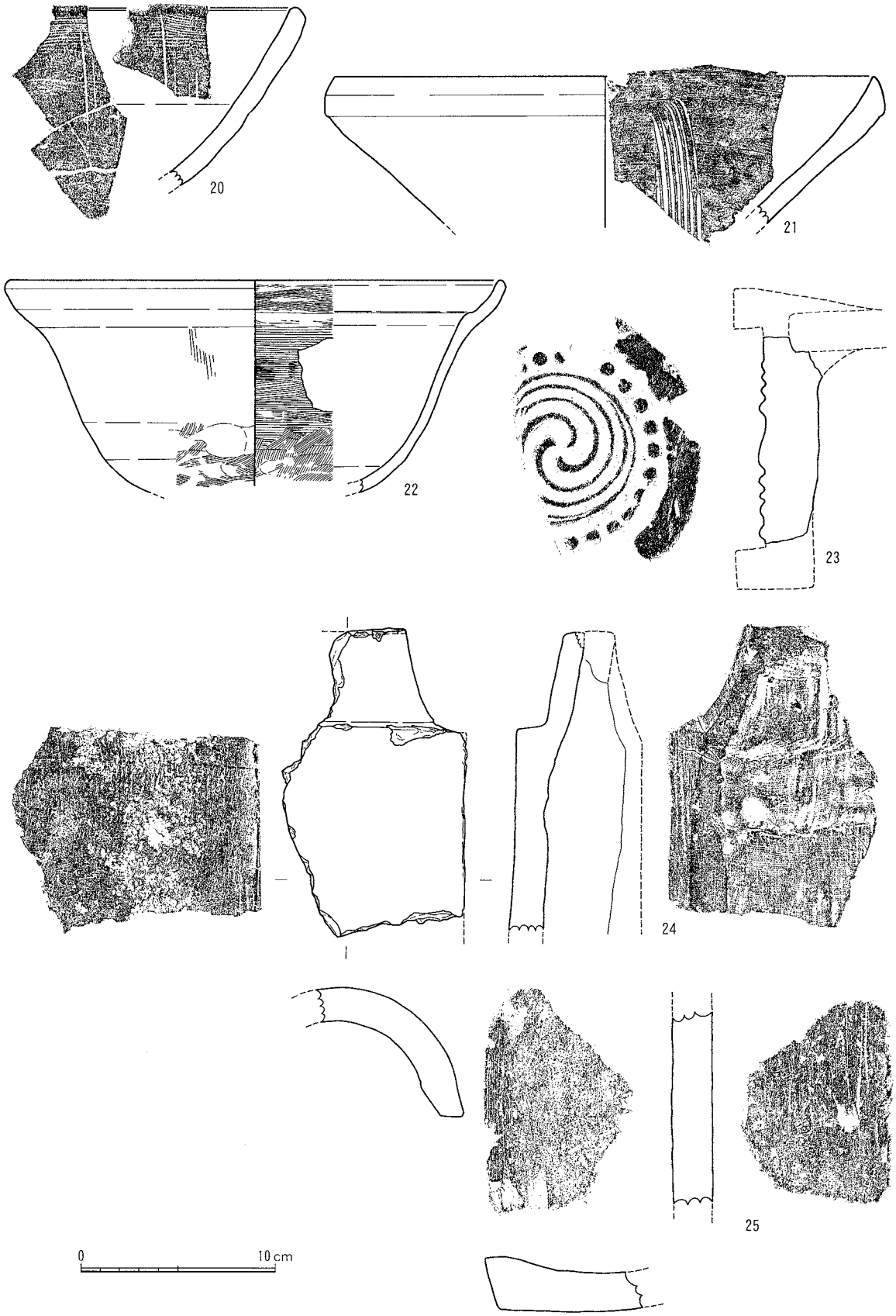
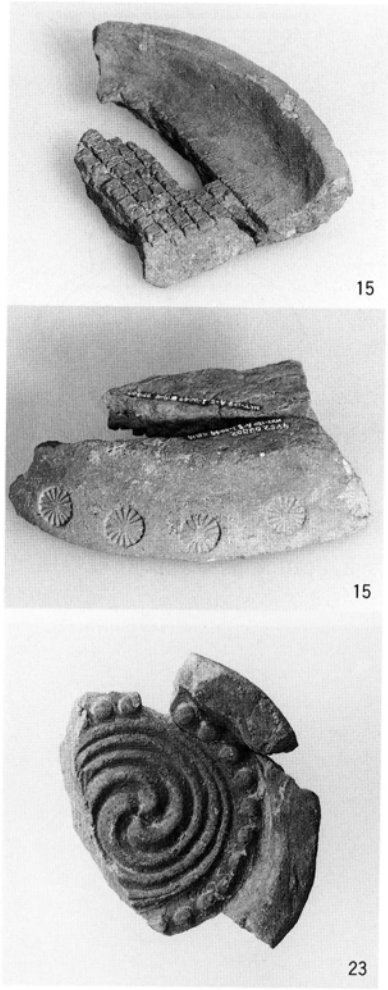


Fig. 146　049号遺構出土遺物実測図２（1/3）



Ph. 120　049号遺構出土遺物

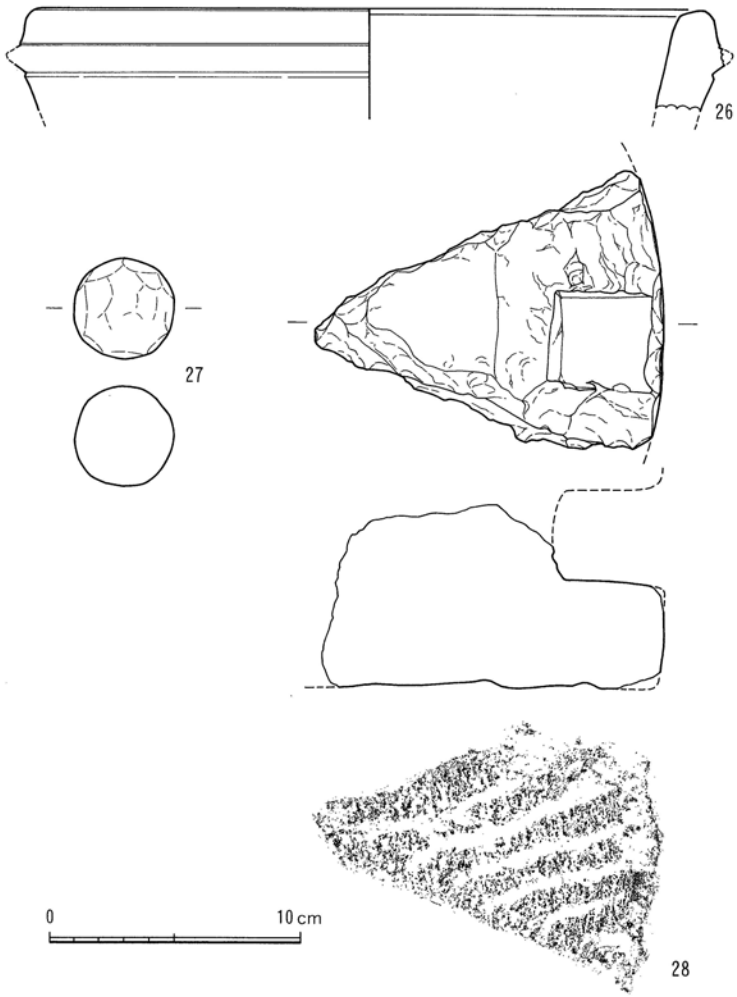


Fig. 147　049号遺構出土遺物実測図３（1/3）

土鍋である。23～25は、瓦である。24の丸瓦の外面には縄目痕、内面には布目根が残る。25は平瓦で、表面には離れ砂が付着している。26～28は、石製品である。26は石鍋、27はぎっちょう球、28は石臼である。28は小片だが、直径50cm 前後になると思われ、雑穀用の曳き臼であろう。

15世紀前半の土坑と思われる。

152号遺構

第３Ｂ面で検出した、かわらけ溜まりである。遺構検出面上に、土師器の皿・坏が集中しており、半割して精査したところ、土坑の底と思われる土質

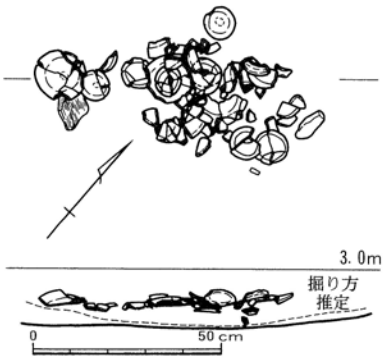
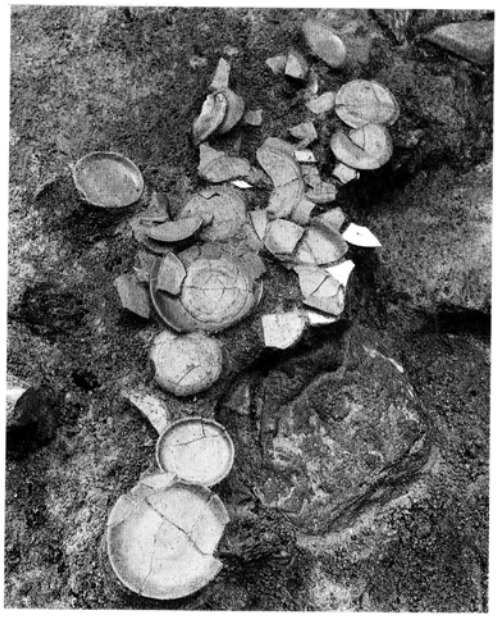


Fig. 148　152号遺構実測図（1/20）



Ph. 121　152号遺構（北より）

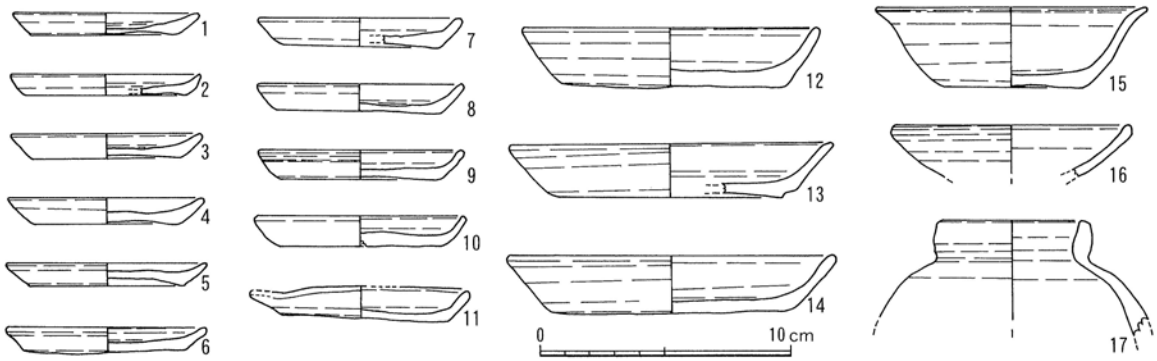
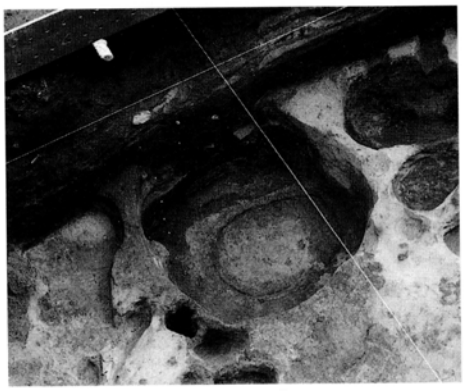


Fig.149　152号遺構出土遺物実測図（1/3）

の変化を確認した。よって、断言はできないが、浅い土坑に土師器を一括廃棄したものと考えられる。

出土遺物を Fig.149に図示する。1～14は、土師器である。1～11は皿で、口径7.4～8.6cm、器高0.9～1.25cm を測る。12～14は坏で、口径11.8～13.0cm、器高2.2～2.3cm を測る。これらの皿・坏の底部は回転糸切りである。15は、白磁の口禿皿である。16・17は陶器で、16は褐釉の皿、17は褐釉の瓶である。

13世紀代の遺構である。



Ph.122　179号遺構（東より）

179号遺構

第3面で検出した土坑である。径150cm 前後の略円形を呈し、深さは55cm 程度を測る。

出土遺物を Fig.150に示す。1～6は、土師器である。1～4は皿、5・6は坏で、ともに体部が直線的に開くものと丸みを持つものとがある。底部は、回転糸切りする。7～11は、青

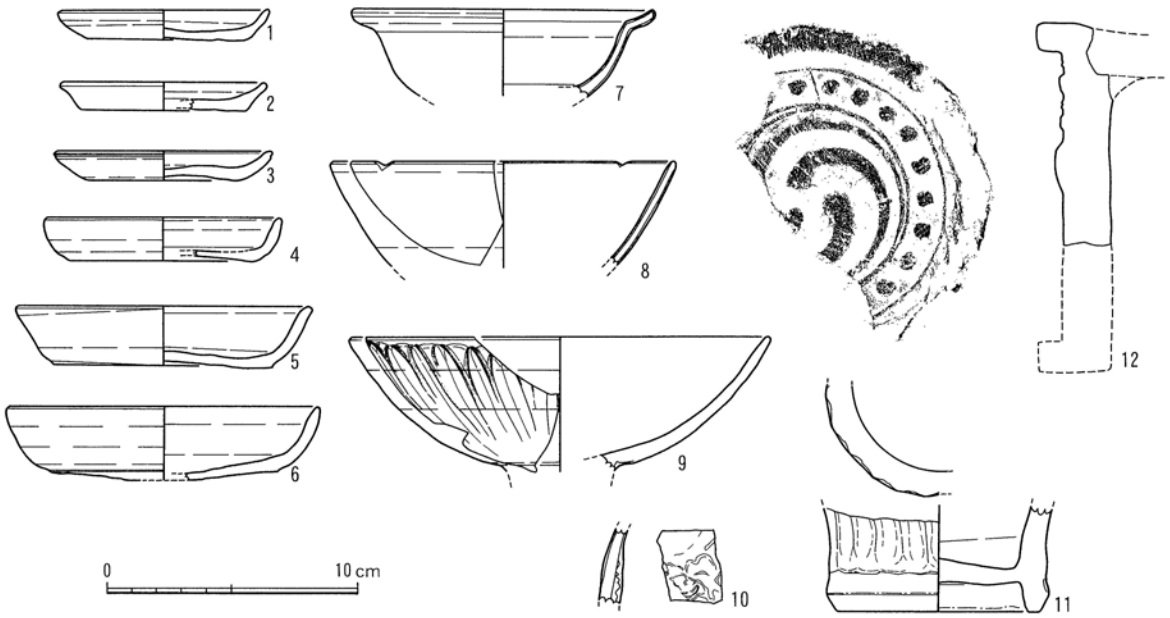


Fig.150　179号遺構出土遺物実測図（1/3）

磁である。7は小鉢、8・9は碗、10・11は花生けで、10・11は部位としては離れるものの同一個体の可能性が高い。12は、**軒丸瓦**である。このほか、平瓦（コビキ）片なども出土している。

13世紀後半頃の廃棄土坑であろう。

374号遺構

第4面で検出した土坑である。長径135cm、短径110cmの略楕円形を呈し、深さ約60cmを測る。埋土中程に、流れ込むような形で、礫・土器・陶磁器などが出土している。

出土遺物をFig.152～154に示す。1～13は、**土師器**である。1～6は、皿である。6は、体部が高く薄手、黄灰色を呈する白色系土師器である。ロクロ土師器で、底部は回転糸切りする。搬入品であろう。7～13は坏である。法量から3タイプに分かれる。9の口縁部には油煙が付着しており、灯明皿に用いられたことを示している。14～16は、**白磁**である。14・15は口禿の皿、16は口禿碗の底部である。17～23は、**青磁**である。17～19は小鉢、20・21は碗、22は盤である。全面施釉し、畳付きのみ釉を掻き取って露胎とする。23は水注である。24・25は、**青白磁である**。26～28は、**陶器**である。26は灰褐釉のこね鉢、27は褐釉の壺、28は黄釉の盤である。29は、滑石製の**石鍋**である。30～37は、**瓦**である。30・31は鬼瓦である。30には右眼・鼻・口の一部が残っている。31は、目の部分であろうか。突出していた筈の眼球部分は、剥落している。破面に右鼻孔の一部と口の一部が認められる。32～35は平瓦であ

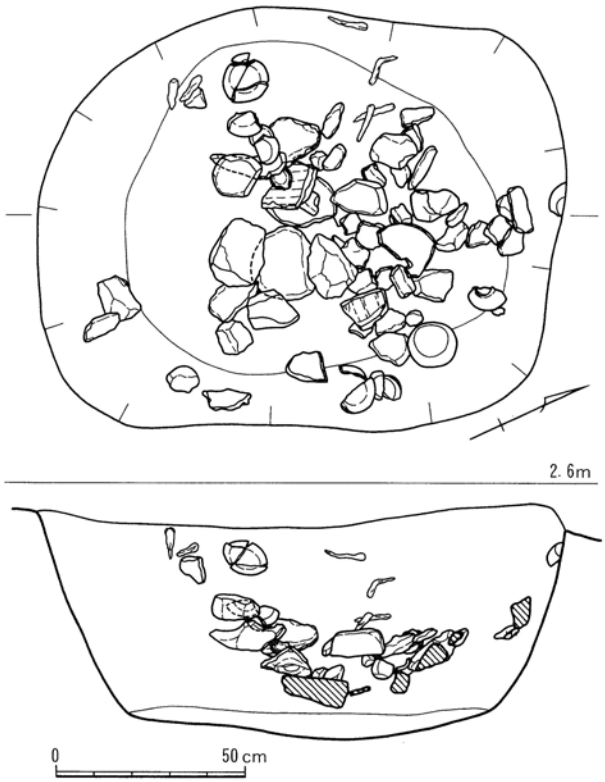
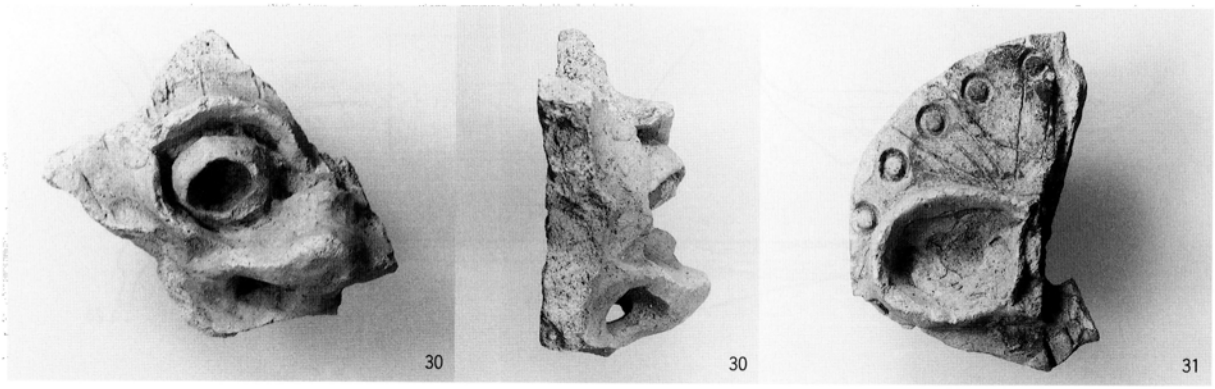


Fig.151　374号遺構実測図（1/20）

Ph.123　374号遺構（北東より）



Ph.124　374号遺構出土遺物

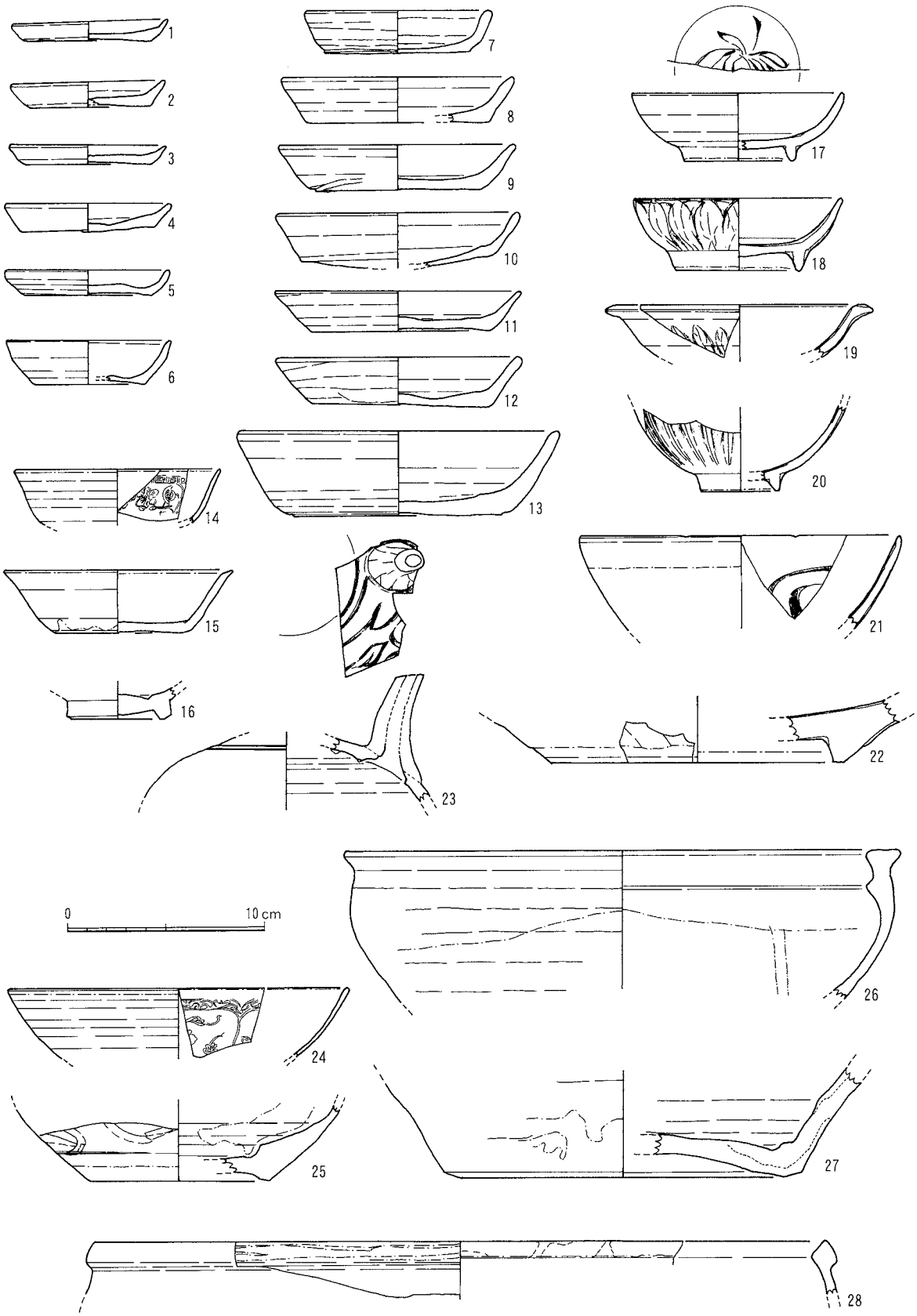


Fig. 152　374号遺構出土遺物実測図１（1/3）

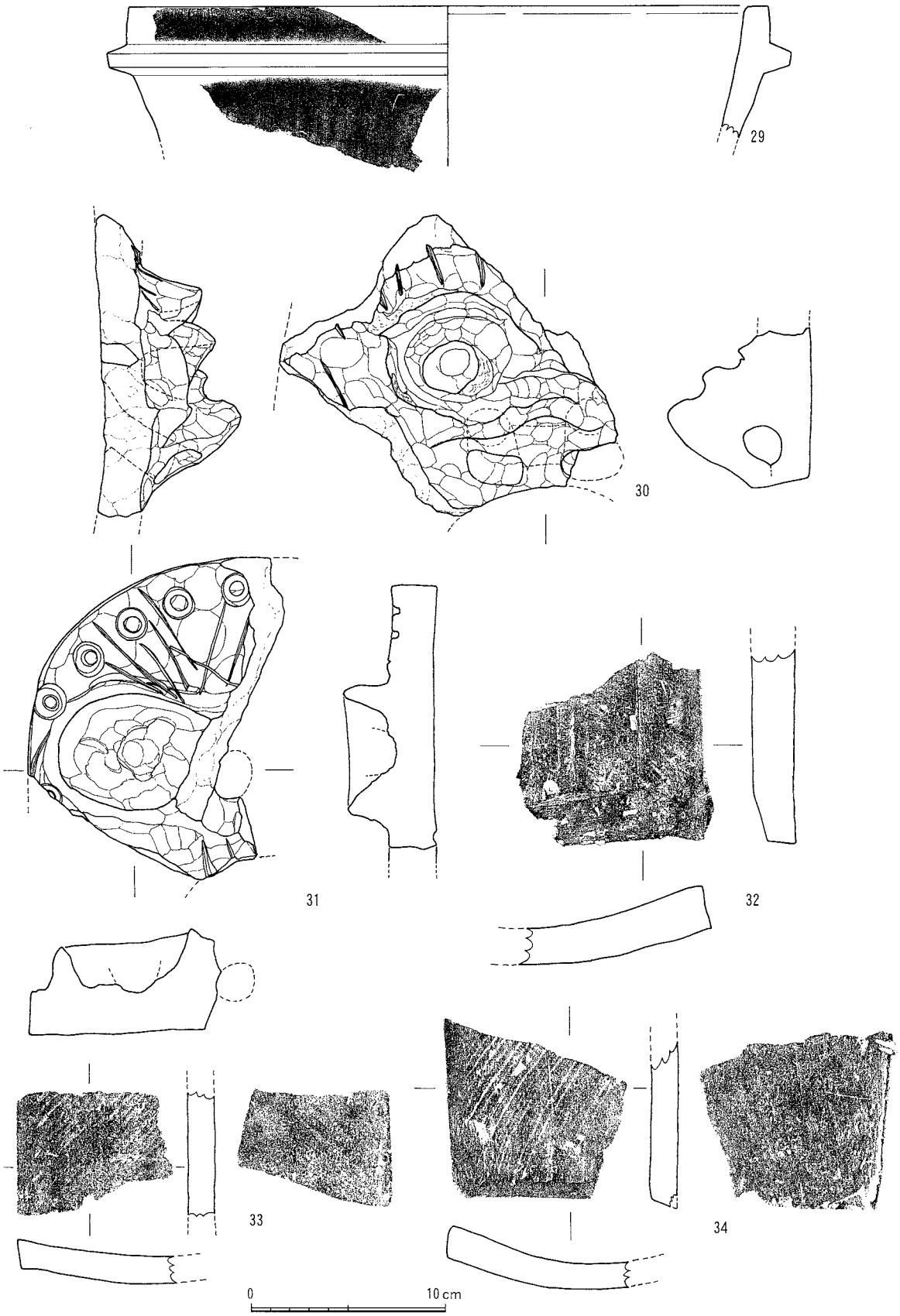


Fig.153　374号遺構出土遺物実測図２（1/3）

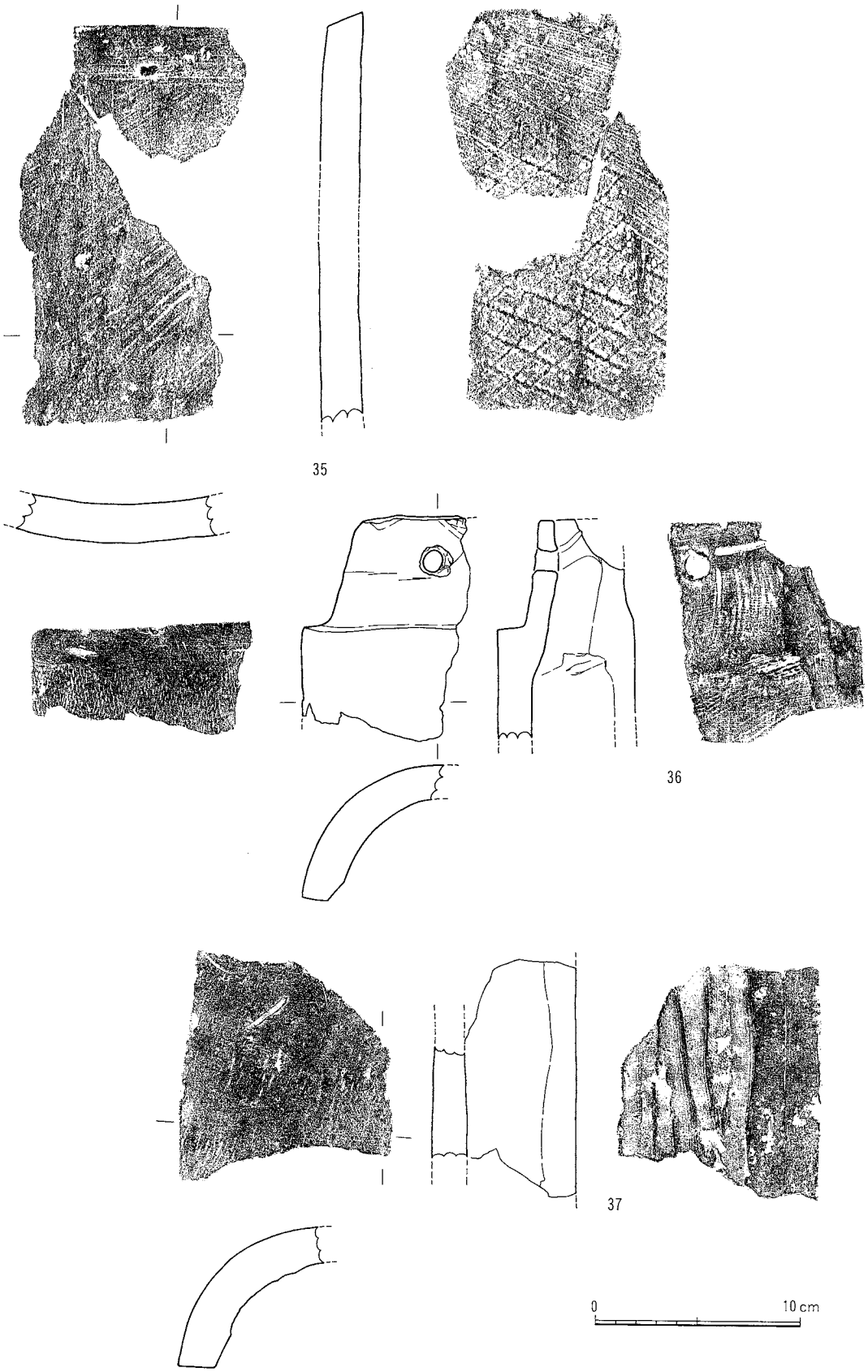


Fig.154　374号遺構出土遺物実測図３（1/3）

る。コビキ痕が見られ、35ではコビキ痕に格子叩き目が被っている。36・37は、丸瓦である。このほか、鉄釘・炭化米のかたまり（おにぎり状か）が出土している。

青磁盤の高台から、14世紀後半と思われる。

（3）井戸

412号遺構

第4面で検出した井戸である。317号遺構（大型土坑）に切られるが、第3面においてもこの部分で大きな掘り込みの存在を確認しており、317号遺構と412号遺構にあたる可能性がある。

Ph.125　412号遺構（北東より）

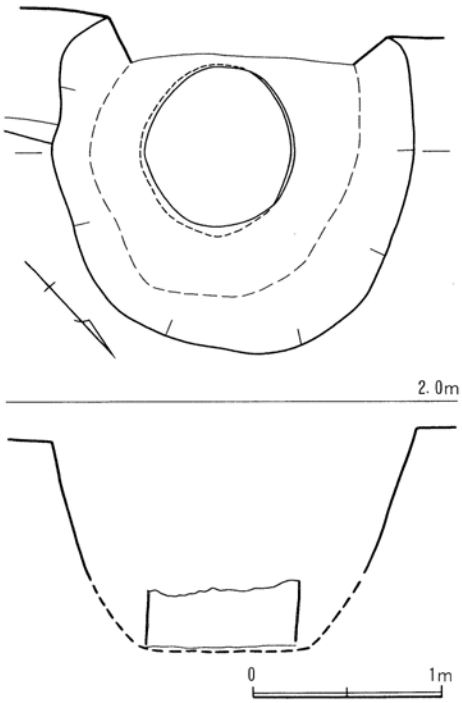


Fig.155　412号遺構実測図（1/40）

412号遺構の掘り方は、第4面上では、さしわたし280cmを測る。Fig.155に示したのは、第5面で作成した実測図である。井側には、直径80cmの結い桶を据える。

土師器（底部回転糸切り）・白磁（口禿）・陶器・瓦（コビキ）・砥石などが出土しており、13世紀後半～14世紀前半の井戸である。

（4）溝状遺構

122号遺構

第3面で検出した溝状遺構である。幅30cm程度の浅いくぼみに、瓦が投棄された状態で検出されたもので、調査区を南西から北東に横断している。

出土遺物をFig.156に示す。1・2は、**土師器**である。1は皿であるが、体部の立ち上がりは非常に小さく、偏平になる。2は坏で、体部下位に棒状工具が当たったへこみが見られる。皿・坏とも、回転糸切りである。3～5は**平瓦**、6は**丸瓦**である。いずれもコビキ痕跡をとどめ、離れ砂が付着している。

14世紀前半頃であろう。

Ph.126　122号遺構（南より）

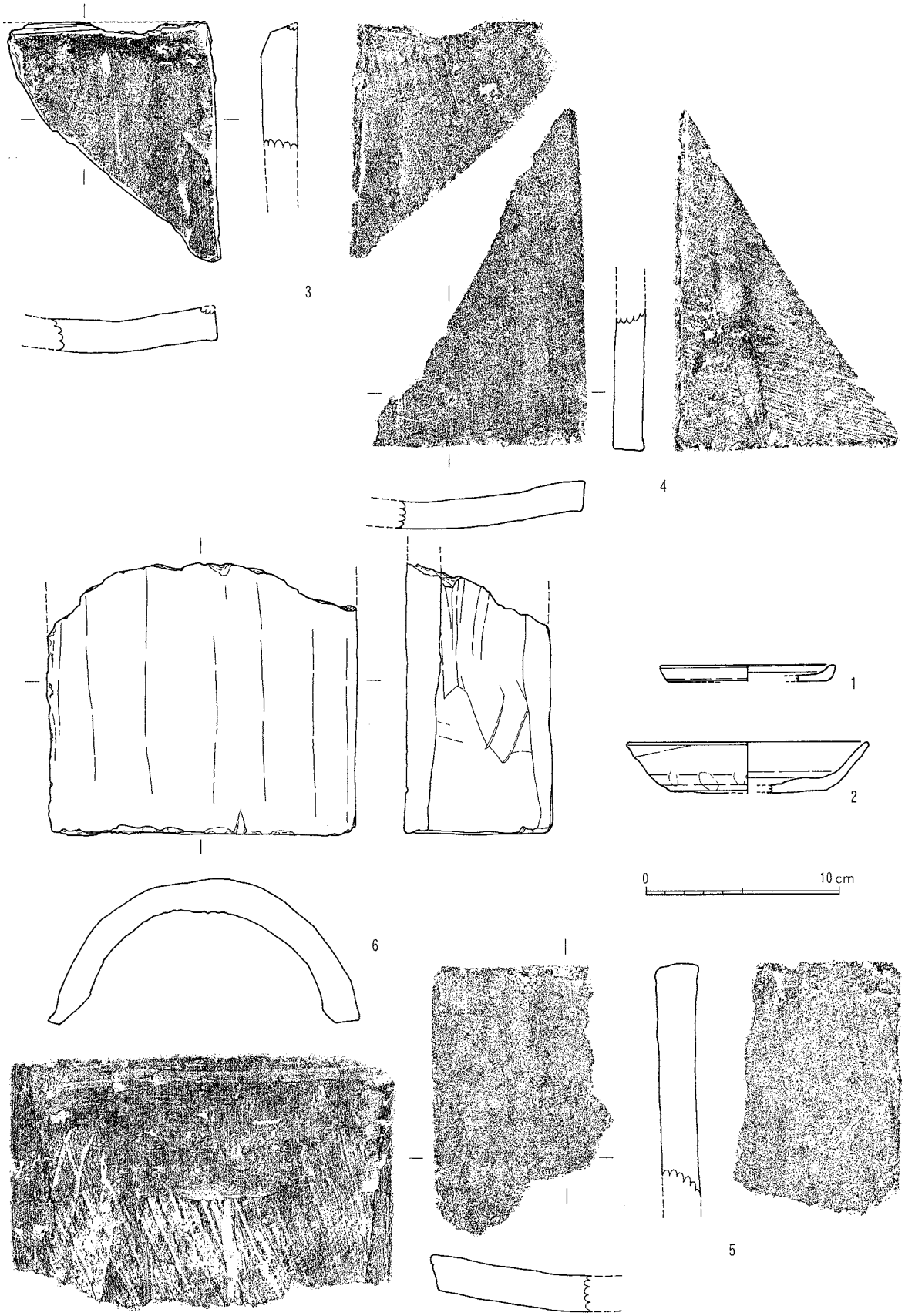


Fig. 156　122号遺構出土遺物実測図（1/3）

156号遺構

第３面から検出した、溝状遺構である。規模・構造等は、122号遺構とほぼ同様であるが、122号遺

Ph.127　156号遺構（南東より）

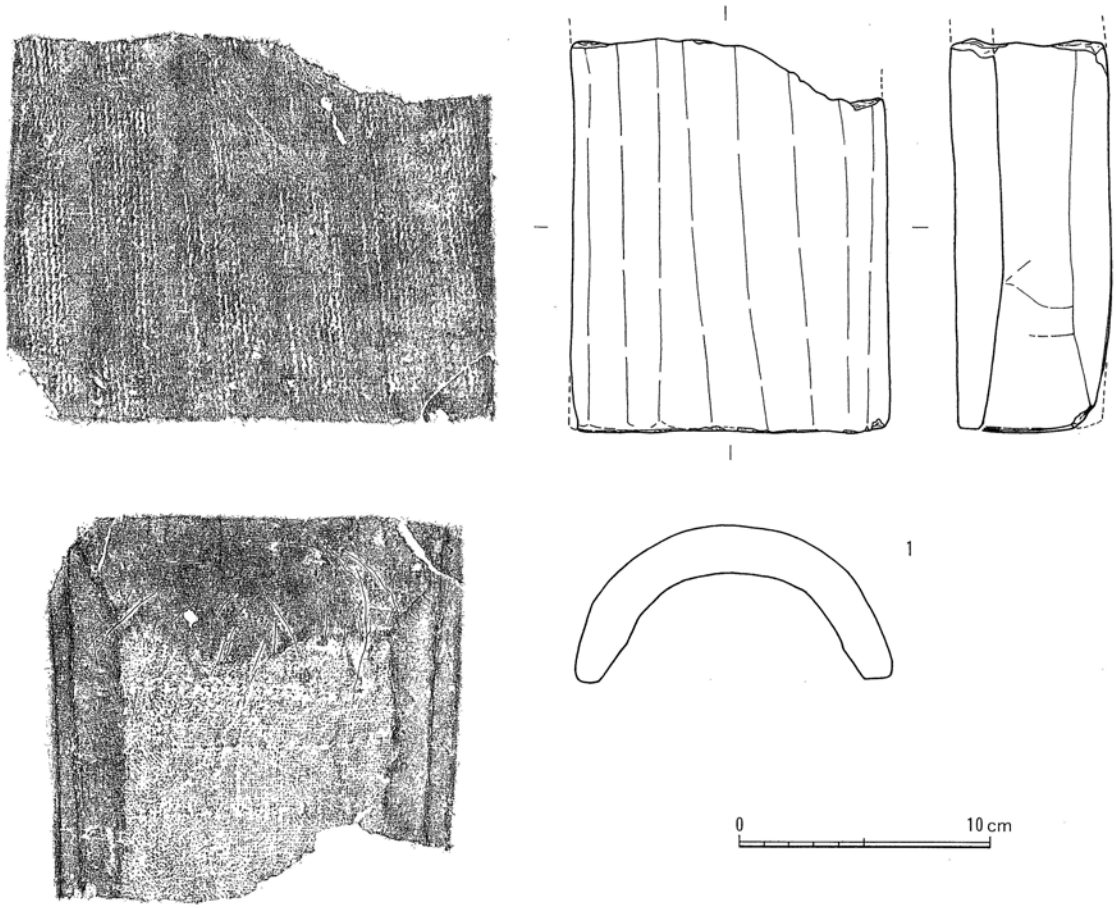


Fig.157　156号遺構出土遺物実測図１（1/3）

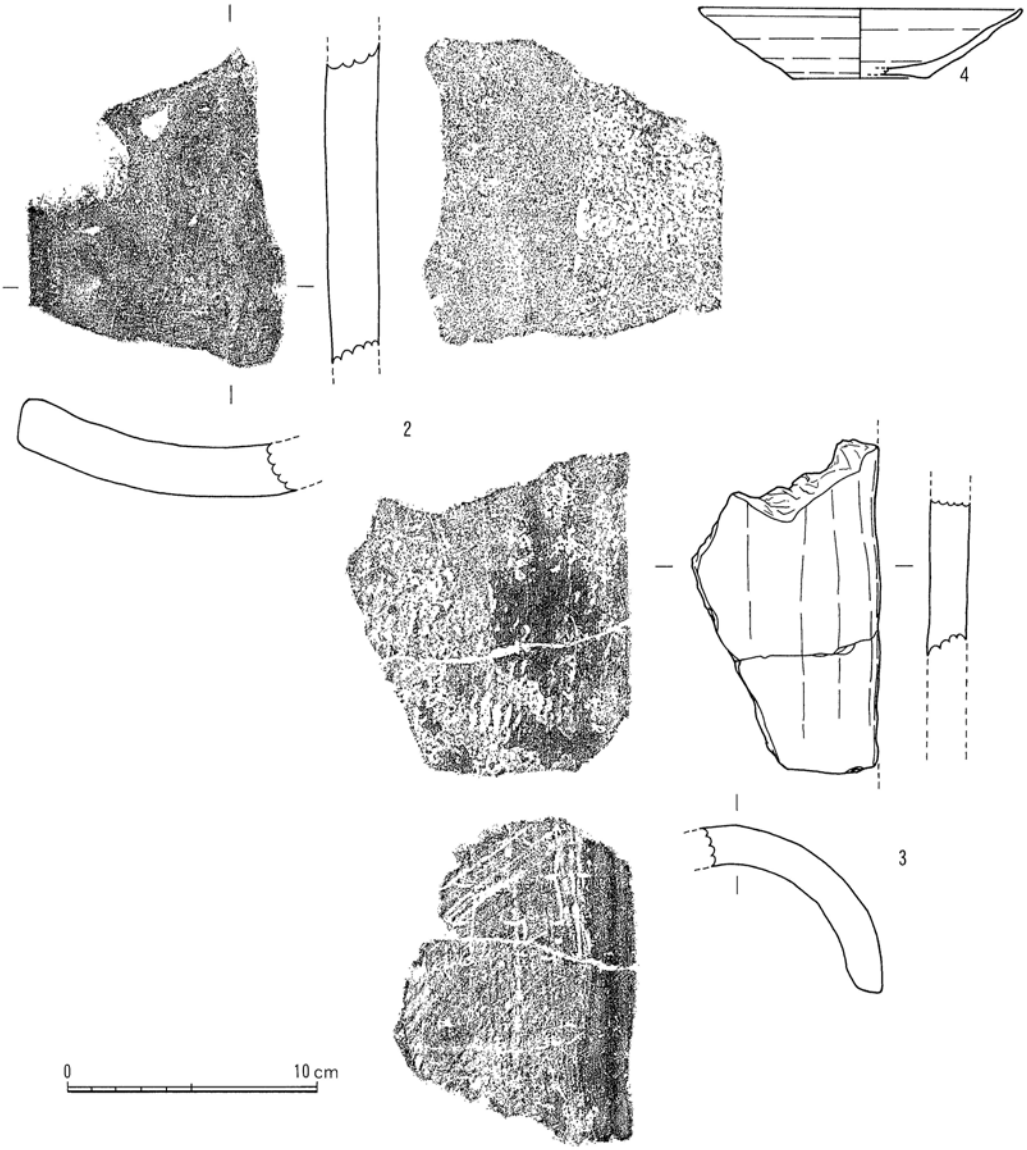


Fig. 158　156号遺構出土遺物実測図２（1/3）

構と直交する方位を取る。一連の遺構と言えよう。

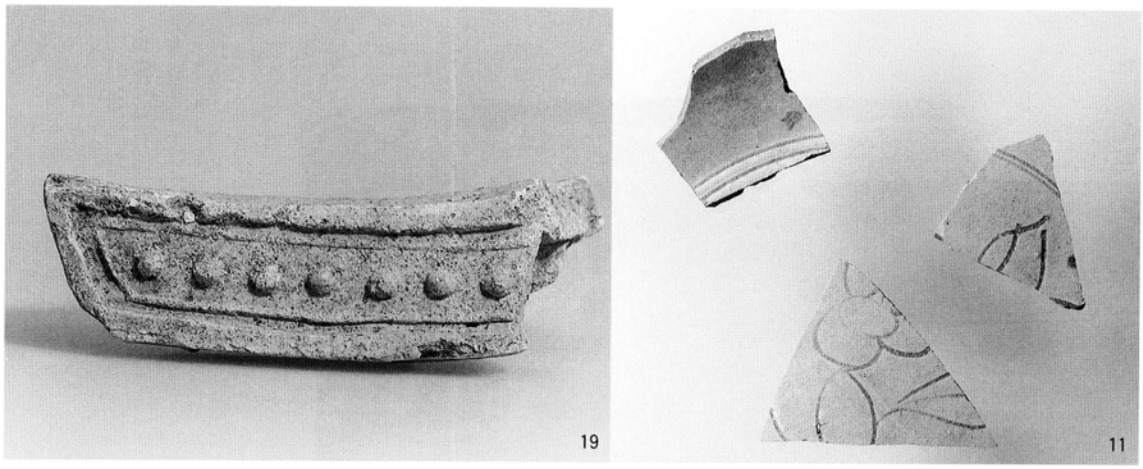
出土遺物を Fig. 157・158に示す。１・３は、**丸瓦**である。上面は縄目叩き、下面には布目が認められる。２は、平瓦である。コビキ瓦で、下面には離れ砂が付着している。４は、**土師器**の坏である。口径に対し、著しく小さい底部を持ち、体部は大きく開く。胎土は精良で、薄手に作られている。焼成も良好で、堅緻に焼き上がり、黄白色を呈する。そのほか、土師器の小片が出土している。

出土遺物からは時期を判断する決め手を欠くが、122号遺構と同時期であろう。

Ph. 128　158号遺構（北より）

158号遺構

第３面より検出した遺構である。浅い溝状を呈し、調査区南西壁際では、平瓦片を敷き詰めている。全体的には、東側を主に礫が散らばり、それに混じって土器類がみられる。土層の観察においても、顕著な溝状の落ちはなく、排水等の機能を負ったものではない。敷き詰められた平瓦に注目すれば、



Ph.129　158号遺構出土遺物

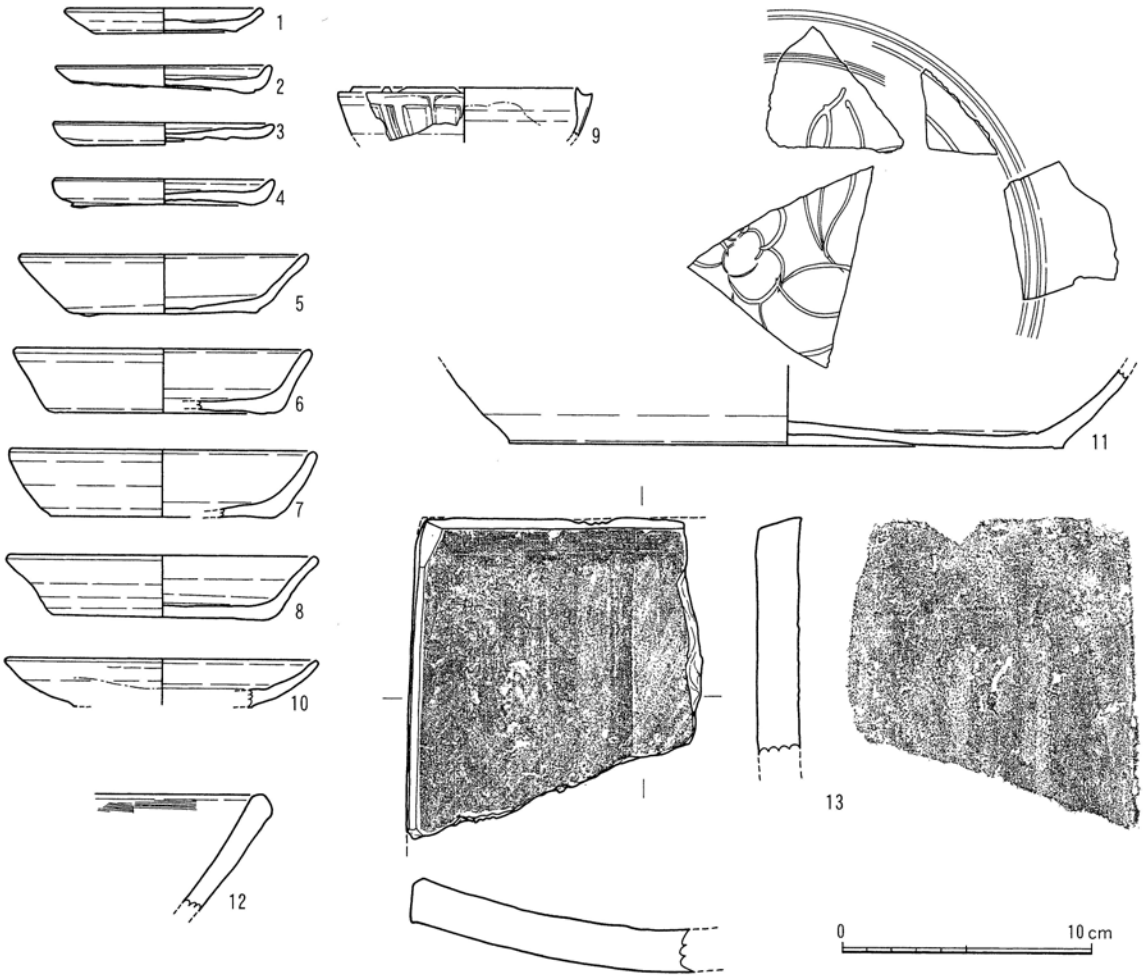


Fig.159　158号遺構出土遺物実測図１（1/3）

舗道の可能性もあるが、礫・土器の状況からは是認し難く、一応、区画溝と考えておく。

出土遺物を、Fig.159～162に示す。1～8は、土師器である。1～4は皿で、2～4の体部は小さく、偏平な形態を取る。5～8は、坏である。これら皿・坏は、底部を回転糸切りする。9は、白磁の合子である。10・11は、陶器である。10は褐釉の皿である。11は、白化粧土を塗った後、丸刀で削り取り、花文を描き、透明釉を薄く施釉する。胎土は灰色で、きめ細かく精良である。12は、瓦質土

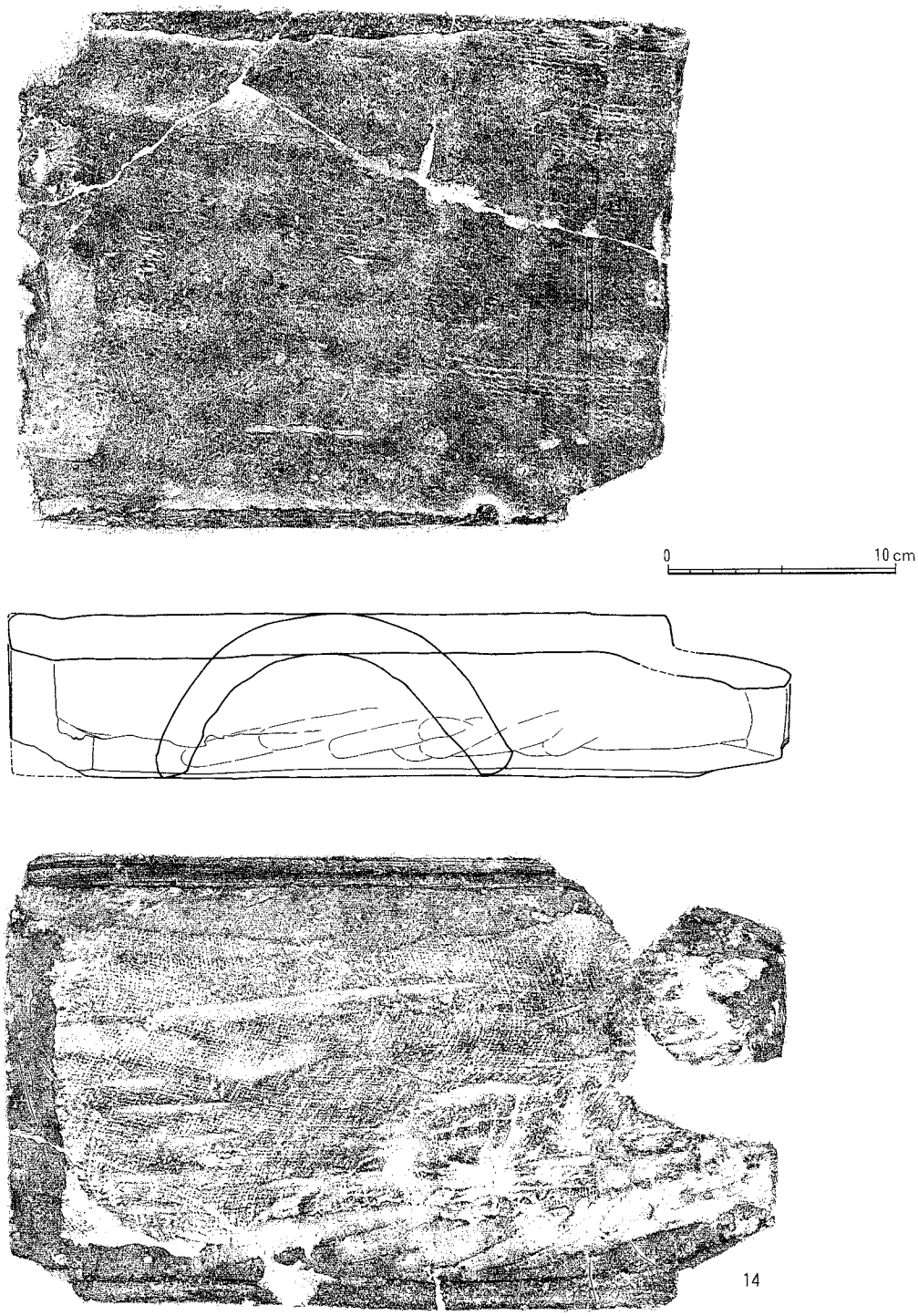


Fig.160　158号遺構出土遺物実測図2（1/3）

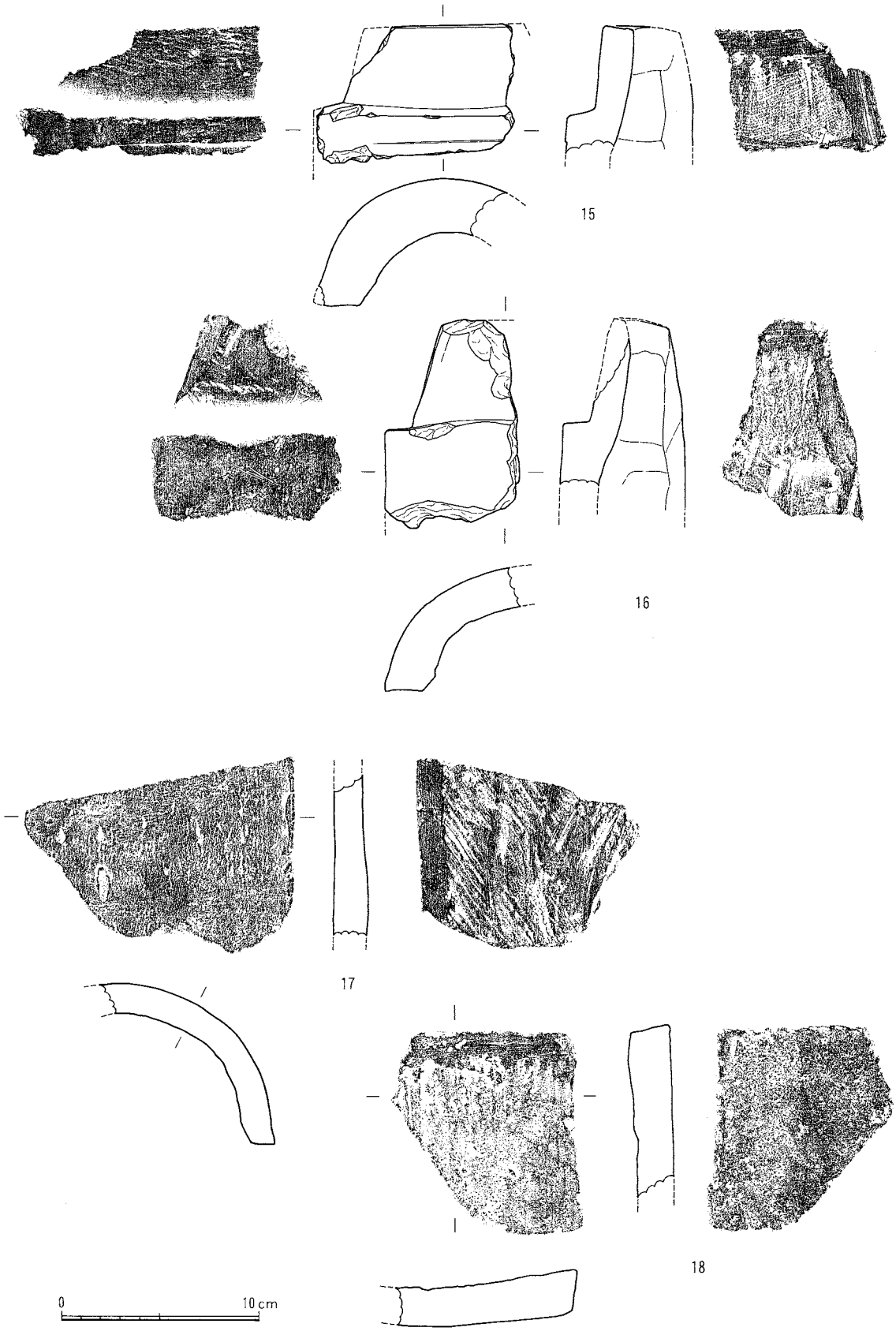


Fig. 161　158号遺構出土遺物実測図 3（1/3）

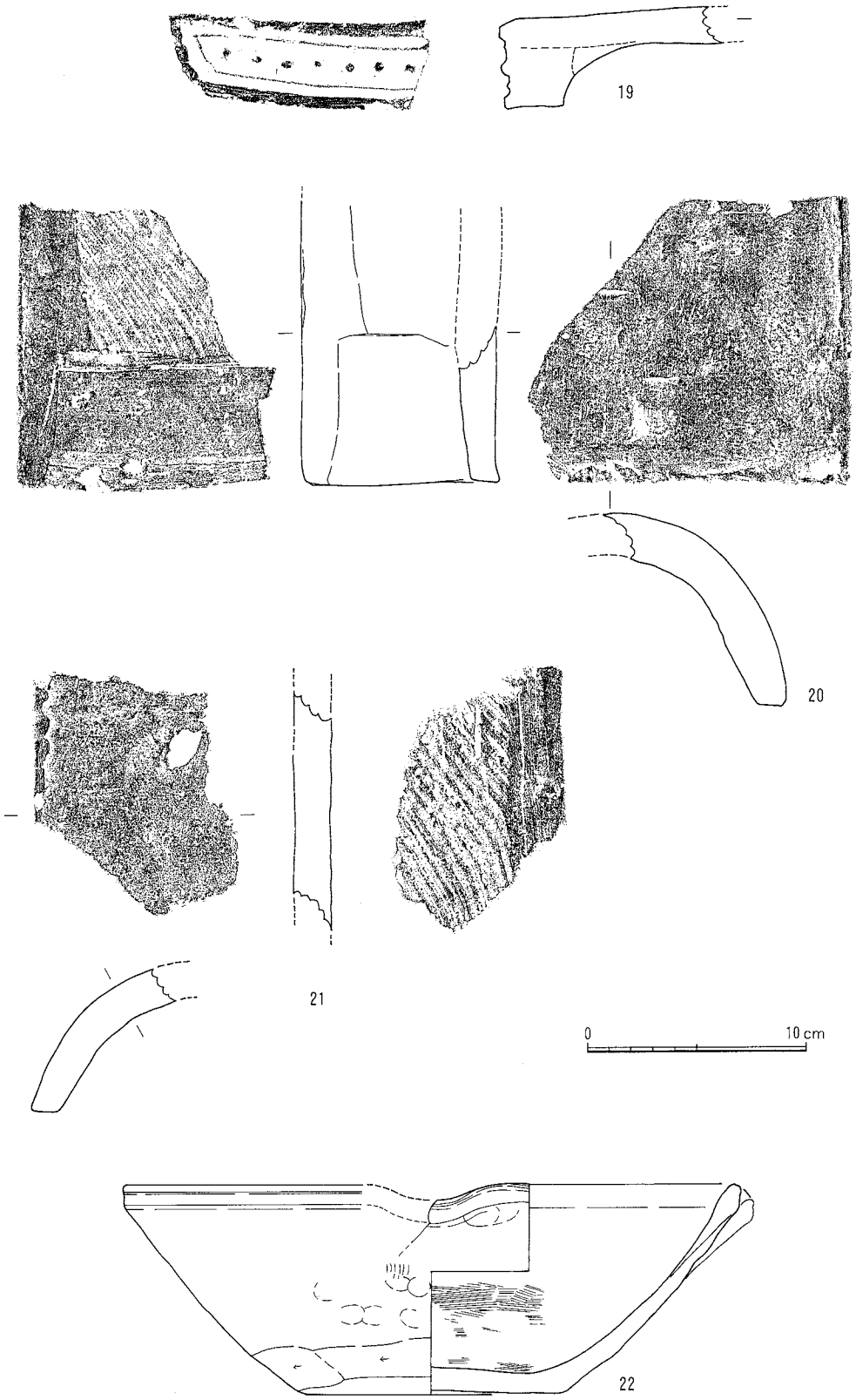


Fig. 162　158号遺構出土遺物実測図 4 （1/3）

器の鉢である。13〜21は、瓦である。15〜18は、南西壁際に敷き詰められていた瓦の一部である。19〜21の瓦は、158号遺構北側に固まって捨てられていたものである。22も北側付近から、数片に分かれて出土した**瓦質土器**のこね鉢である。体部下位に、横方向の篦削りを加えている。このほか、蓮弁文の青磁碗、小札状の鉄片などが出土した。

13世紀〜14世紀前半の区画遺構であろう。

Ph.130　410号遺構（北東より）

Ph.131　410号遺構出土遺物

410号遺構

第５面より検出した溝である。前節「基本層序」の項で述べた、埋立砂層中に掘り込まれている。掘り込み面は、Fig.140に見るように、溝の北西側で高く、南東側で低い。おそらく、埋立自体に跛行性があり、北西の砂丘側からの埋立が停滞した時点で、その境界に410号溝が掘削されたものであろう。第5面調査時で、溝幅470cm、深さ115cm を測る。

出土遺物を Fig.163・164に示す。１・２は、**土師器**である。底部は、回転糸切りされる。３は、**筑前型瓦器**碗である。箆磨きは浅く、単位が認めにくい。４・５は、**青磁**である。４は越州窯系青磁、

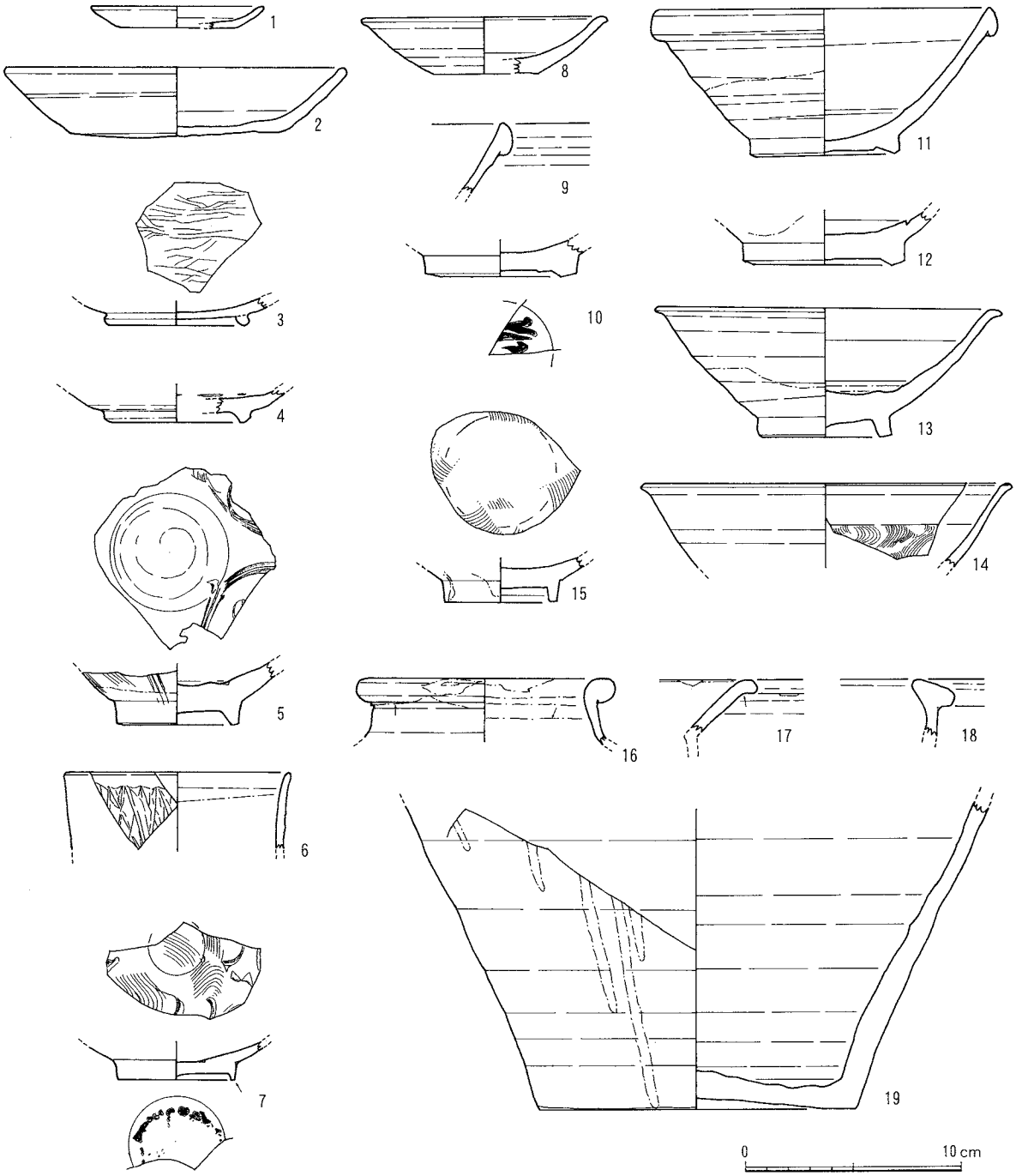


Fig.163　410号遺構出土遺物実測図１（1/3）

5は同安窯系青磁の碗である。6・7は、**青白磁**である。6は香炉で、内面は露胎となる。8～15は**白磁**である。11は、完形品で出土した。10の底部には墨書がみられる。花押と思われるが、遺存部位が小さく、不明確である。16～19は、**陶器**である。16は黄釉陶器の壺、17は黄釉陶器盤、18は褐釉陶器鉢、19は黒褐釉陶器の壺である。20・21は、**石製品**である。20は滑石性の石鍋で、外面に煤が付着している。21は、砂岩性の砥石である。実測図向かって右側の屈折した二面が、砥面である。22～26は、**瓦**である。22は、押圧文系の軒丸瓦で、花卉文の一部が残る。Ph.131-27は鬼瓦の一部であろう。

12世紀後半の溝と考えられる。

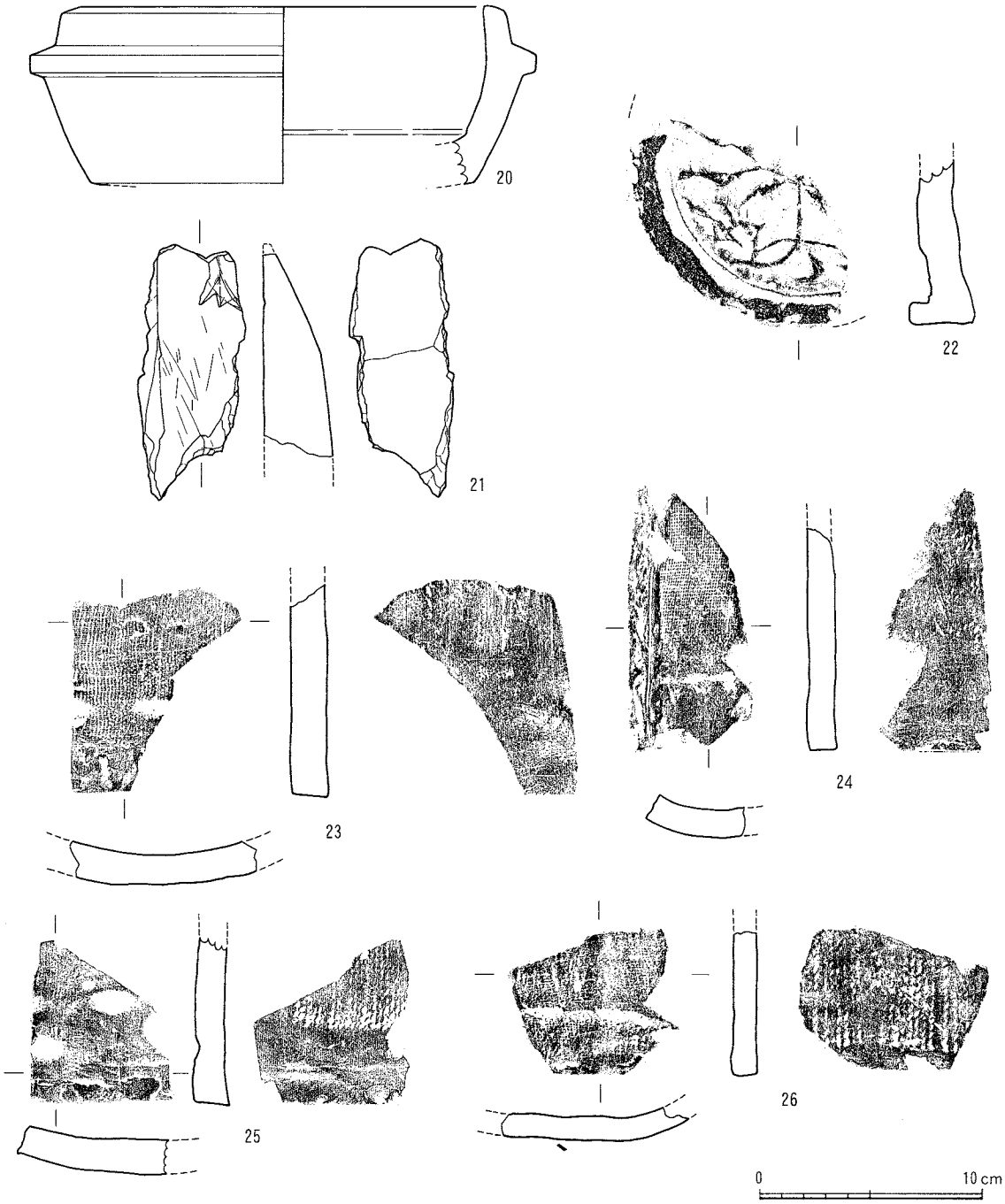


Fig.164　410号遺構出土遺物実測図2（1/3）

（5）庭園状遺構・建物関連遺構

101号遺構

第２面より検出した建物関連遺構である。幅３ｍで調査区を横断して、炭層が広がっている。炭層の直下は、焼けた硬化面で、緩い蒲鉾型の断面を呈する（Ph.133左上）。この状況から、回廊基壇状の遺構が、調査区を横断する方向に延びているものと推定した。

また、硬化面の直上には、部分的に玉砂利状の小石が集中している状況がみられた。特に密に集中する部分は、おおむね方形のプランを呈する（101−４、−５、−６）。全容が知れる101−５では、60cm四方に玉砂利が密集し、その外側を幅5cm程の砂利列が断続的に巡っている。これら砂利敷きの下部には、特になんら施設は作られていなかった。砂利敷きの性格は、不明といわざるを得ない。

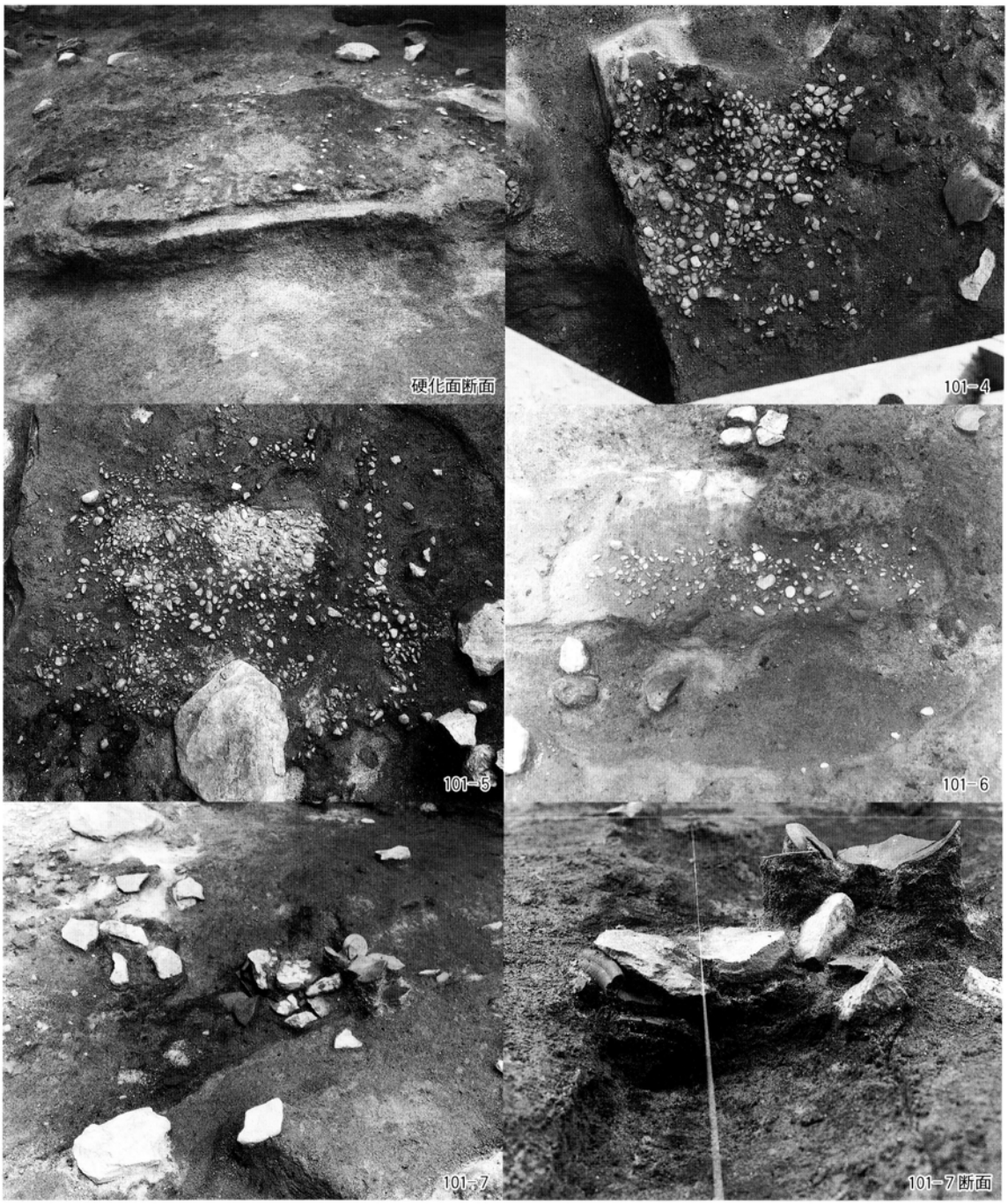
回廊状部分の東を画すると思われる小溝（101−１）は、方形砂利敷きと平行し、101−１から枝分かれした小溝は、101−５の南辺に取り付く。一連の構造と言えよう。西を画すると思われる101−７溝は方形砂利敷きや101−１溝の方向に対しては、斜行している。一方、炭層の範囲は正しく平行しており、101−７溝については、回廊状遺構に伴わない可能性がある。

出土遺物を **Fig.165・166**に示す。１〜16は、**土師器**である。１〜８は皿で、小型の１（口径7.2cm、器高1.5cm）、器高が高い２（口径8.6cm、器高2.2cm）と、その他のタイプ（口径8.3〜8.9cm、器高1.3〜1.5cm）に分かれる。１の口縁には油煙が付着しており、灯明皿に用いられたことを示している。９〜15は、坏である。９〜14は口径12.4〜13.4cm、器高2.45〜3.05cm、15は大型の坏で、口径16.0cm、器高3.95cmを測る。16は、底部が小さく、体部が大きく開くタイプで、搬入系の土師器である。口径9.7cm、底径6.0cm、器高2.5cmをはかる。17は、**白磁**の口禿皿である。口縁部に油煙が付着しており、灯明皿に使われたことが分かる。18は、鎬蓮弁文の**青磁**碗である。19は、無釉焼き締め**陶器**の鉢である。20は、**土師質土器**の鉢である。体部外面には、うすく縦方向の刷毛目

Ph.132　101号遺構周辺（北東より）

が残るが、ほとんど撫で消されている。21・22は、**瓦質土器**の火鉢である。外面は、篦磨きで平滑に仕上げている。内面は、21は横刷毛目、22は横撫で調整する。口縁部直下には、３個を単位とした菊花文のスタンプが打たれている。23・24は、**常滑焼き**の甕である。同一個体の可能性が高い。同一個体と見れば、推定器高53.5cmとなる。口縁を屈曲させているが、面状の口縁帯を形成するにはいたっていない。中野編年では、６ａ期に属する。25は、鉛製の**権**である。水滴型を呈し、頂部側に穿孔している。底辺や側縁は削られているが、重量を調整したものであろう。 27.98ｇを測る。

３・８・11～13は101－１溝から、２・４～７・14・15は101－７溝からの出土で、時期差は見られない。14世紀前半の回廊状遺構と考えられる。



Ph.133　101号遺構

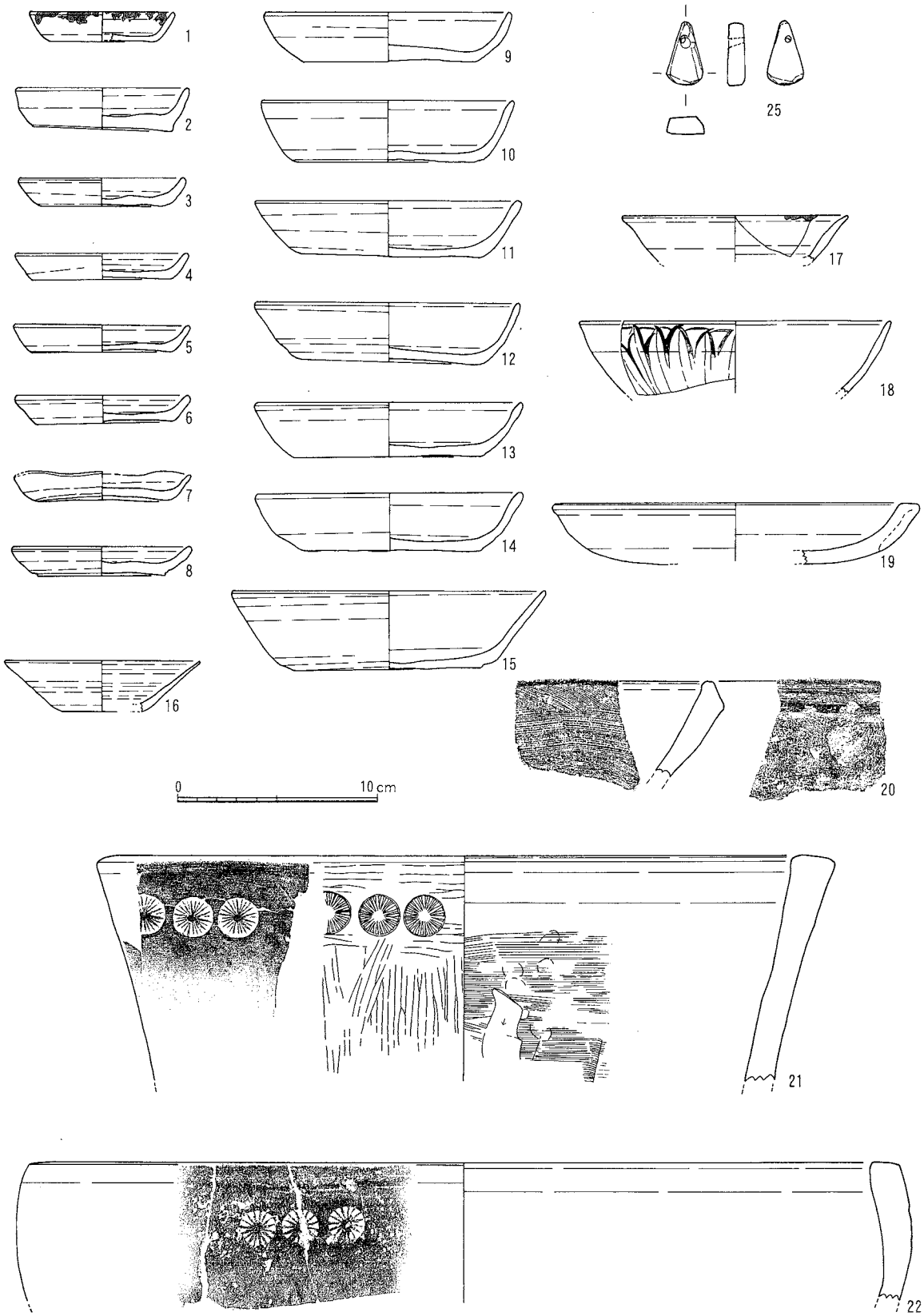
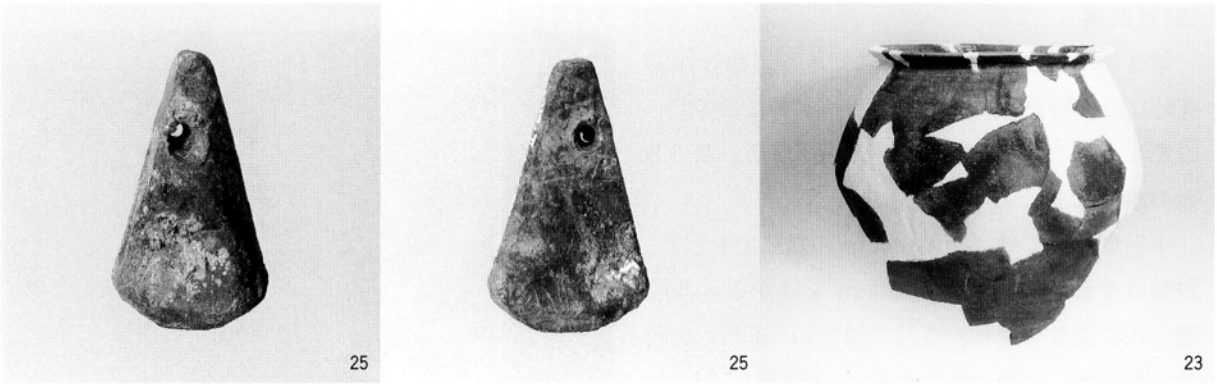


Fig. 165　101号遺構出土遺物実測図１（1/3）



Ph.134　101号遺構出土遺物

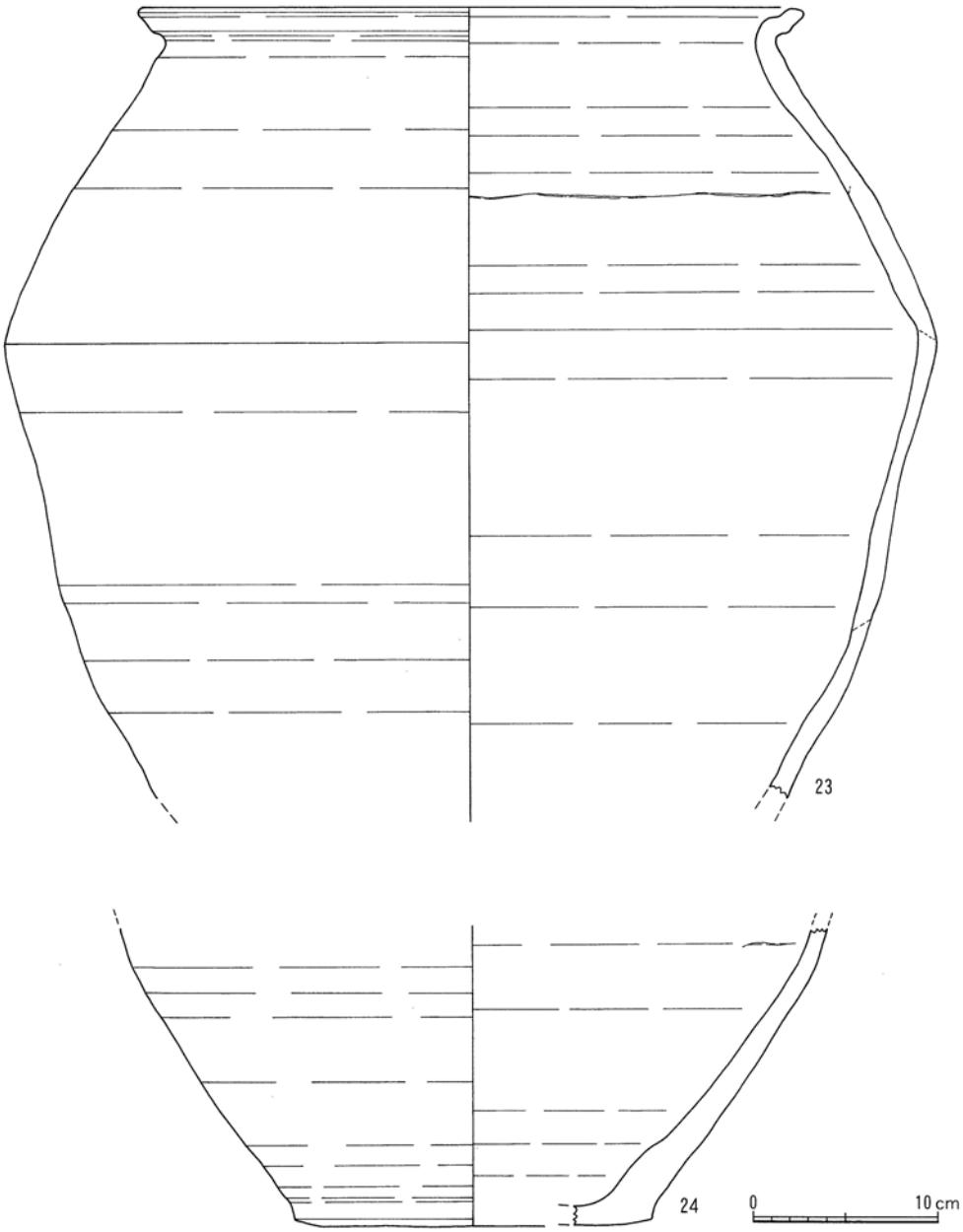


Fig.166　101号遺構出土遺物実測図２（1/4）

151号遺構

第３面で検出した池状遺構である。第３面調査時には、調査区内に設置したベルトコンベアーの影になって半ば調査できなかったが、第３Ｂ面の調査に当たって、全体を確認した。

平面形としては、長軸400cm の瓢箪型を呈し、短軸はそれぞれ180cm・230cm をはかる。多段掘り状に深さを増し、底部で深さ30～50cm を測る。南半分には礫が集中するが、意図的に配されたものではなく、投棄されたと考えられる。

出土遺物を Fig.168・169に示す。１・２は、**土師器**の皿・坏である。底部は回転糸切りである。３は、**白磁**の口禿皿である。４は、**青磁**の皿である。底部を碁笥底に作る。高台の内側は、丸く露胎となる。５・６・10～12は、**瓦質土器**である。５は風炉の口縁部、６は火鉢、10・12はすり鉢、11はこね鉢である。７～９は、土師器の**土鍋**である。外面には、煤が付着している。13は、**備前焼**のすり鉢である。内底部は、使い込んで摩滅している。間壁編年の３期に位置づけられる。この他、瓦・砥石などが出土している。

14世紀前半から中頃にかかる時期に営まれた池であろう。

Ph.135　151号遺構（北西より）

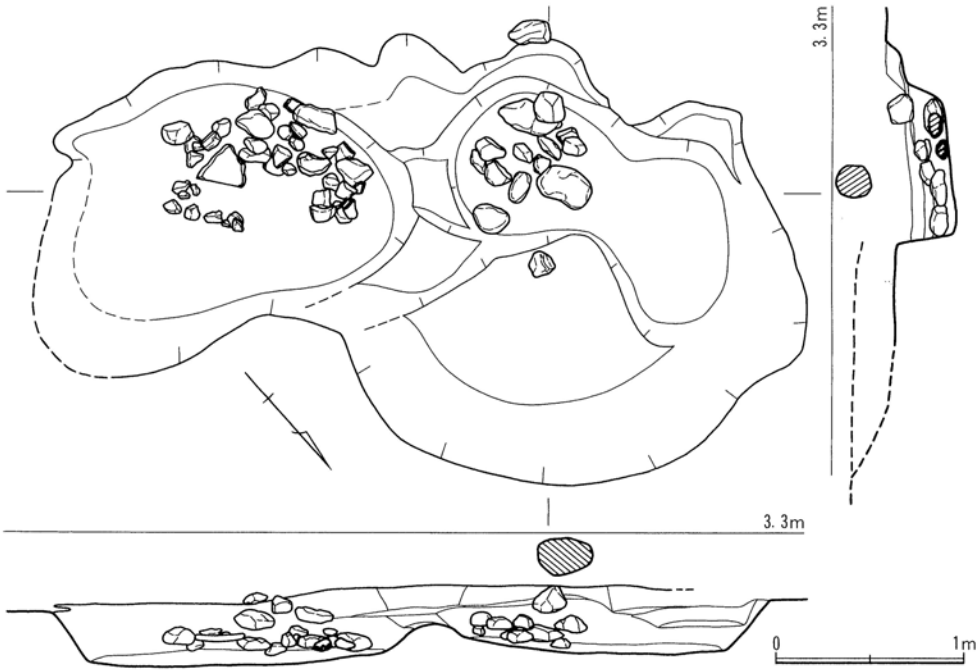


Fig.167　157号遺構実測図（1/40）

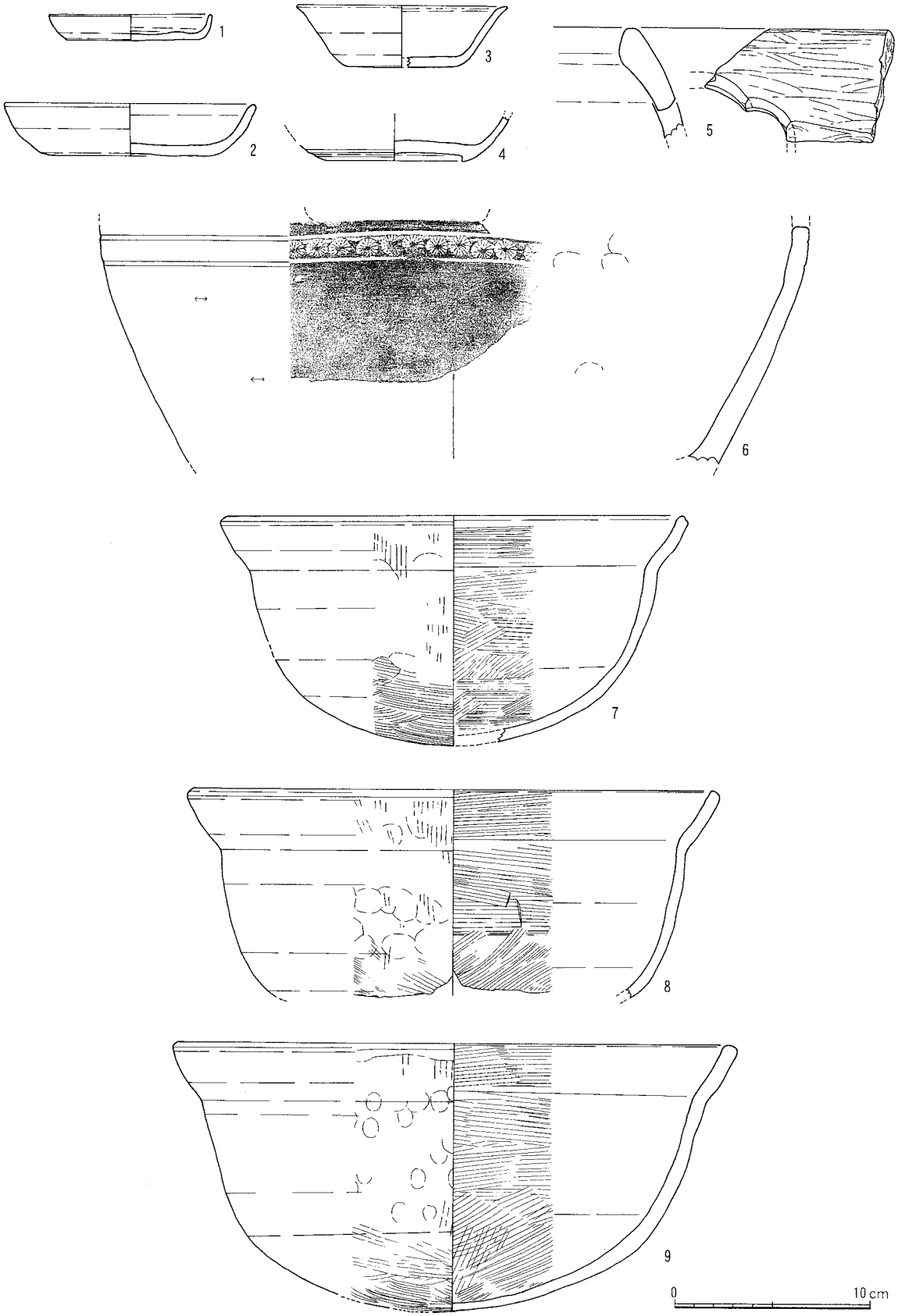


Fig. 168　151号遺構出土遺物実測図１（1/3）

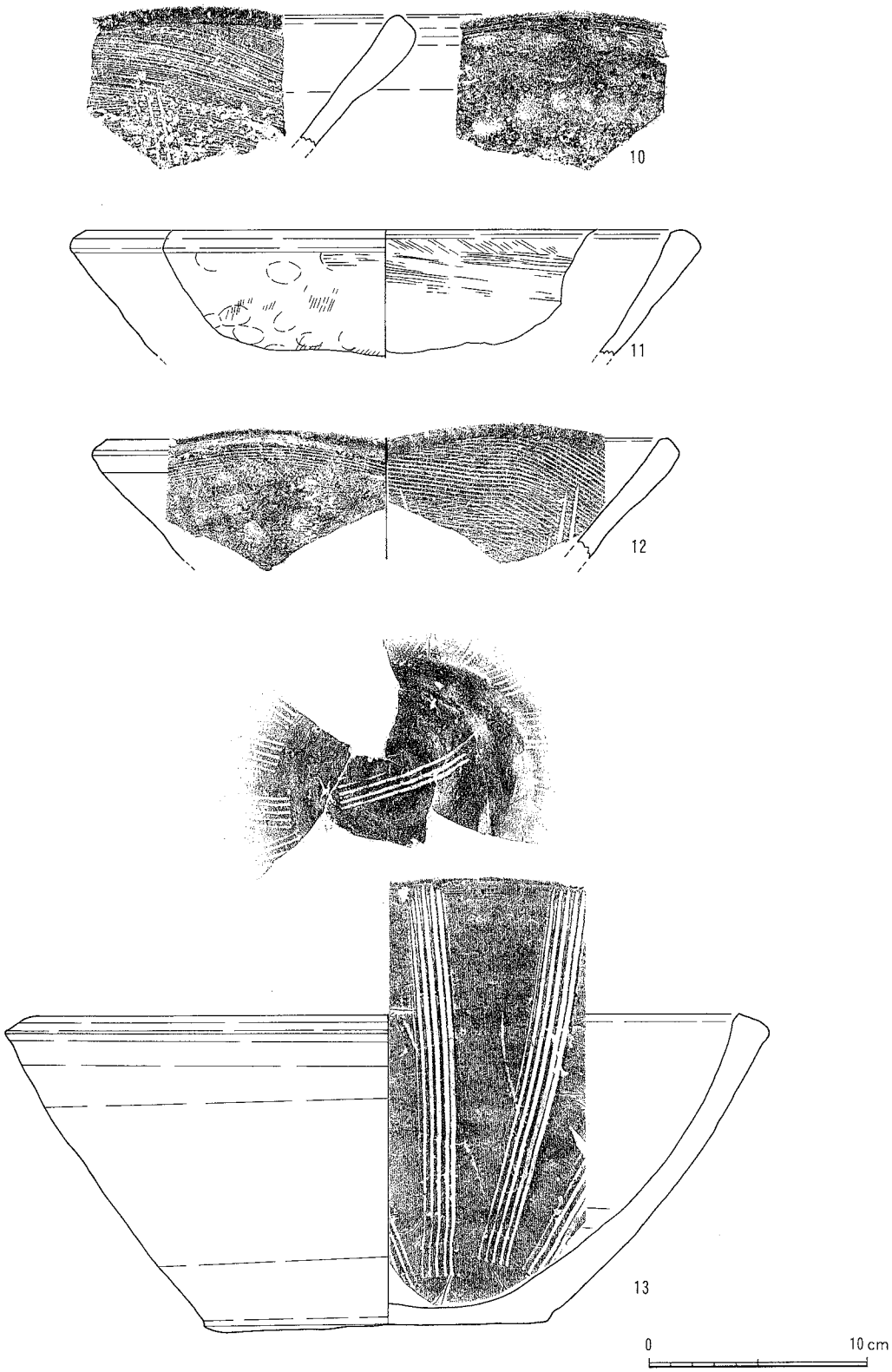


Fig. 169　151号遺構出土遺物実測図 2（1/3）

408号遺構（375号遺構）

第５面で検出した池状遺構である。調査区を横切る形で見つかっており、長軸7.5m、短軸4.5m の楕円形を呈すると推定される。南岸から東岸にかけては、ほぼ直に三段程度の石積みによる護岸を作るが、北岸は素掘りのままとなる。なお、石積みの東三分の一の上半は石が小さく、積み直されたものと思われる。この部分の裏込め土の下部には、もう一回り外側に大きめの石が整然と巡っており、当初の護岸を狭めたものと考えられる。さらに護岸石積みからやや離れて、ひとかたまりの石組が見られ、護岸の作り直しに際しては、汀線に入り組みをもたせた可能性が考えられる。また、池の埋積が進み石積みが半ば隠れた頃、池底に小石を敷いた状況が検出された。北岸では、若干埋まった段階で、景石と思われる大型の石を含む大小の礫が流れ込んでいた。意図的な護岸とは見えないので、北岸の際に設けられていた景石群が、落ち込んだものと推定される。また、流れ込んだ礫の下から、土師器の一括廃棄が見つかった。池底に貼り着くように出土しており、初期の池に伴う廃棄行為と思われる。

なお、第4面での遺構検出時に、この北岸付近と南岸に該当する二ヶ所の土質の変化を確認しており、特に景石群周辺から上層を375号遺構として、遺物を取り上げている。

375号遺構出土遺物を、Fig.171・Fig.172に示す。１～31は土師器である。１～11は皿で、口径8.5～9.0cm、器高0.9～1.3cm を測る。12

Ph.136　375号・408号遺構

～31は坏である。口径12.0～14.1cm、器高2.0～3.0cmを測る。皿・坏の底部は、回転糸切りされる。32は、**瓦質土器**の火鉢である。内面は雑な撫でだが、外面は平滑に磨く。33・34は、**青磁**である。鎬蓮弁文が見られる。35は、**青白磁**の壺である。36～40は、**白磁**である。36は口禿皿、37～39は口禿碗、40は水注の口縁部である。41～49は**陶器**である。41・42は**天目茶碗**である。43は褐釉の灯火器であろうか。破損した下部には、鐔が付くと思われる。44は褐釉の瓶で、外底部に花押が墨書されている。45は褐釉の甕、46は黄釉鉄絵盤、47は褐釉の壺である。48・49は灰緑釉の大壺で同一個体か。

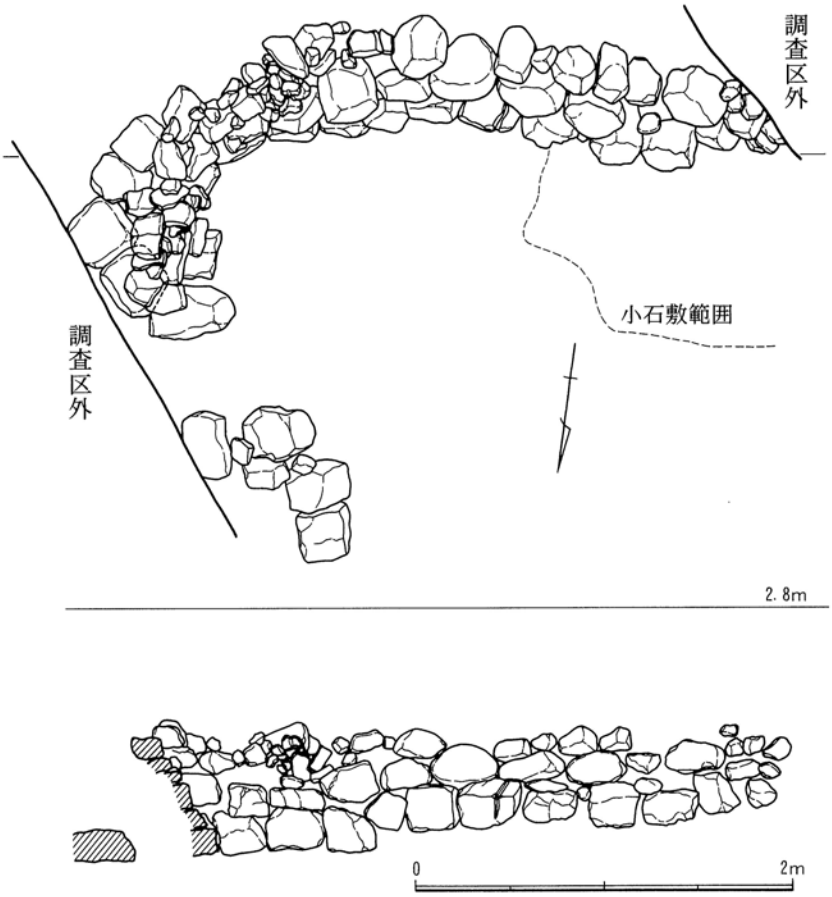


Fig.170　408号遺構実測図（1/40）

Ph.137　408号遺構石積み（西より）

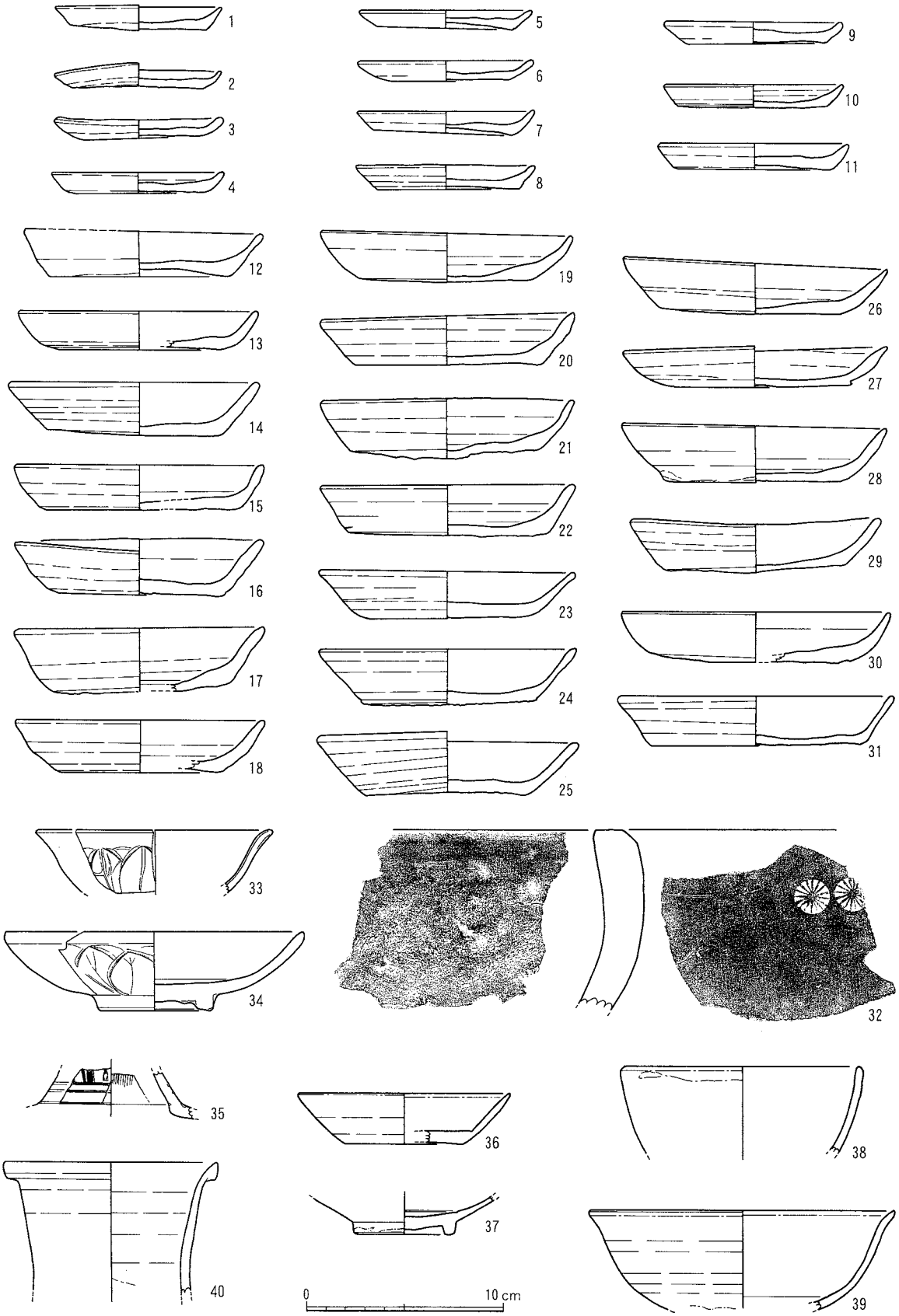


Fig. 171　375号遺構出土遺物実測図１（1/3）

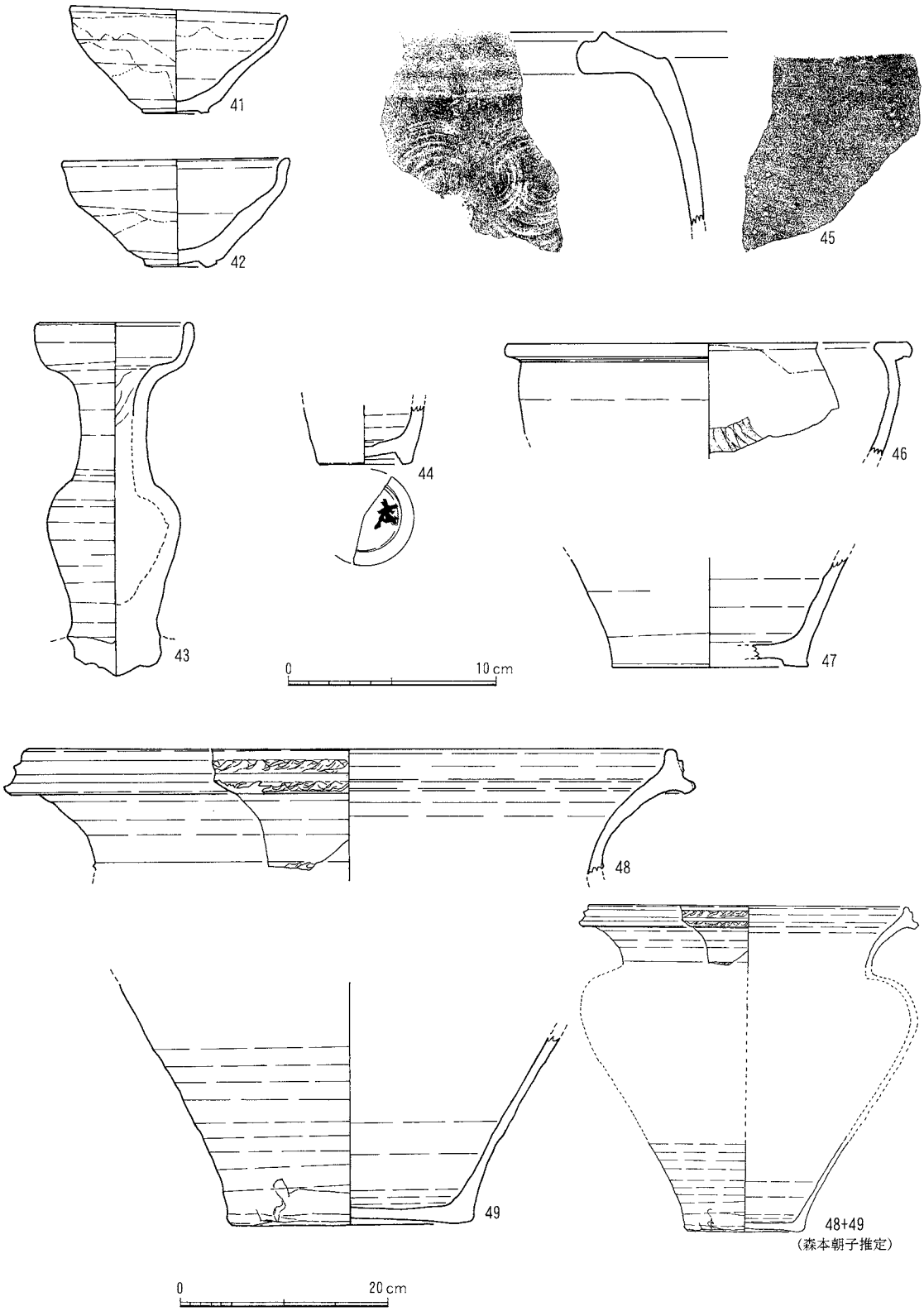


Fig. 172　375号遺構出土遺物実測図 2 (41～47…1/3, 48・49…1/6)

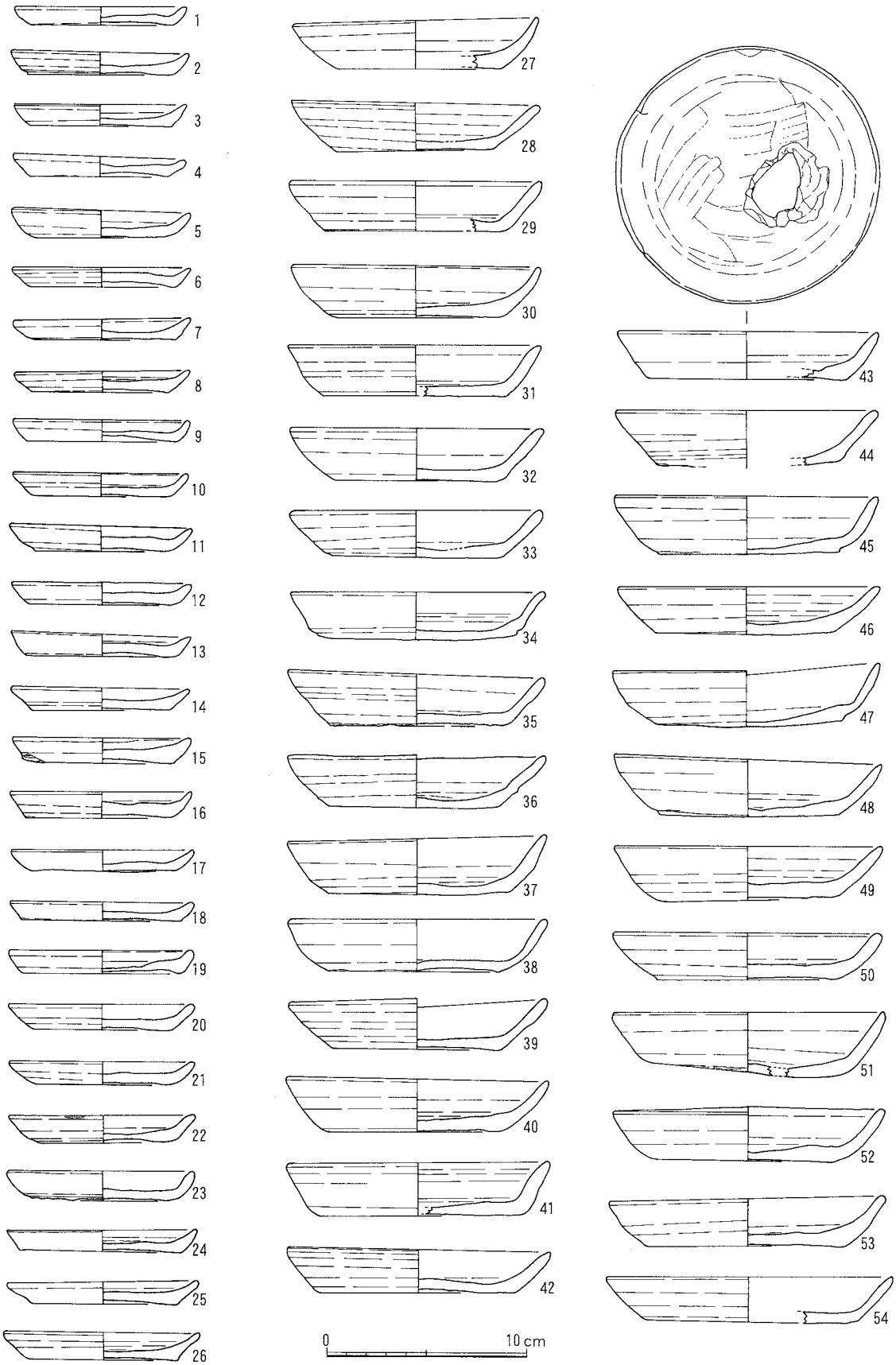
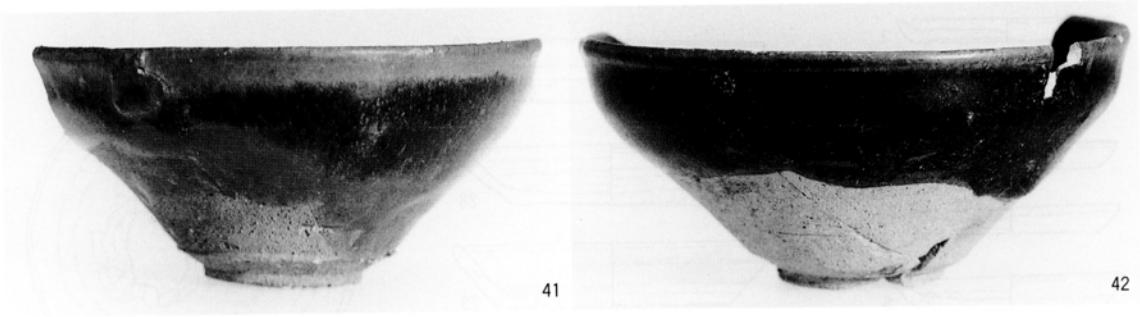


Fig. 173　408号遺構出土遺物実測図１（1/3）



Ph. 138　375号遺構出土遺物

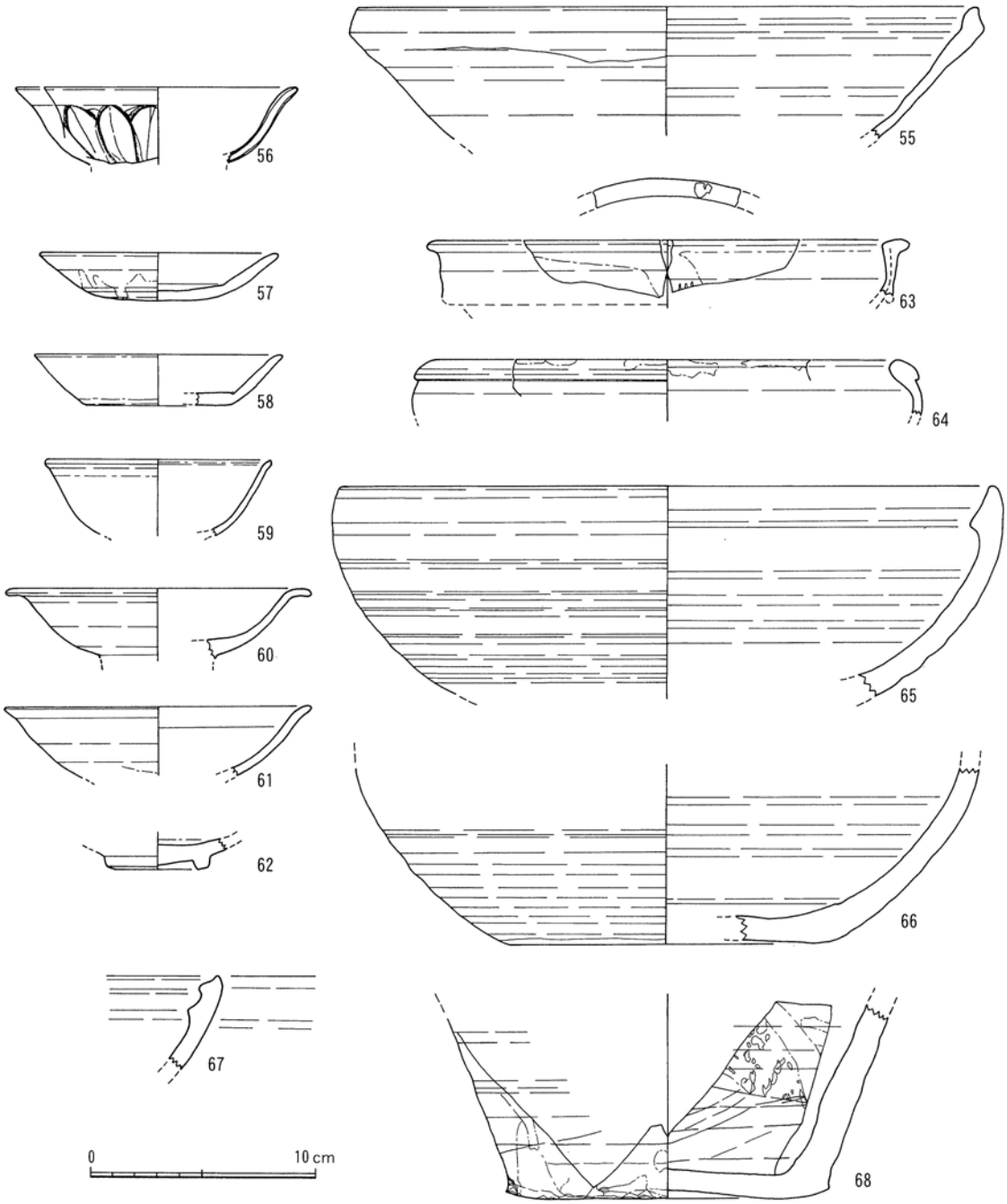


Fig. 174　408号遺構出土遺物実測図 2 （1/3）

409号遺構出土遺物を Fig.173・174に示す。1～54は**土師器**である。底部は回転糸切りする。1～26は皿で、口径8.5～9.7cm、器高0.9～1.4cm を測る。27～54は坏である。口径12.3～14.4cm、器高2.4～3.0cm である。43の底部には、穿孔がみられる。55は**東播系須恵器**の鉢である。口縁直下には、粘土の継ぎ目が残る。56は、鎬蓮弁文の**青磁**小碗である。57～62は**白磁**である。58・59は、口縁を口禿に作る。63～68は**陶器**である。63は褐釉のすり鉢で、口縁上面に目跡が付く。64は褐釉の鉢、65～67は無釉のこね鉢、68は褐釉の壺である。無釉こね鉢の内面は、使用のため摩耗している。

両遺構で時期差はほとんど認められず、13世紀後半から14世紀前半の池状遺構と思われる。

（6）その他の出土遺物

これまでの報告から漏れた遺構出土遺物・包含層出土遺物の内、特徴的なものを Fig.175～179に示す。1～7は、**土師器**である。1は極めて薄手の白色系土師器で、ロクロ成形される。2は、**京都系土師器**のへそ皿である。3～7は、口径に対して極めて小さい底部を持ち、体部は大きく開く。3～5が白色系で薄手、強いロクロ目を持つのに対し、6・7は褐色系で厚手、滑らかな器壁を持つ。前者は搬入土師器、後者は在地土師器であろう。8～20は、**瀬戸焼**きである。8は香炉、9～16は卸皿、17～20は折縁深皿である。21～29は、**備前焼**である。21～28は、すり鉢である。間壁編年Ⅱ期からⅣA期の資料が出土している。29は、ⅢB期の甕である。30～33は、**青磁**である。34・35は、**青白磁**である。34は皿、35は鳥餌皿である。36～40は、**白磁**である。39の見込みは露胎で、輪状に耐火砂が回る。40は四耳壺の底部であるが、割取って、外底のくぼみを硯に転用している。スライスするように割り取った破片も出土しており、接合できている。41は、**元青花**の玉壺春である。42～48は、**陶器**である。42～45は澱青釉の花盆である。46は、黒褐釉の鉢（河南天目）である。縦に鉄錆が浮い

Ph.139　その他の出土遺物1

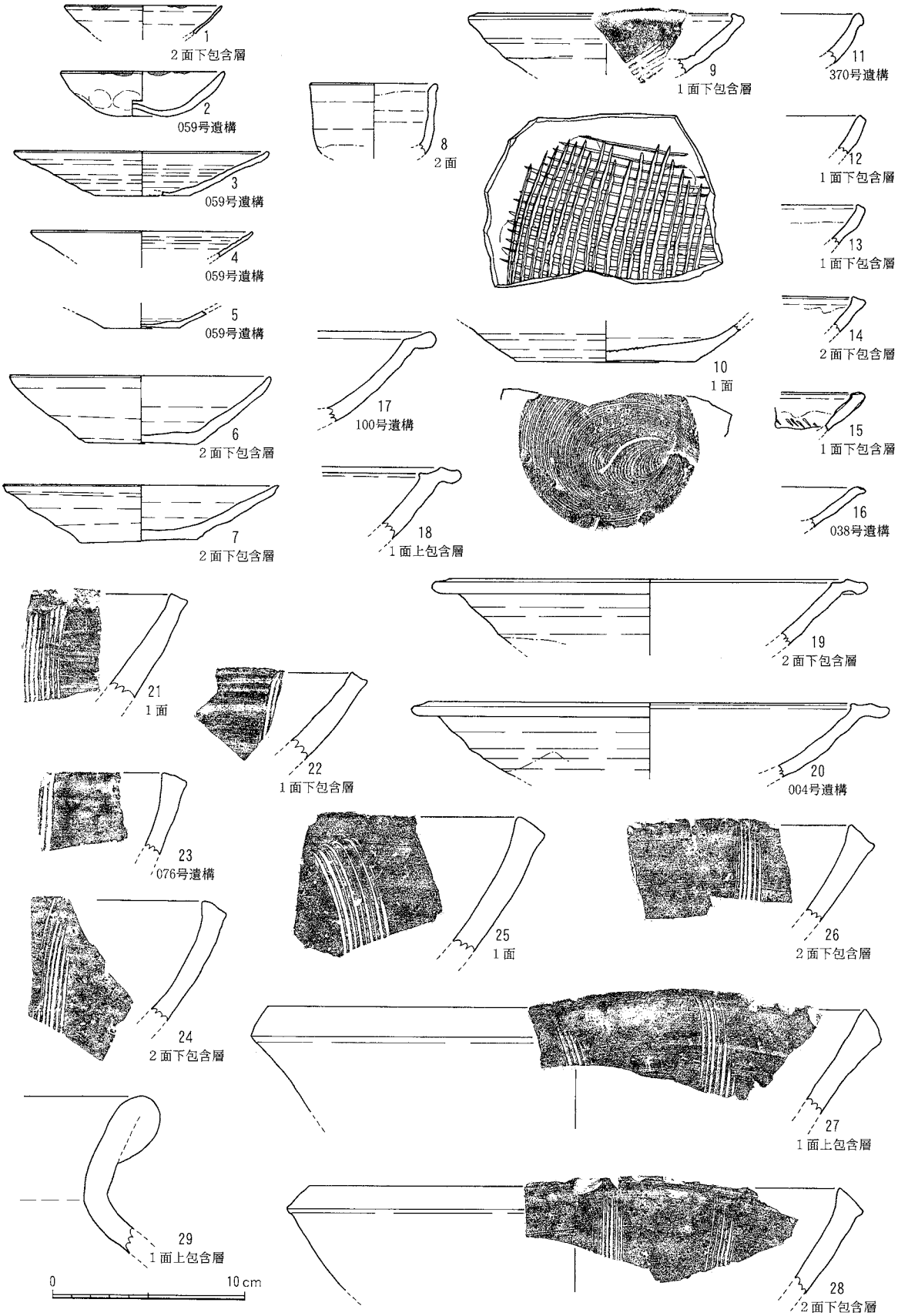


Fig.175　その他の出土遺物実測図1（1/3）

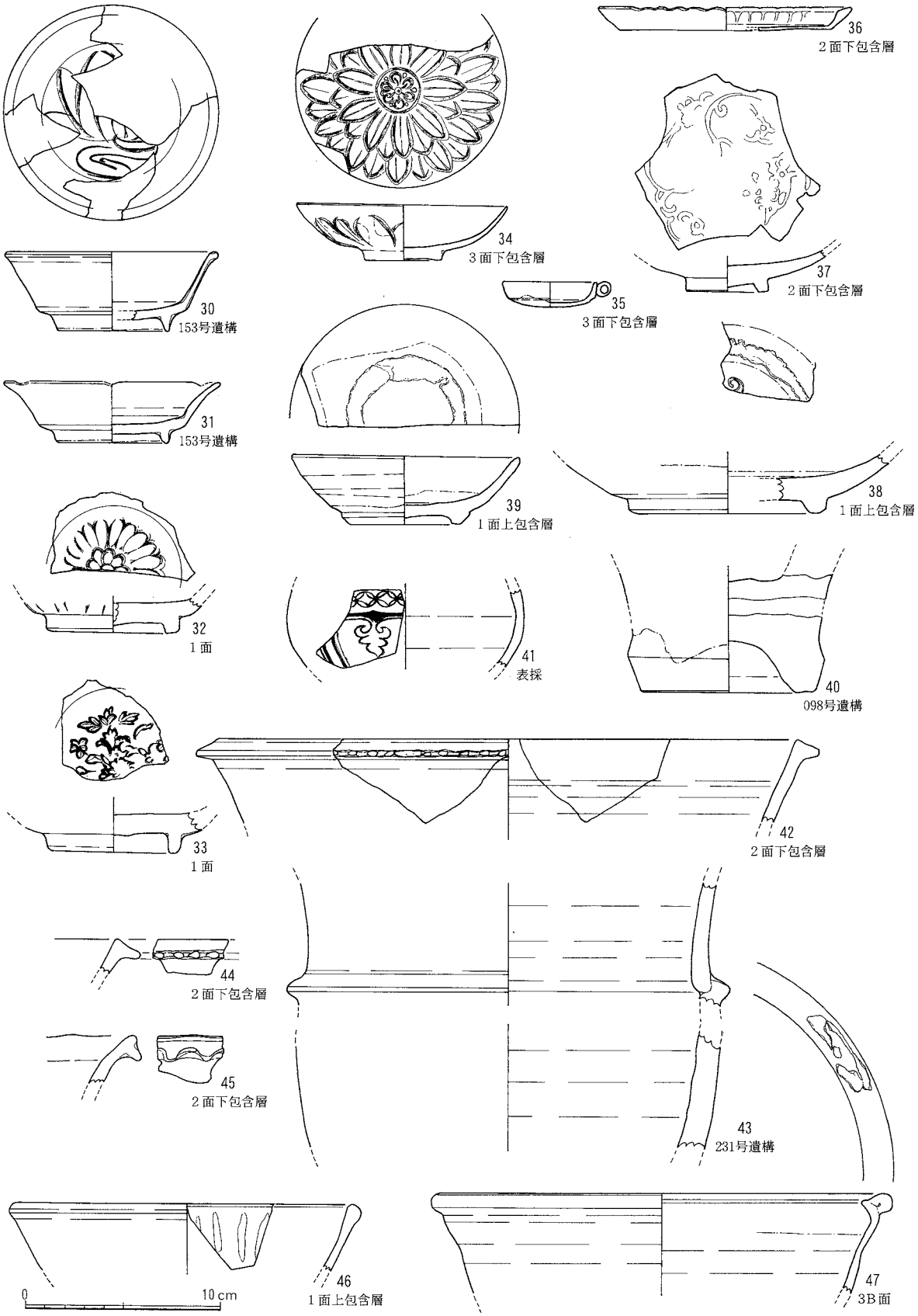


Fig. 176　その他の出土遺物実測図２（1/3）

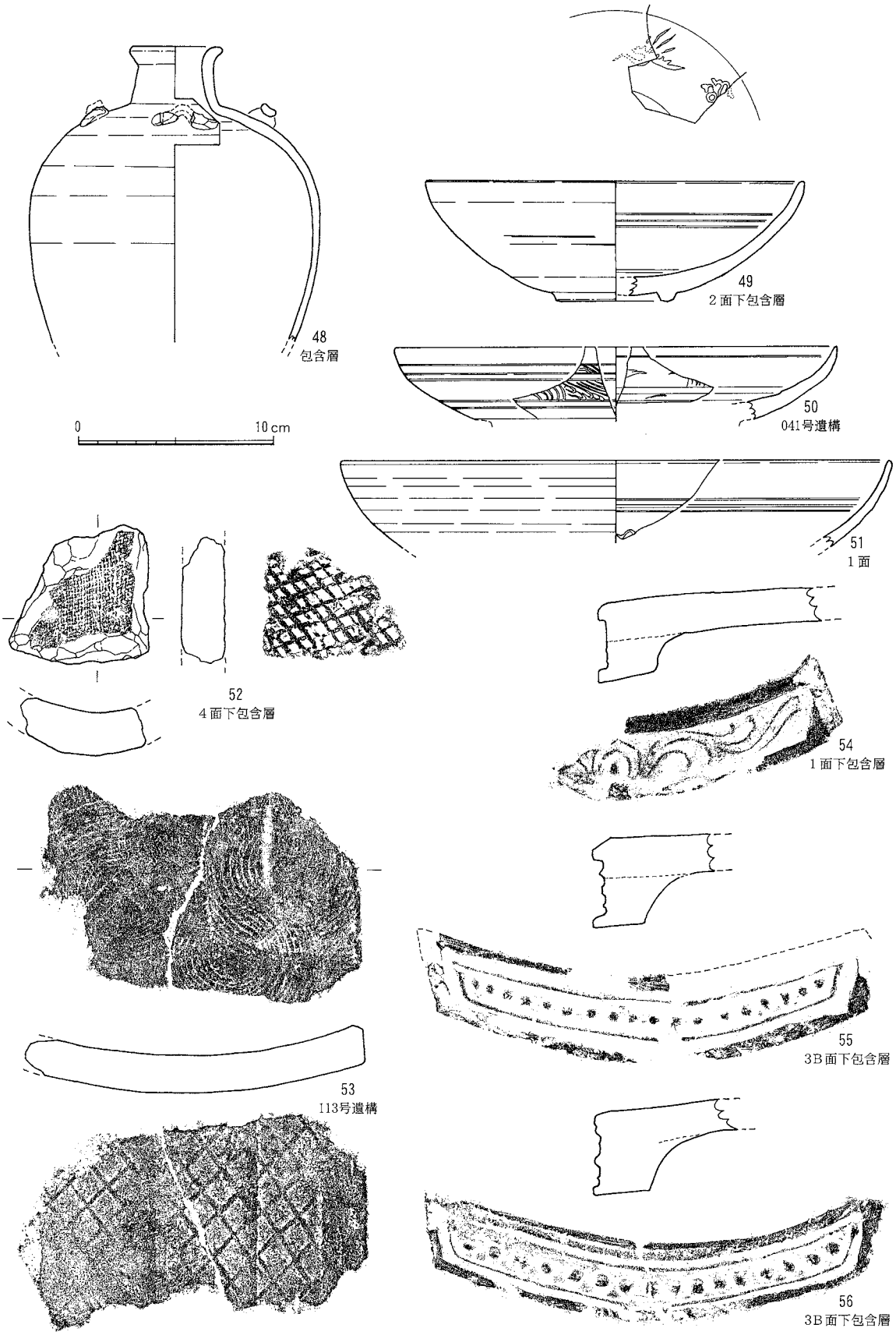
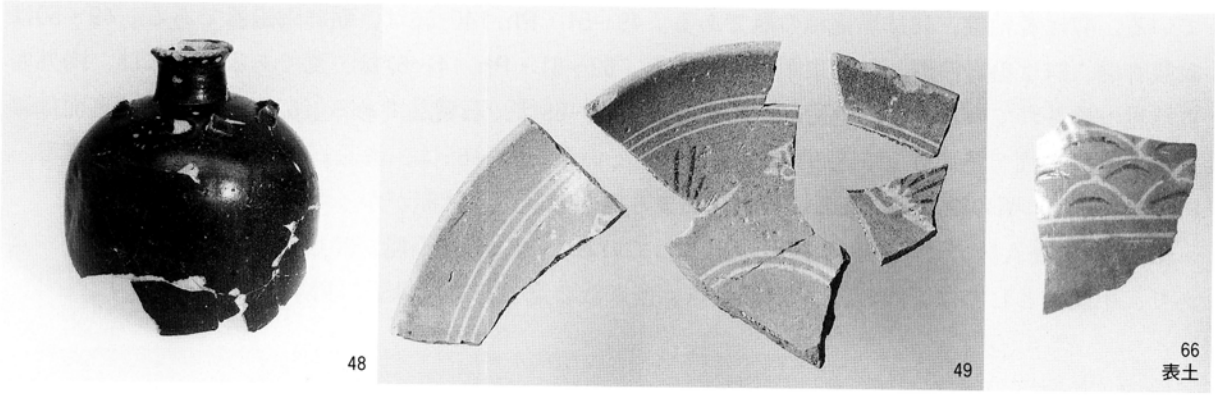


Fig. 177　その他の出土遺物実測図 3（1/3）



Ph. 140　その他の出土遺物 2

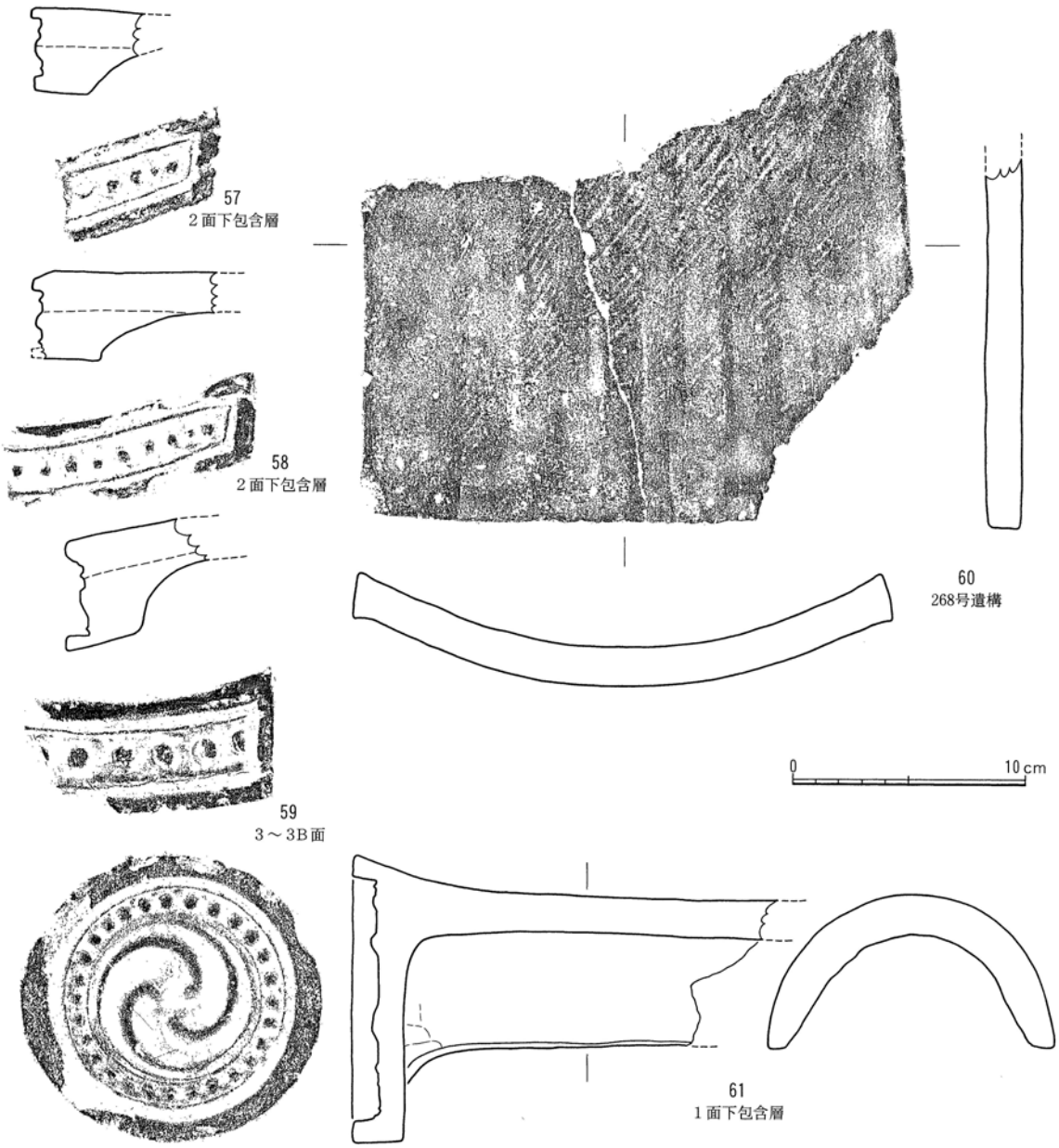
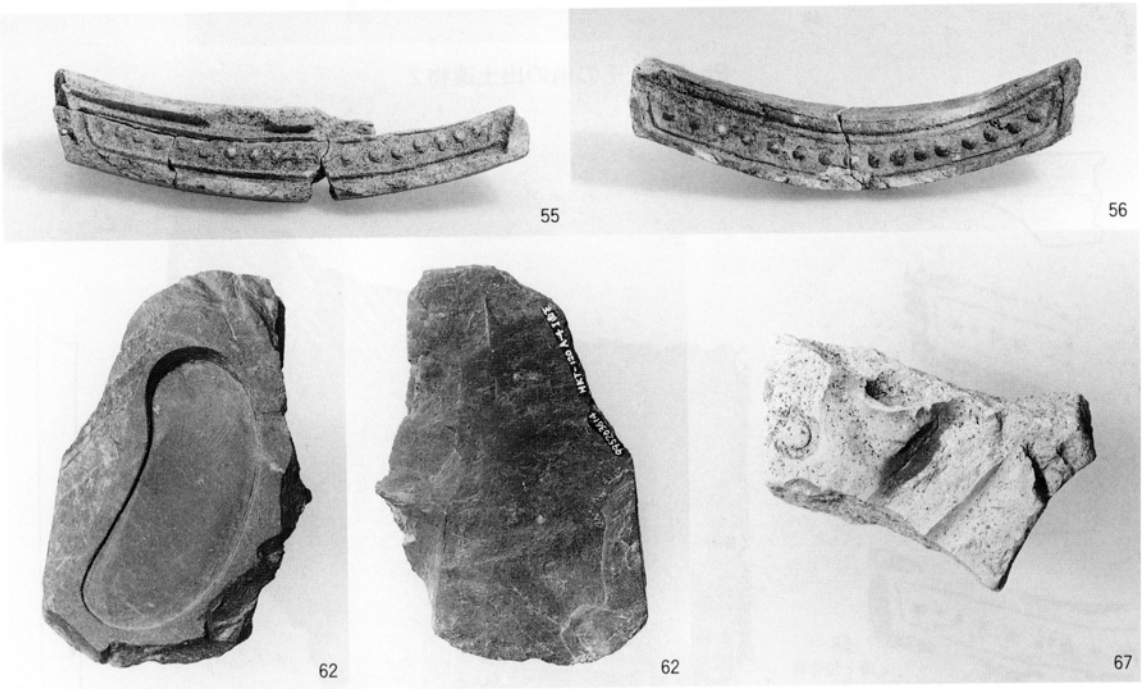


Fig. 178　その他の出土遺物実測図 4 （1/3）

ている。47は黄釉盤、48は黒褐釉の瓶である。49～51・Ph.140-66は、**朝鮮陶磁器**である。49・50は象眼青磁、51は粉青沙器、66は象眼の壺である。52～61・Ph.141-67は、**瓦**である。52には、内外面に緑釉が施されている。67は**鬼瓦**の一部である。62～65は、**石製品**である。62は硯である。裏面はほとんどが剥離面であるが、部分的に砥ぎを加えている。63～65は、滑石石鍋の転用品と思われる。Ph.139-68は、明の**釉裏紅**である。発色はあまり良くないが、紫赤がかった文様がみられる。

第120次調査A区では、85点の**銭貨**が出土している。内、解読不能が30点、近代の「一銭」が一点あり、中国銭としては唐銭4点、北宋銭48点、南宋銭2点である。以下、拓本と一覧表を示す。



Ph.141　その他の出土遺物3

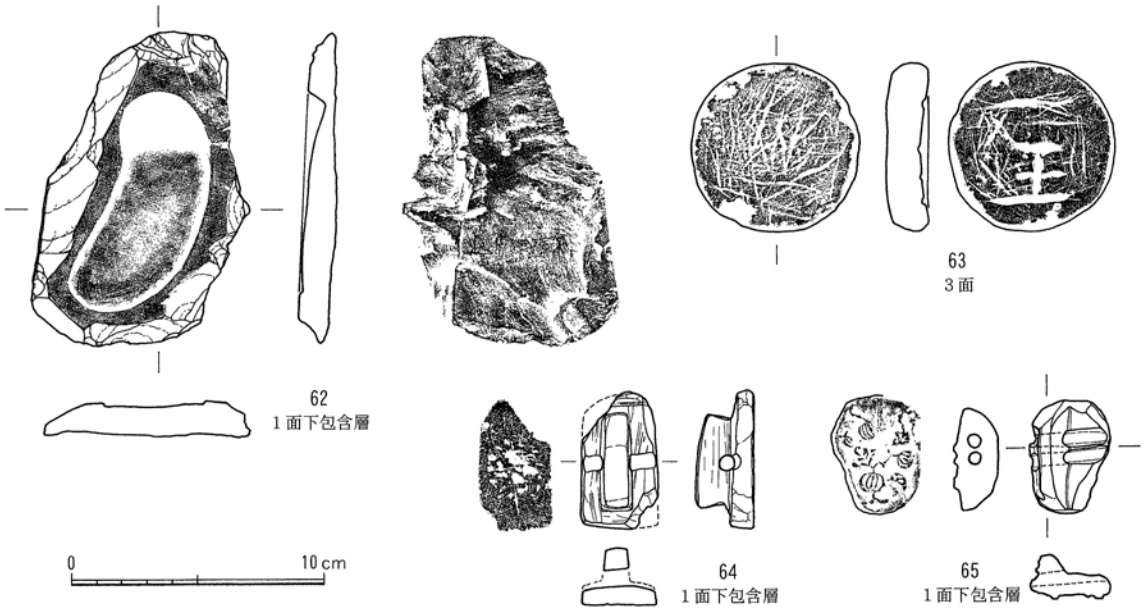
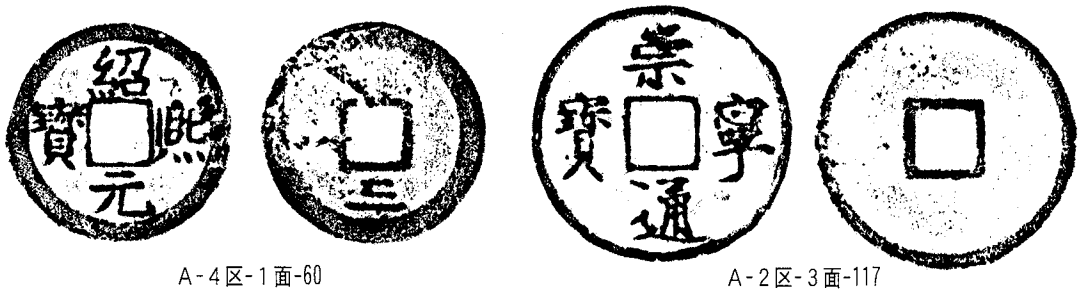


Fig.179　その他の出土遺物実測図5（1/3）

表5　第120次調査A区出土銅銭一覧

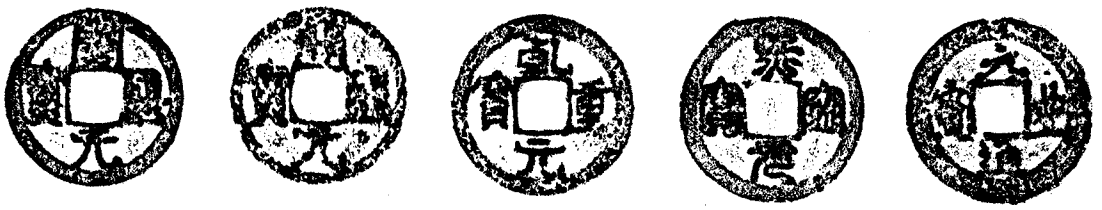
銭貨名	初鋳年	王朝名	年号	枚数
開元通寶	621	唐	武德4年	3
乾元重寶	758	唐	乾元元年	1
太平通寶	976	北宋	太平興国元年	2
咸平元寶	998	北宋	咸平元年	1
祥符元寶	1009	北宋	大中祥符元年	1
天禧通寶	1017	北宋	天禧元年	1
天聖通寶	1023	北宋	天聖元年	1
景祐元寶	1034	北宋	景祐元年	2
皇宋通寶	1038	北宋	寶元元年	4
至和通寶	1054	北宋	至和元年	1
熙寧元寶	1068	北宋	熙寧元年	7
元豊通寶	1078	北宋	元豊元年	11
元祐通寶	1086	北宋	元祐元年	4

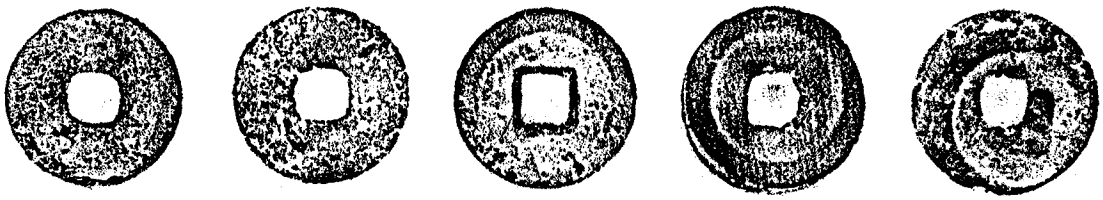
銭貨名	初鋳年	王朝名	年号	枚数
紹聖元寶	1094	北宋	紹聖元年	2
元符通寶	1098	北宋	元符元年	1
聖宋元寶	1101	北宋	建中靖国元年	2
崇寧通寶	1102	北宋	崇寧元年	1
大観通寶	1107	北宋	大観元年	1
政和通寶	1111	北宋	政和元年	5
宣和通寶	1119	北宋	宣和元年	1
紹熙元寶	1190	南宋	紹熙元年	1
嘉定通寶	1208	南宋	嘉定元年	1
近代銭(一銭)				1
解読不能				30
総数				85



A-4区-1面-60
紹熙元寶

A-2区-3面-117
崇寧通寶





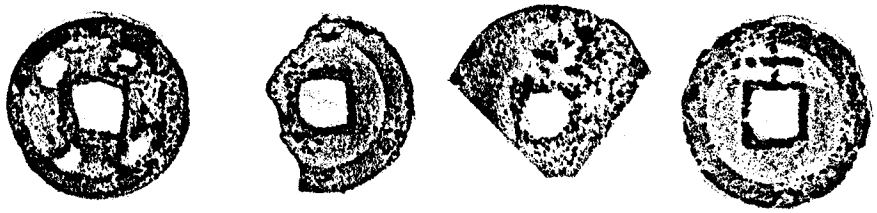
A-8区-3面下
開元通寶

A-4区-1面上包含層
開元通寶

A-2区-2面
乾元重寶

A-3区-カベ
熙寧元寶

A-4区1面-057
元豊通寶



A-2区-1面-008
元祐通寶

A-1区-1面
元符通寶

A-1区-4面-231
政和通寶

A-3区1面-056半割
元豊通寶

Fig.180　120次A区調査出土銅銭拓本1（1/1）

表６　出土遺構別銅銭一覧

遺構番号	銭貨名	初鋳年	王朝名	径(cm)	備考
１面004	解読不能				錆激しい
１面007	元豊通寶	1078	北宋	2.42	錆激しい
１面008	聖宋元寶	1101	北宋	2.45	５枚錆着の１
１面008	紹聖元寶	1094	北宋	2.41	５枚錆着の２
１面008	元祐通寶	1086	北宋	2.38	５枚錆着の３
１面008	元祐通寶	1086	北宋	2.39	５枚錆着の４
１面008	元豊通寶	1078	北宋	2.39	５枚錆着の５
１面008	皇宋通寶	1038	北宋	2.48	６枚錆着の１
１面008	政和通寶	1111	北宋	2.35	６枚錆着の２
１面008	天禧通寶	1017	北宋	2.49	６枚錆着の３
１面008	政和通寶	1111	北宋	2.48	６枚錆着の４
１面008	咸平元寶	998	北宋	2.46	６枚錆着の５
１面008	皇宋通寶	1038	北宋	2.45	６枚錆着の６
１面025	元祐通寶	1086	北宋	2.45	
１面034	解読不能				錆激しい
１面042	元豊通寶	1078	北宋	2.22	小さめ
１面042	解読不能				１／４残
１面042	解読不能				細片
１面042	解読不能				細片
１面046	至和通寶	1054	北宋		錆激しい
１面056	元豊通寶	1078	北宋	2.41	錆激しい
１面057	元豊通寶	1078	北宋	2.43	錆激しい 背面に大きなズレ
１面057	解読不能				錆激しい １／２残
１面057	嘉定通寶	1208	南宋	2.45	背面「一」茶色味を帯びる
１面060	紹熙元寶	1190	南宋	2.97	折二 背面「三」茶色味を帯びる
２面074	元祐通寶	1086	北宋	2.39	錆激しい
２面079	大観通寶	1107	北宋		反りあり
２面088	紹聖元寶	1094	北宋	2.47	
３面117	解読不能				錆激しい ２／３残
３面117	崇寧重寶	1102	北宋	3.32	当十銭
３面133	元豊通寶	1078	北宋	2.48	錆激しい
３面151	景祐元寶	1034	北宋	2.53	錆激しい
４面231	政和通寶	1111	北宋		加工の跡あり
４面349	太平通寶	976	北宋		

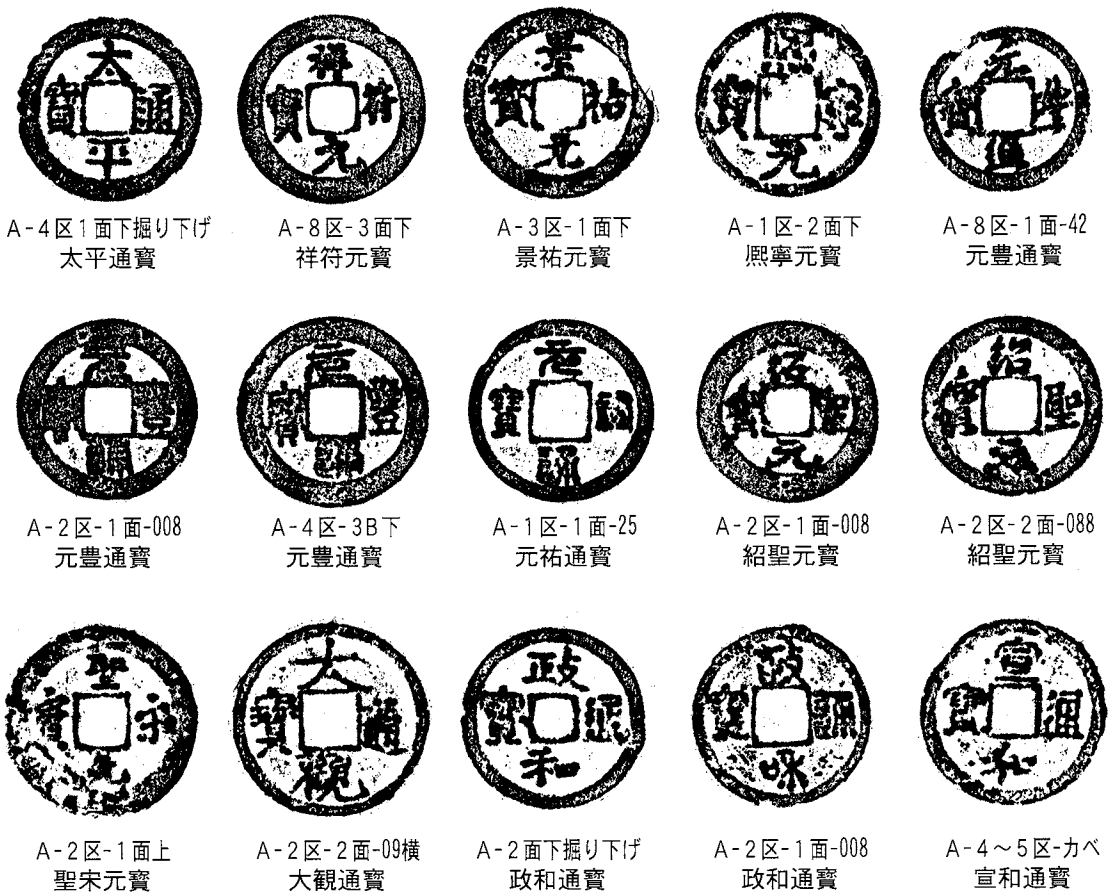


Fig.181　120次Ａ区調査出土銅銭拓本２（1/1）

第五章　120次調査Ｂ区の概要

１．発掘調査の方法と経過

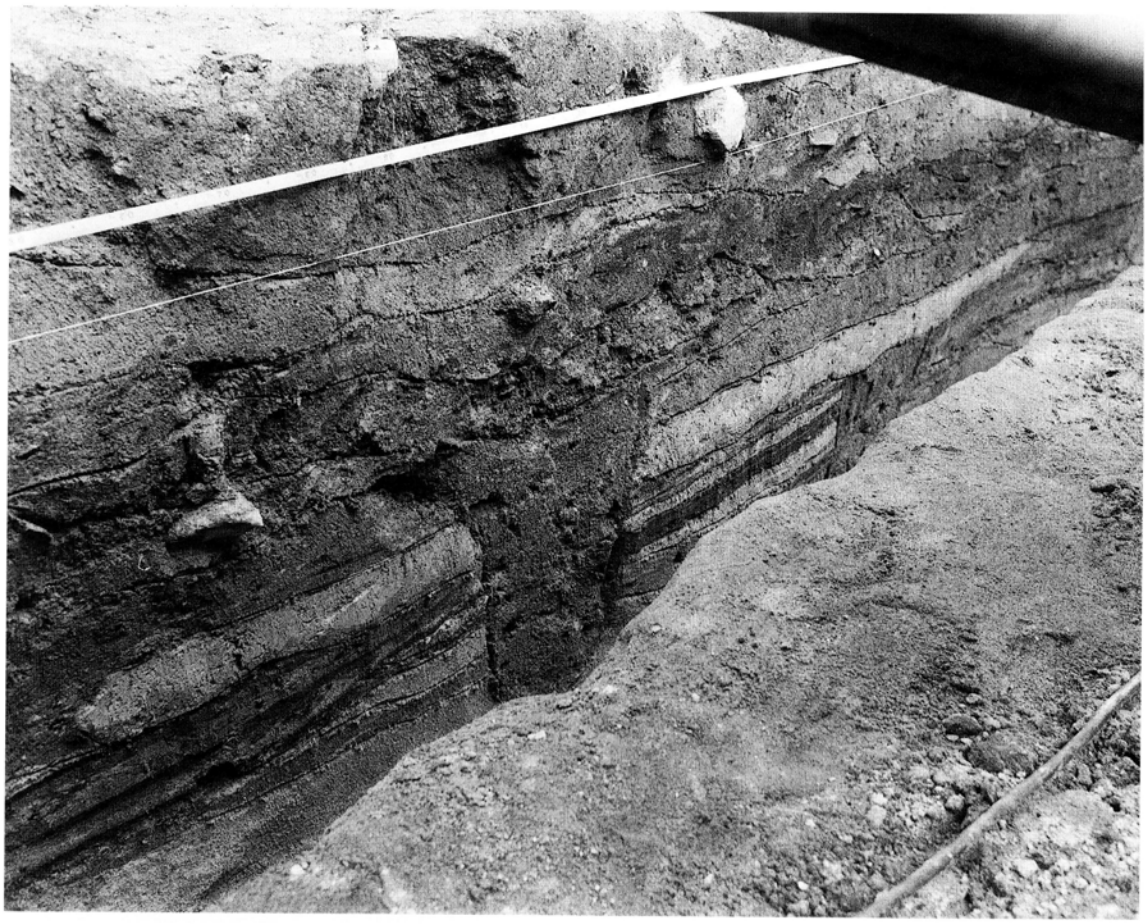
Ｂ区においては、発掘調査に先行する鋼矢板打ち込み、表土掘削、地中梁工事が終了したのは1999年12月16日で、翌17日より発掘調査に着手した。調査期間としては、Ａ区の調査と重複している。

発掘調査は、まず表土除去後のガラを除去し、中央に長軸に沿ってトレンチを設定して、土層の堆積を確認、遺構検出面を設定することから始まった。以後、トレンチ掘削、遺構検出面設定、掘り下げ、遺構検出、遺構精査、記録作成を繰り返して、文化層の発掘調査を行った。下層については、次節で述べるようにＢ区は砂丘上に立地していないため、基盤層の堆積環境を確かめるため、Ａ～Ｅのグリッドを設け、砂層の調査を行った。

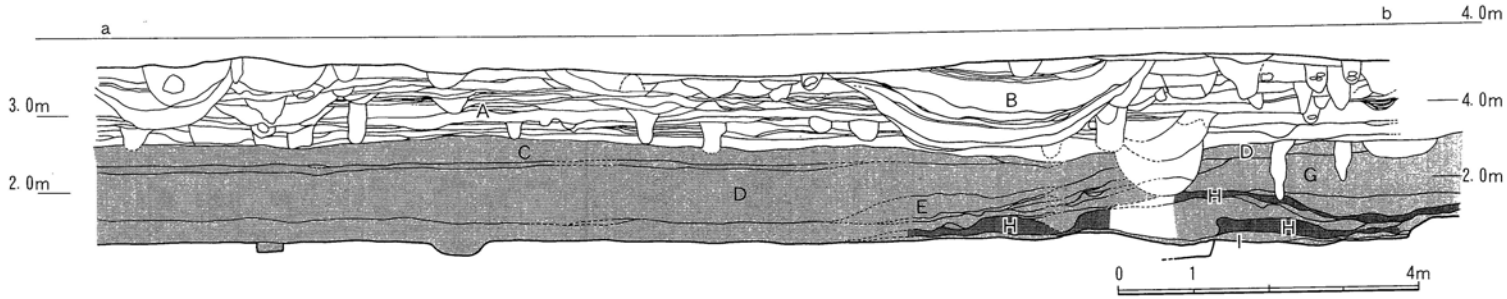
2000年３月13日現場作業終了、同21日撤収をもって、３次４地点にわたる御供所疎開跡地道路建設関係の発掘調査を終了した。

２．基本層序

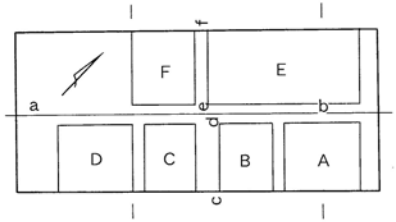
発掘調査で確認し得た最下層は、河川性の粗砂である。粗砂の上を、厚く砂層が覆うが人為的な埋



Ph.142　整地層堆積（１面下）中央トレンチ（南より）

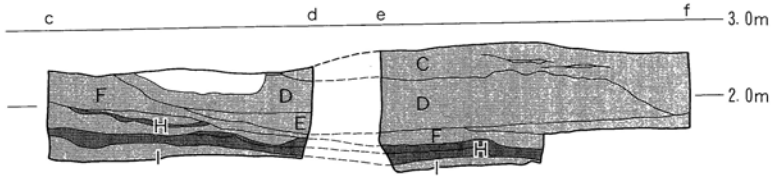


中央ベルト土層実測図（1/100）



3面下グリッド配置図（1/320）

A 整地層群
B 094号遺構埋土
C 灰褐色砂
D 灰色砂、まじり多い
E 灰白色砂
F 灰褐色砂
G 黄色砂
H 黒色粘質土
I 粗砂



B・Eグリッド南西壁土層実測図（1/100）

Fig. 182　120次B区土層実測図（1/100）

Ph. 143　最下部砂層堆積状況

立の可能性が高い。標高2.6m付近から上には、細かい単位の整地層が第１面まで堆積している。整地は砂質土、炭・焼土、粘土からなる互層で、粘土面上が各生活面に当たると思われる。

３．各遺構検出面の概要

（１）第１面

表土除去面に設定したトレンチで、すぐ下から大型の礎石を検出した。礎石は灰色粘土面に据えてあったため、この礎石上面の高さを基準として掘り下げを行い、灰色粘土面で第1面を設定した。標高3.4～3.5mを測る。

14世紀後半の生活面であろう。

（２）第２面

標高2.9～3.1mで設定した遺構検出面である。黄灰色粘土面を指標としたが、第１面直下にも、硬化した焦土面があり、中間にも生活面が存在したことは明かである。

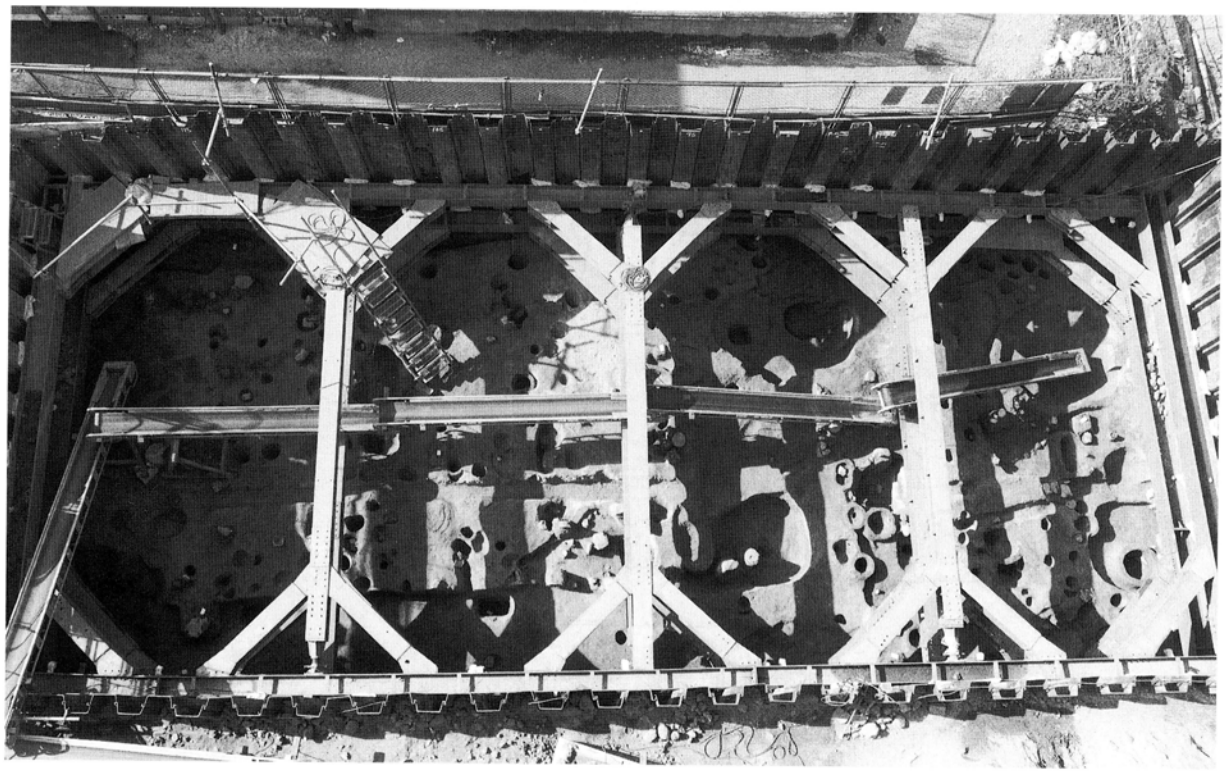
14世紀中頃の生活面と思われる。

（３）第３面

標高2.4～2.7mで設定した遺構検出面である。整地層を除去した、砂質土の上面に当たる。調査区の周囲は、二段目の地中梁工事のため、遺構検出面よりも20～50cmほど掘り下げている。特に南東壁際においては、この掘り下げのためかなりの遺構が失われたものと推測される。

遺構密度は、３面の内最も濃く、溝に区画されて建物が立っていた様子がうかがわれる。

13世紀後半～14世紀前半の遺構検出面であろう。



Ph.144　第３面全景（南東より）

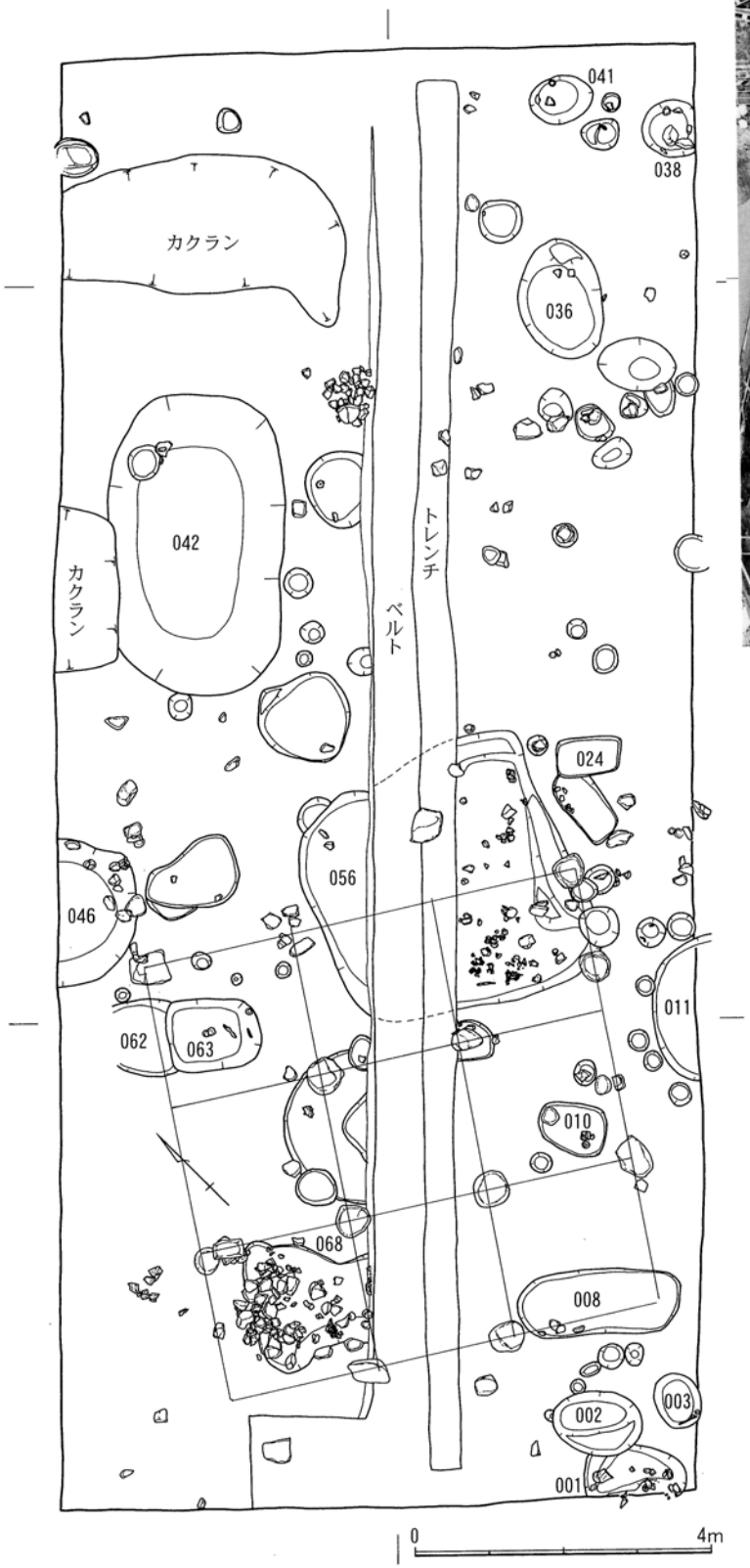
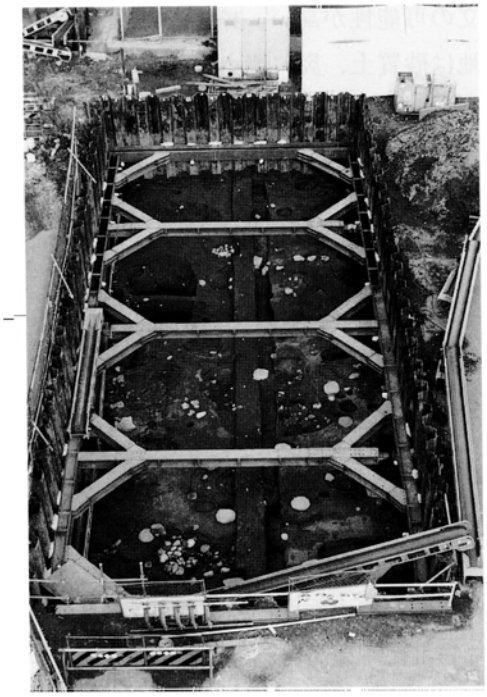


Fig. 183　第１面遺構全体図（1/100）



Ph. 145　第１面全景（南西より）

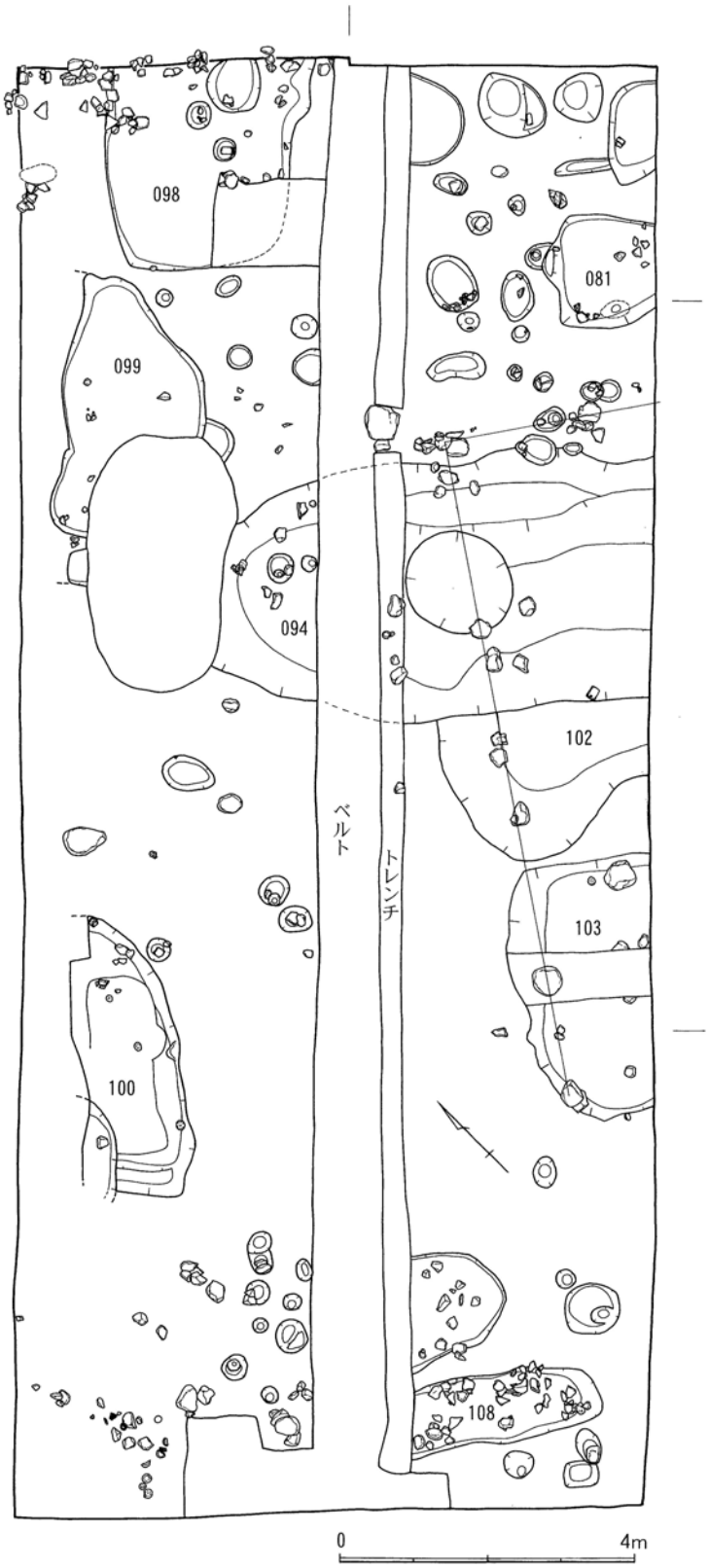
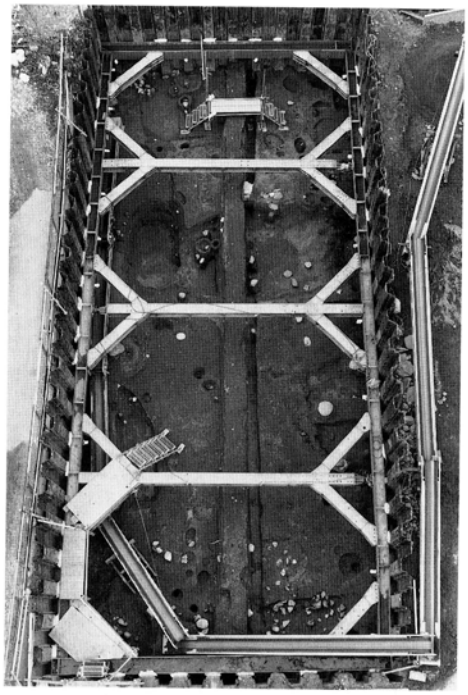


Fig. 184　第２面遺構全体図（1/100）



Ph. 146　第２面全景（南西より）

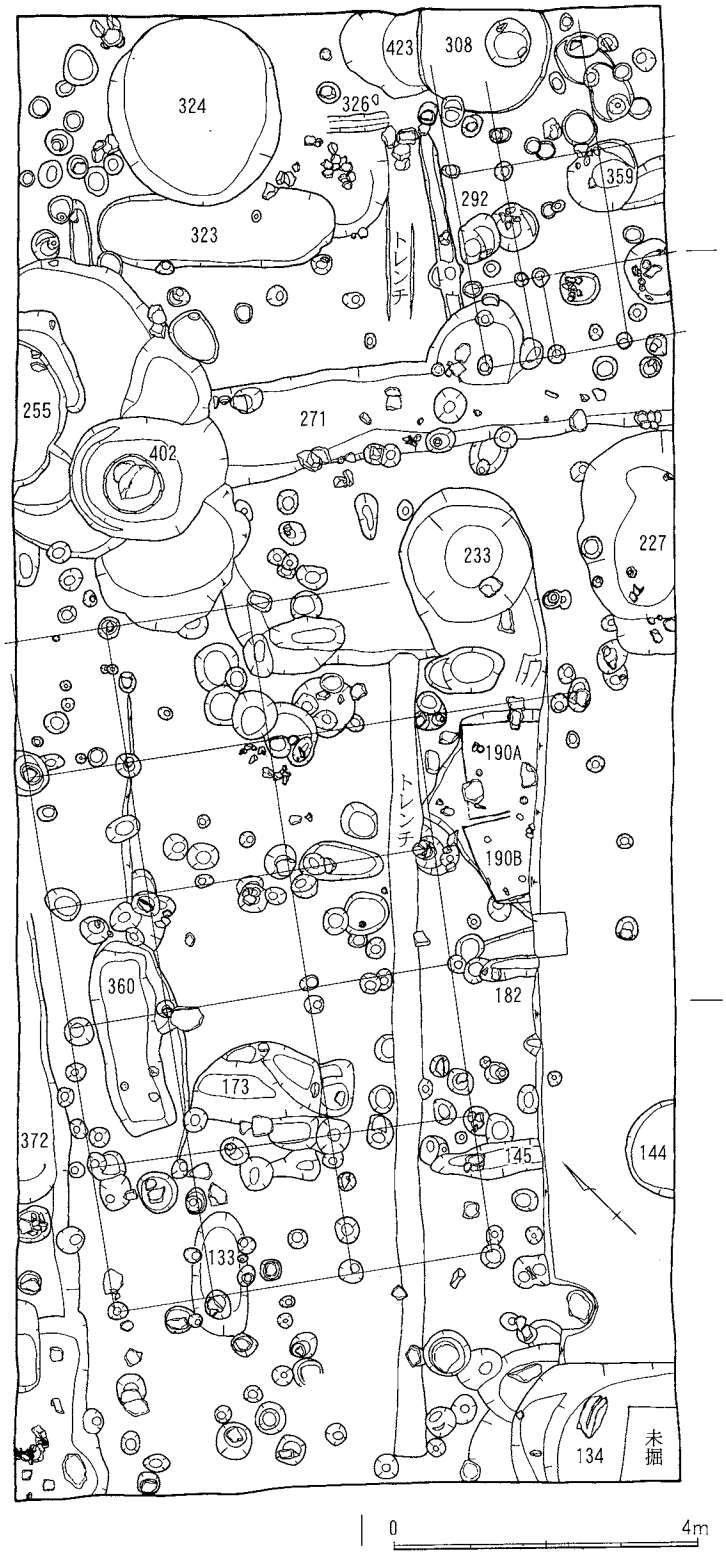


Fig. 185　第３面遺構全体図（1/100）

4．遺構と遺物

（1）最下砂層出土人骨

第３面において、下層の状況を確認するために設定したグリッドのひとつ、Ｄグリッドの下部から出土した人骨である。調査区南東壁側から、急角度で下降して堆積した灰色砂の下部から出土した。第六章で述べるが、この堆積砂については、人為的な埋立の可能性が指摘されており、人骨はそれに先だって流れ込んだものであろう。

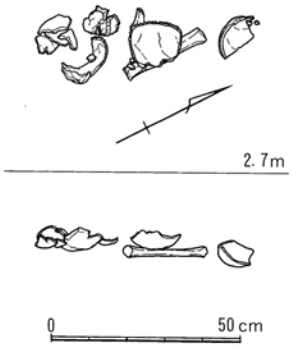


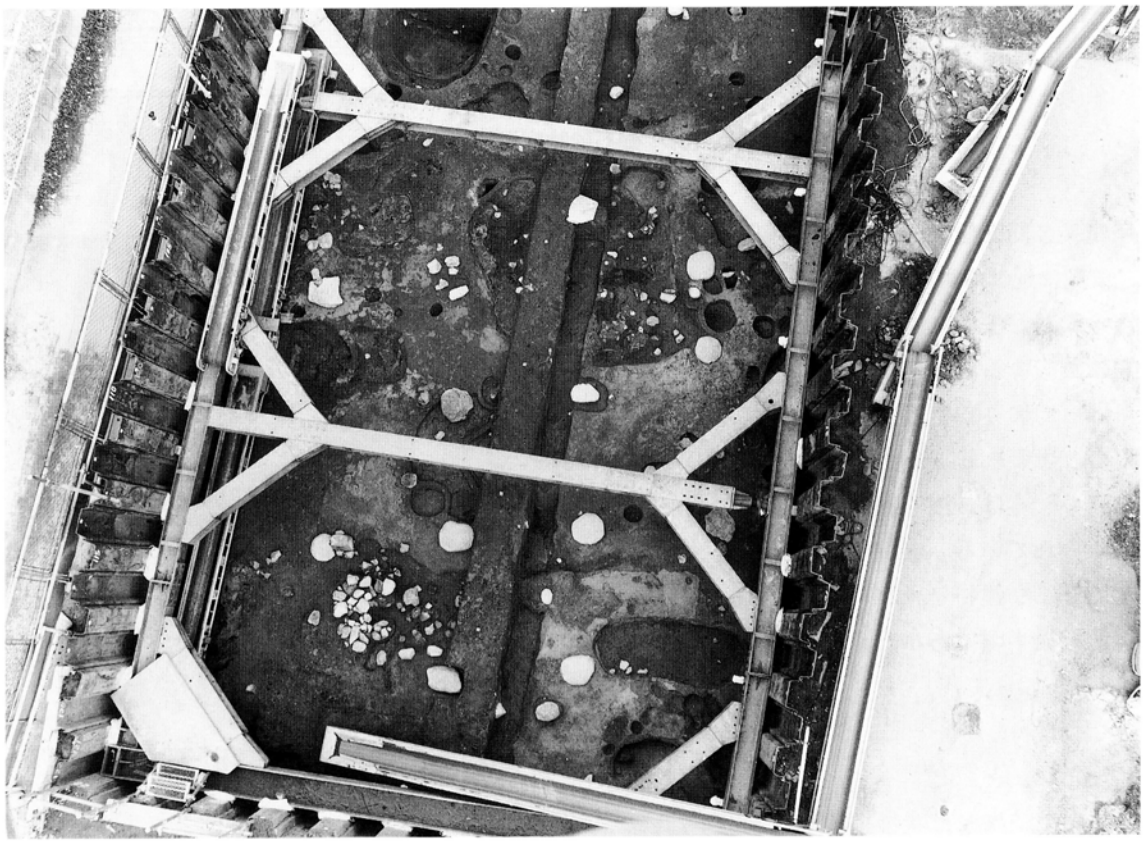
Fig.186　最下層人骨実測図（1/20）

Ph.147　人骨出土状況（北東より）

分離した頭蓋骨の部分と獣骨が検出されている。13世紀代の埋立に先行するということで、12世紀代の人骨と推測される。人骨については、巻末の付篇を参照いただきたい。

（2）礎石建物跡

Ｂ区からは、建物跡を構成すると考えられる礎石列が数列想定できたが、現場で明らかに認識できたのは第1面の一棟だけであり、それについてFig.187に図示する。



Ph.148　礎石建物（南より）

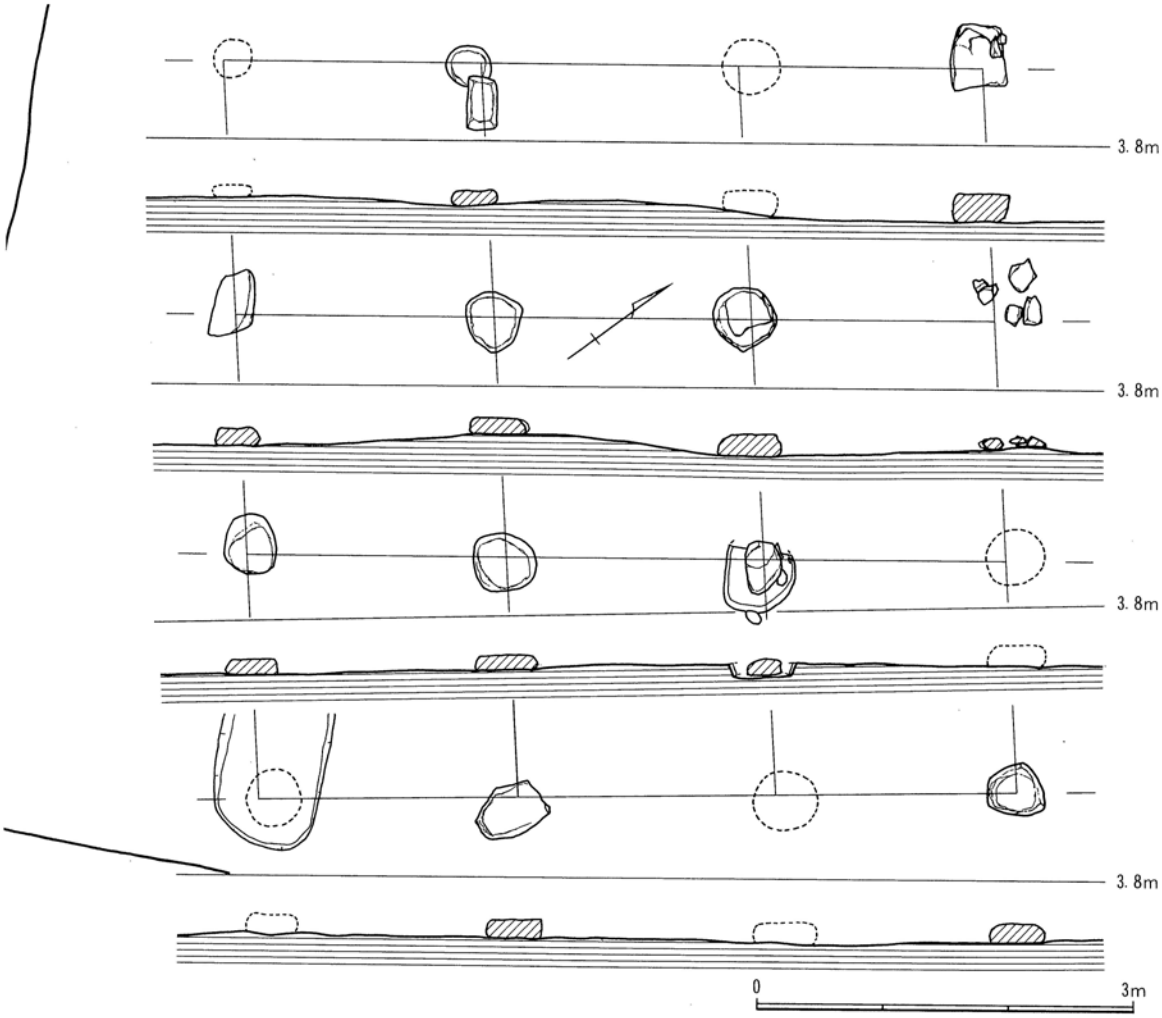


Fig. 187　礎石建物実測図（1/60）

3間×3間の総柱建物であるが、東側に延びる可能性がある。6個の礎石が失われているが、1個に該当する部分には小礫が散らばっており、割って抜かれたものと思われる。粘土の整地面に直もしくは、浅く掘り込んで据えられている。寺院の堂舎など、重厚な建物と思われる。

14世紀後半頃であろう。

（3）土坑

042号遺構

第1面で検出した大型土坑である。長軸410cm、短軸240cm

Ph. 149　042号遺構

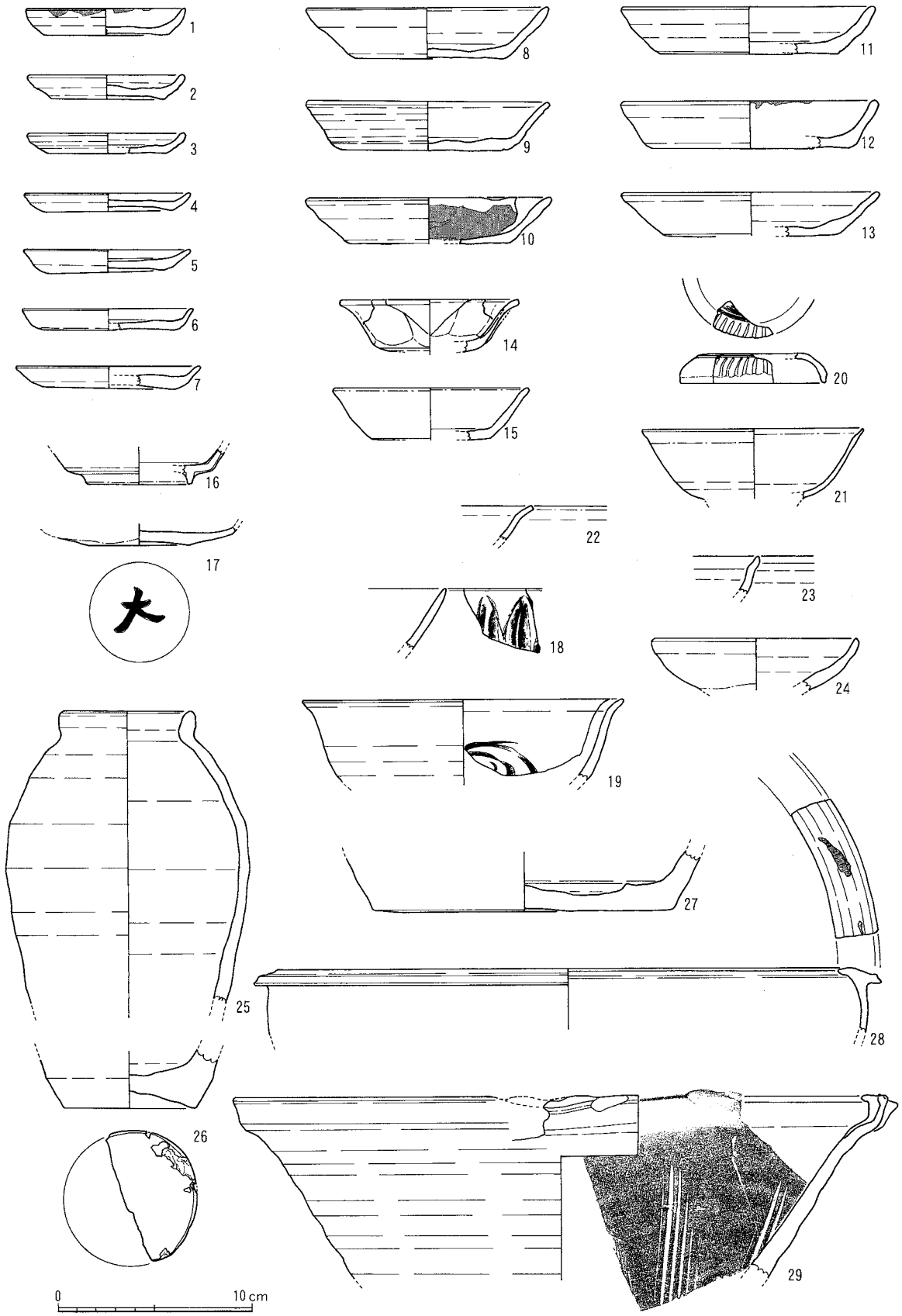


Fig. 188　042号遺構出土遺物実測図１（1/3）

の小判型を呈し、深さは150cm をはかる。埋土には顕著な変化はなく、一気に埋められたと思われる。

出土遺物を Fig.188～190に示す。1～13は、土師器である。1～7は皿、8～13は坏で、底部は回転糸切りする。1と10には、油煙が付着しており、灯明皿に用いられたことが分かる。14・15は白磁皿である。14は、体部を面取りして、八角に作る。16～19は青磁である。17の底部には、「大」の墨書がみられる。20～22は、青白磁である。21・22の碗は、口禿に作る。23・24は、天目茶碗である。25～28は、陶器である。25・26は褐釉の瓶、27は壺、28は朝鮮王朝陶器の鉢である。28の口縁上面には、貝目が残る。29～36は国産陶器である。29・31・32・35は肥前陶器で、31の見込みには色絵が見られる。

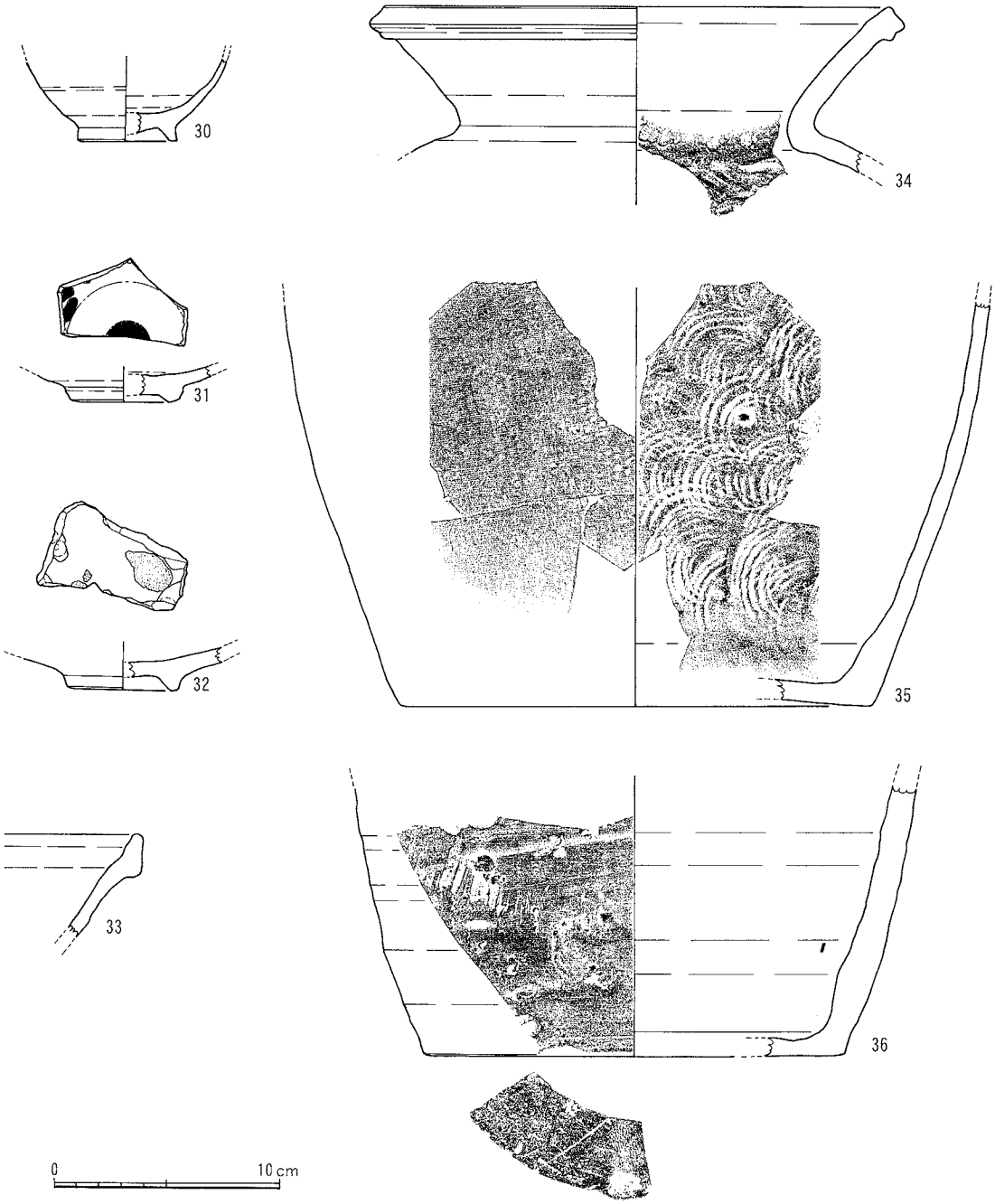


Fig.189　042号遺構出土遺物実測図２（1/3）

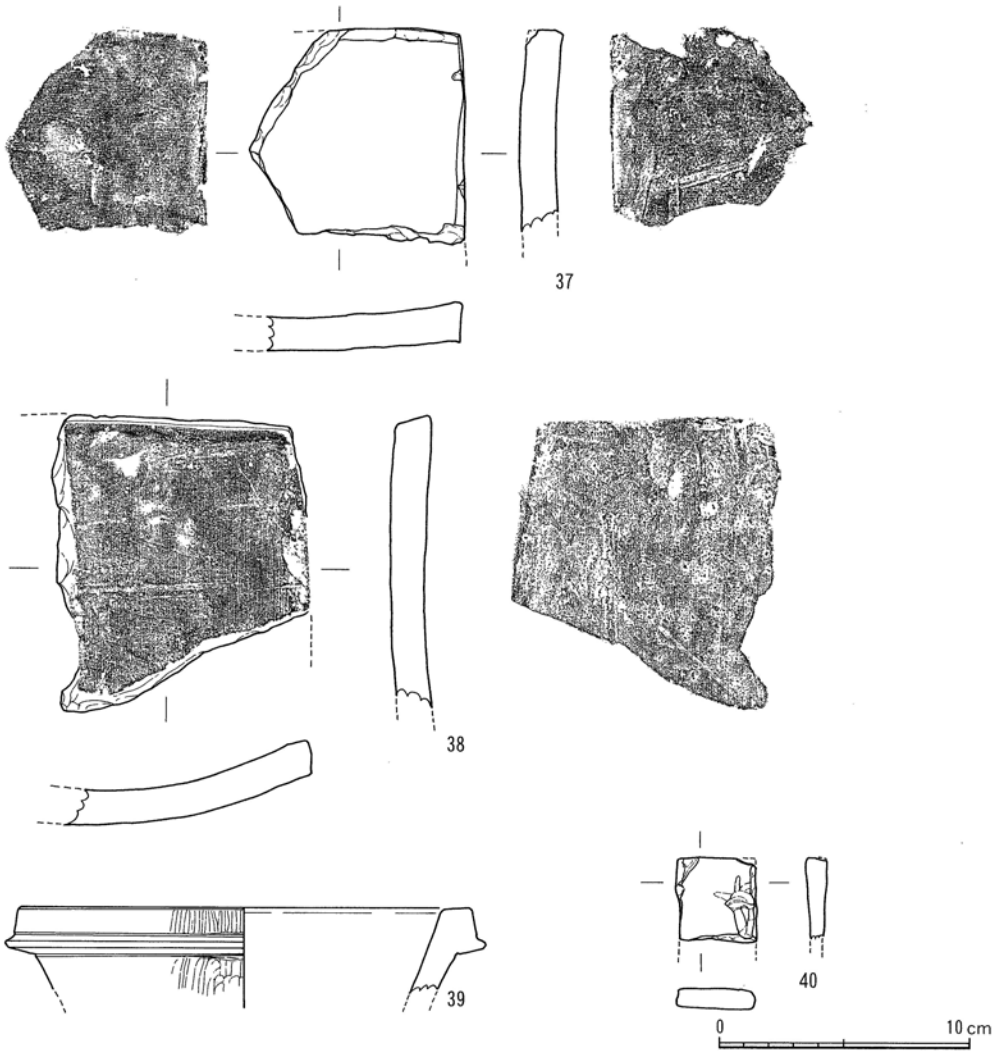


Fig. 190　042号遺構出土遺物実測図（1/3）

30は、肥前の白磁である。33は**東播系須恵器**の鉢、34は須恵器の壺で、混入遺物であろう。36は、**備前焼**の壺である。37・38は**瓦**、39は**石鍋**・40は**砥石**である。

17世紀前半の土坑である。

056号遺構

第1面で検出した大型土坑である。350cm 四方の略方形を呈し、遺構検出面からの深さは40cm を測る。

出土遺物を Fig. 192に図示する。1～13は、**土師器**

Ph. 150　056号遺構（南西より）

である。1は口径7.4cm、2～4は7.9～8.3cm、5は9.4cmを測る。6～11は坏である。6～10は口径12.2～12.7cm、11は17.4cmを測る。12・13は鉢である。13は口径17.0～17.8cm、底径9.0cm、器高5.25cmを測る。内面全体と外面の下半は、手持ち篦削りである。外底部にも篦削りが及んでいる。内底部は、撫で調整する。口縁部には、小さな削り込み見られる。胎土・焼成ともに、明らかに在地産であるが、特異な形態を呈している。14は白磁碗で、体部外面の露胎部分に、花押と思われる墨書がみられる。15・16は青磁、17・18は無釉陶器のこね鉢である。

14世紀代の土坑であろう。

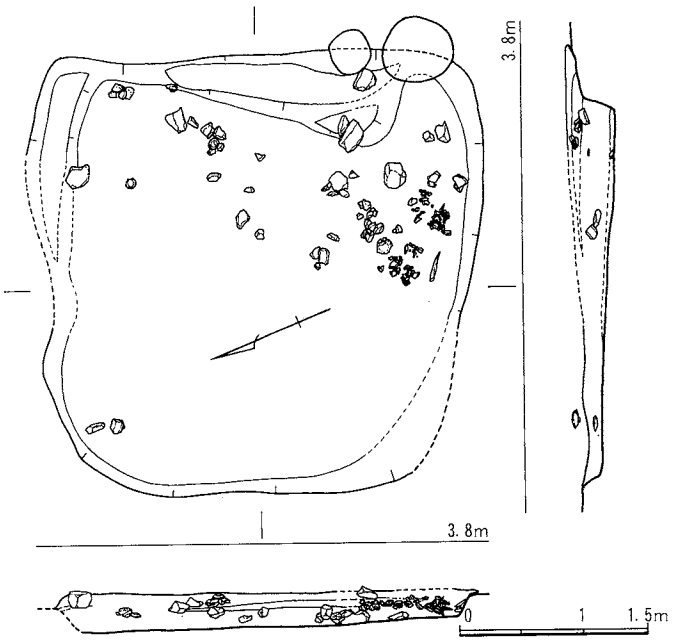


Fig.191　056号遺構実測図（1/60）

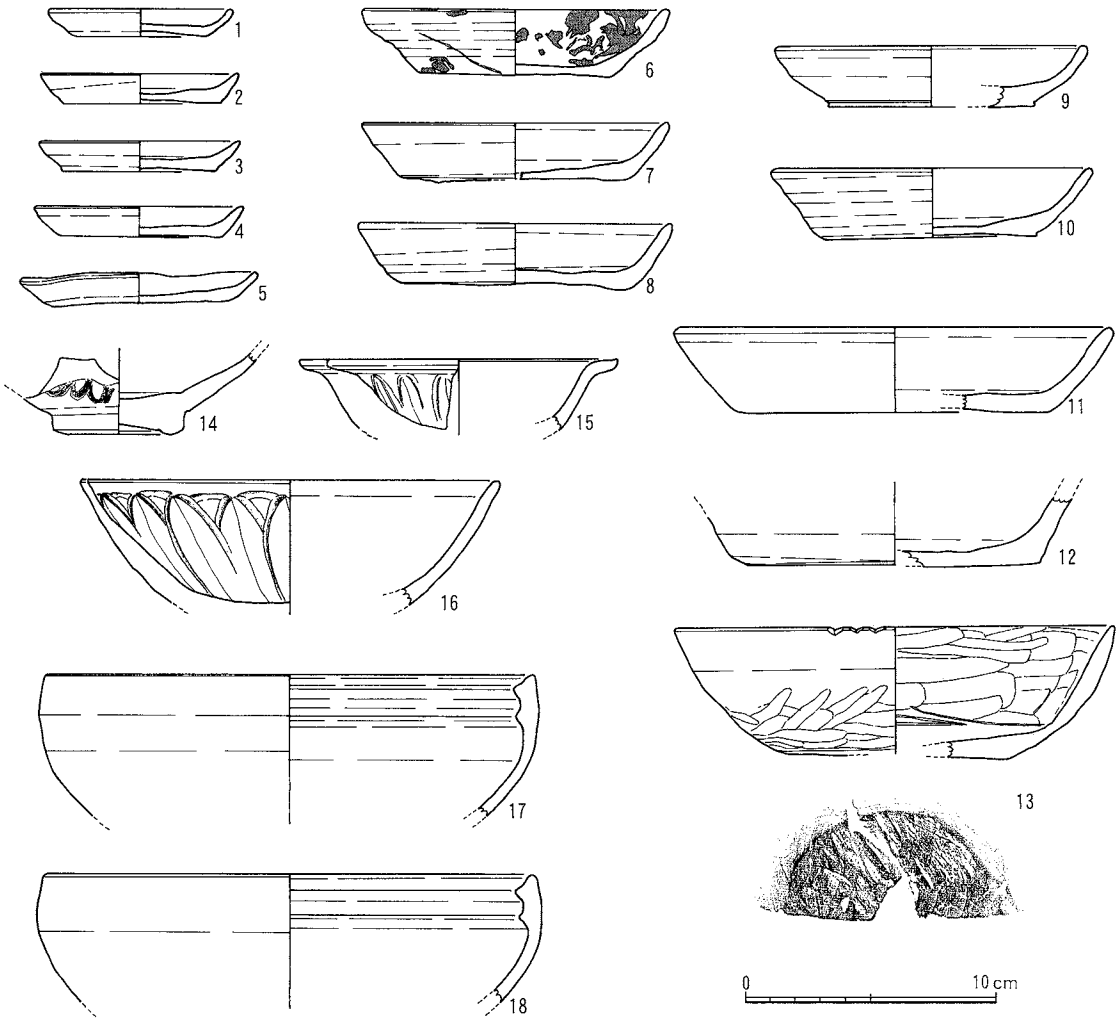


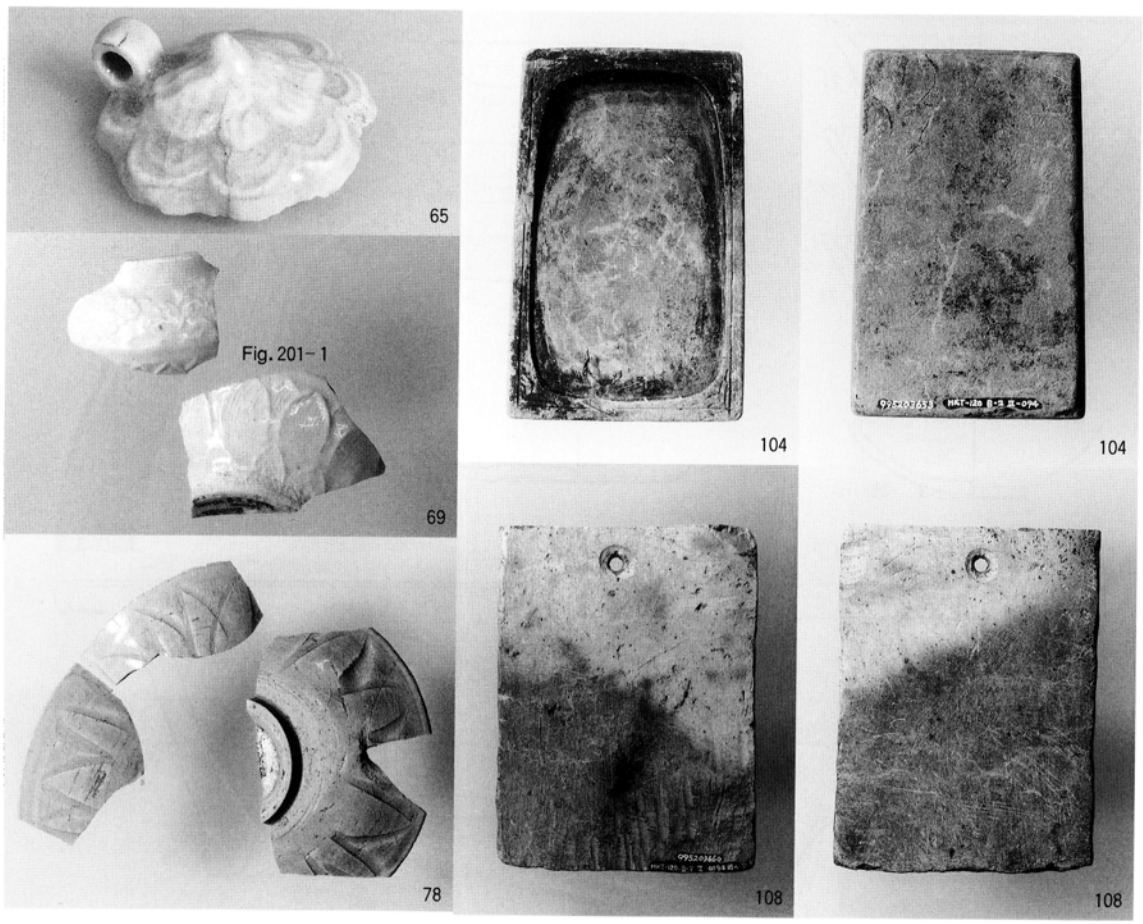
Fig.192　056号遺構出土遺物実測図（1/3）

094号遺構

第２面で検出した大型土坑である。調査区中程から、南東壁に延びており、全体を知り得ない。調査区内では、幅350cm、深さ65cm の溝状を呈する。底から233号遺構（井戸）を検出しており、233号遺構に後出する遺構である。

出土遺物を **Fig.** 193～198に示す。１～37は、**土師器**である。１～15は、皿である。口径7.2cm・器高1.2cm と一回り小さい１、口径7.8～8.0cm・器高1.0～1.4cm の２～10、口径8.3～8.5cm、器高0.9～1.1cm と偏平な11～14、口径10.4cm・器高1.2cm と大きめの15に分かれる。16～37は、坏である。口径11.4～13.2cm、器高2.2～2.9cm を測る。20の口縁部には、油煙が付着しており、灯明皿として使われていたことを示している。以上の皿・坏の底部は、すべて回転糸切りである。38は、**吉備系土師質土器**の碗である。搬入土師器である。39は、極めて薄手に作られた坏である。底部は回転糸切りである。在地産と思われるが、底径が小さく、特異な特徴を持つ。40・43～46は、**瓦質土器**である。40は火舎である。鍔状の口縁部上面に、巴文のスタンプが並ぶ。43～46は、こね鉢である。41・42は、**土鍋**である。外面には、厚く煤が付着している。47～49は、**東播系須恵器**である。47・48は鉢、49は壺の胴部である。50・51は、**常滑**焼きの甕である。50は、中野編年の６ｂ期、51は７期に属すると思われる。

52～64は、**青磁**である。61は、体部外面に片切り彫りで蓮弁文を刻む。外面の施釉は体部下位に及ばず、露胎となる。同安窯系の青磁である。その他は、龍泉窯系青磁に属する。65～68・70～72は、**青白磁**である。65は小壺の蓋、66は合子の蓋、67は袋物、68は合子の身、70は皿、71・72は碗である。67は、頚部片で全体は不明だが、瓶を布で包んで、頚部で縛ったような意匠と思われる。69・73～80



Ph. 151　094号遺構出土遺物

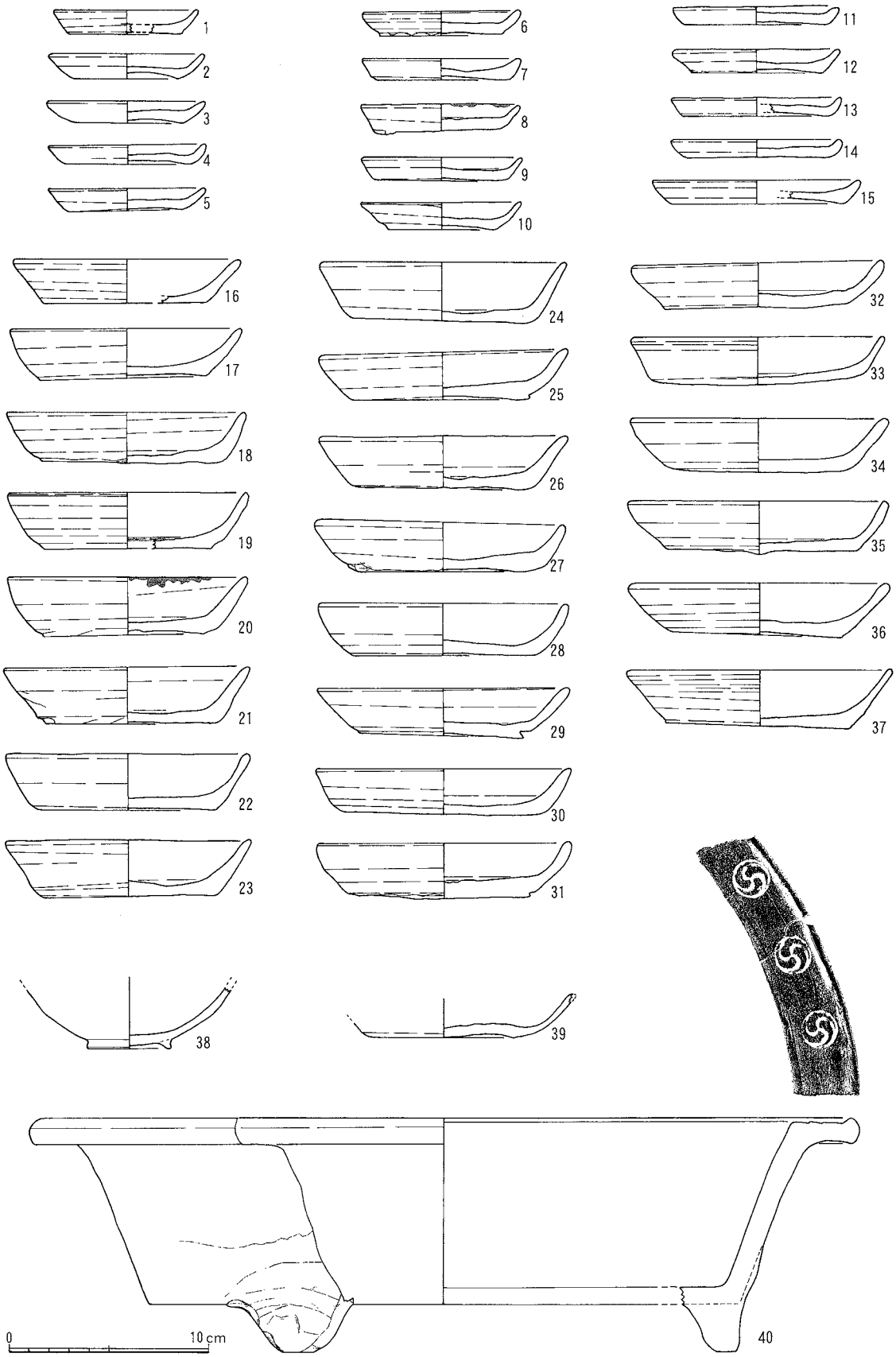


Fig. 193　094号遺構出土遺物実測図１（1/3）

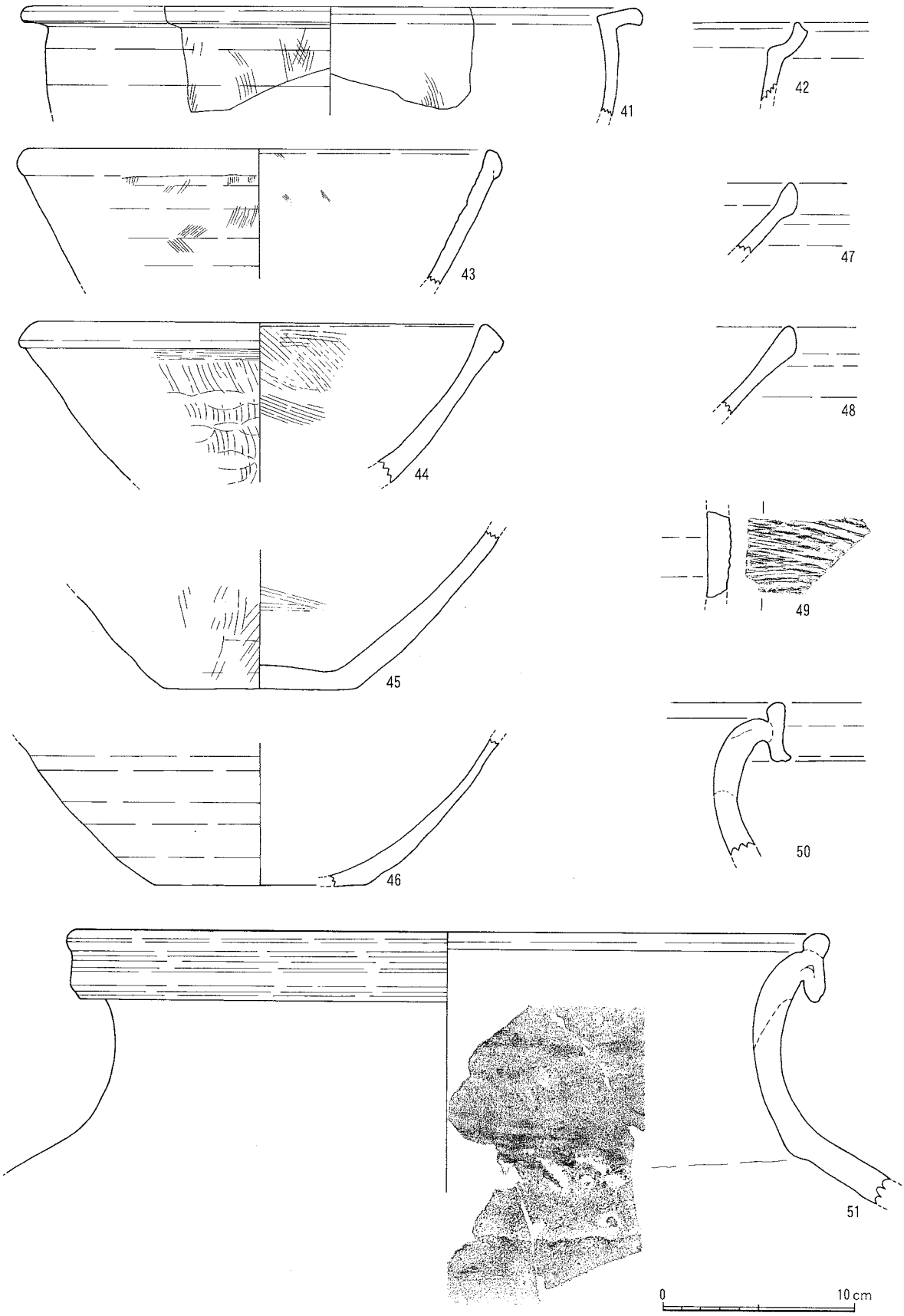


Fig. 194　094号遺構出土遺物実測図２（1/3）

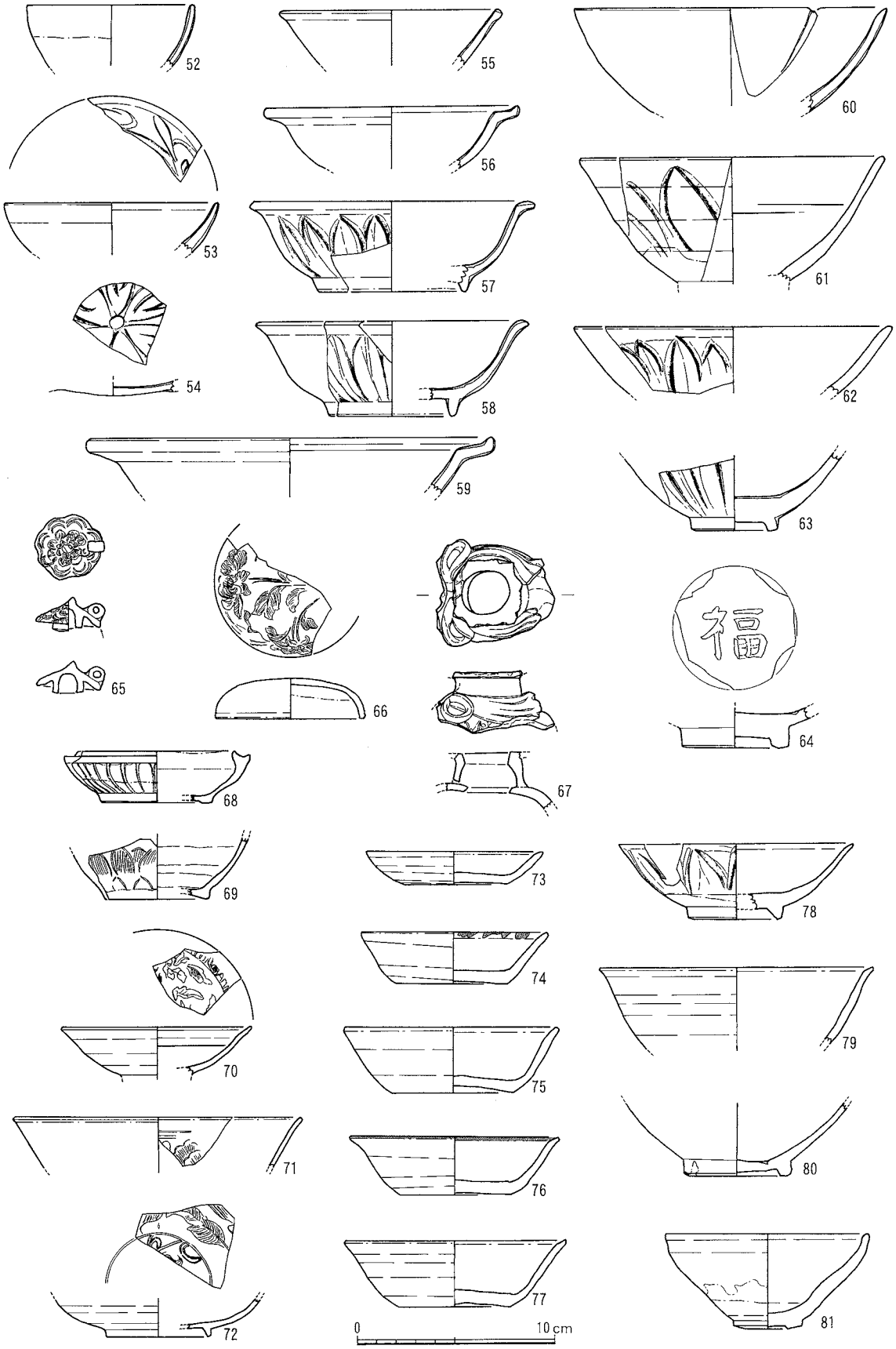


Fig. 195　094号遺構出土遺物実測図 3 （1/3）

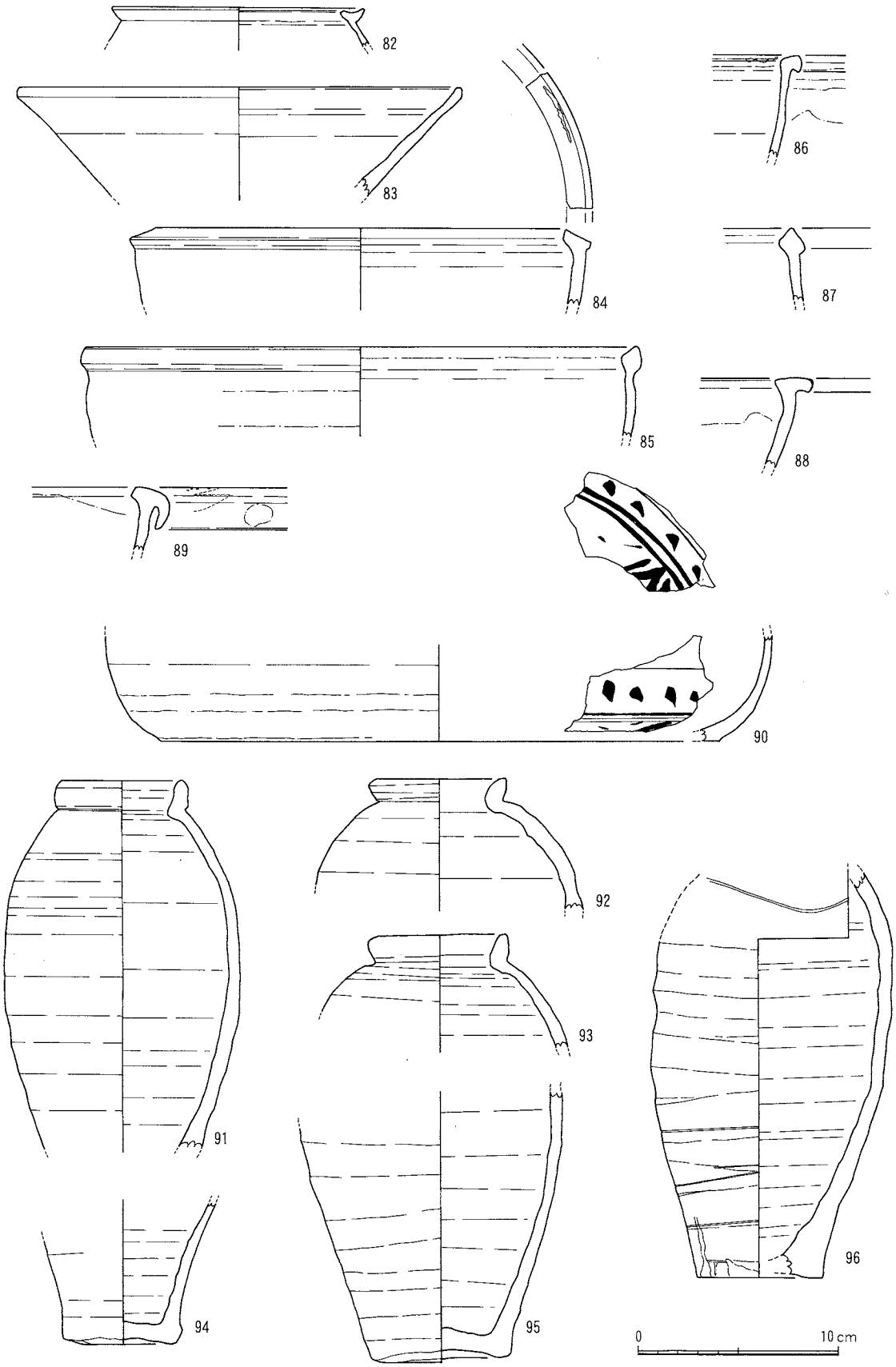


Fig. 196　196号遺構出土遺物実測図４（1/3）

は、**白磁**である。73～77は口禿皿、79・80は口禿碗である。78は小碗である。体部外面には、太い沈線で、蓮弁を描く。見込みは、輪状に釉を削り取っている。体部下位から外底部は露胎である。81～101は**陶器**である。81は天目茶碗、82は黒褐釉壺、83は灰釉の鉢、84は褐釉の鉢である。85～90は黄釉の盤で、90には鉄絵が描かれる。91～96は瓶である。94は灰釉、他は褐釉を施す。97～101は大型容器である。97は褐釉の壺、98～100は褐釉壺の底部、101は茶緑釉の大甕である。101は、口径63.4cm を測る。102・103は**瓦**、104～108は**石製品**である。104は硯、107は砥石、108は滑石の温石。

14世紀前半の溝状土坑であろう。

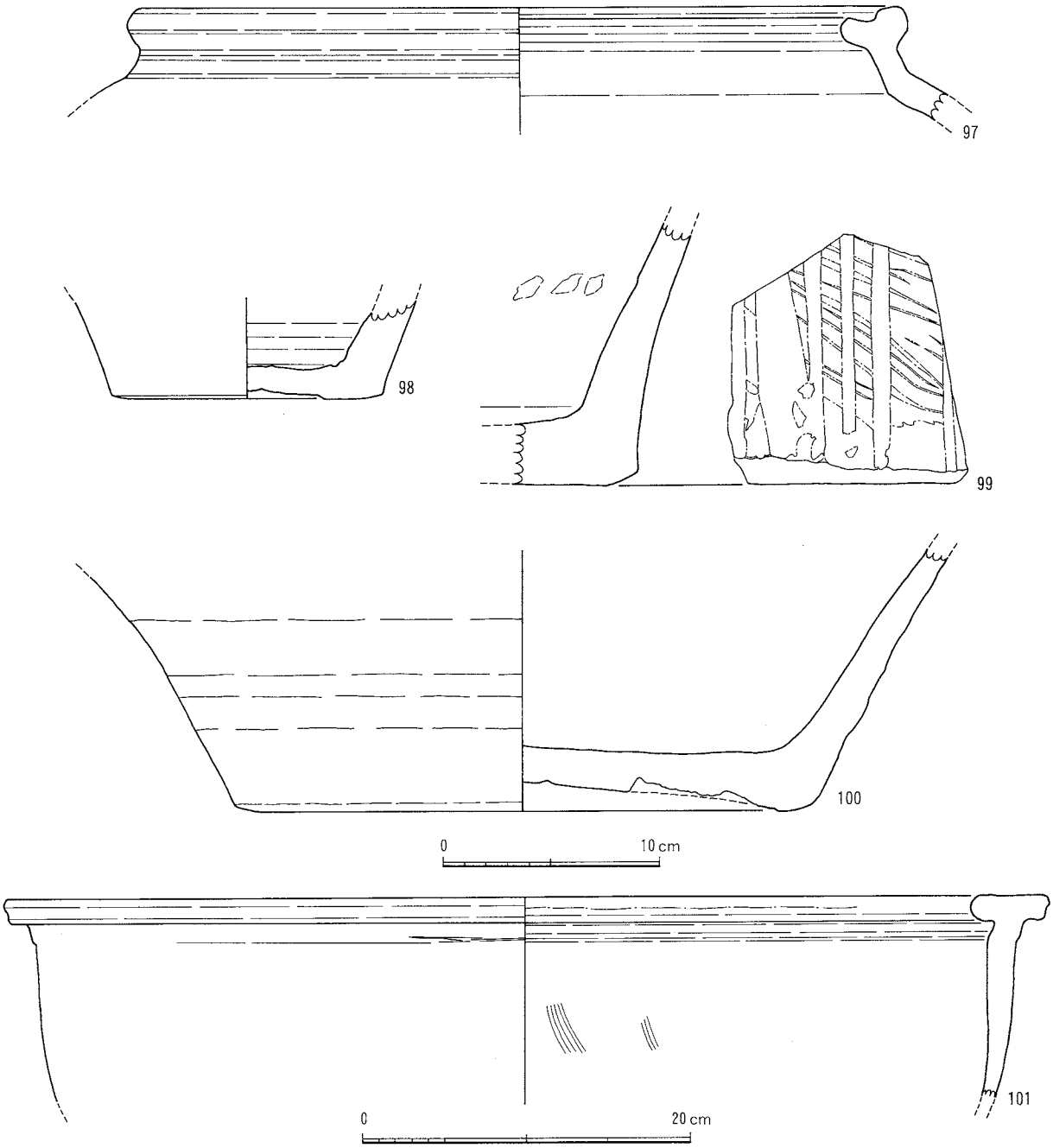


Fig. 197　094号遺構出土遺物実測図５（97～100…１/３，101…１/４）

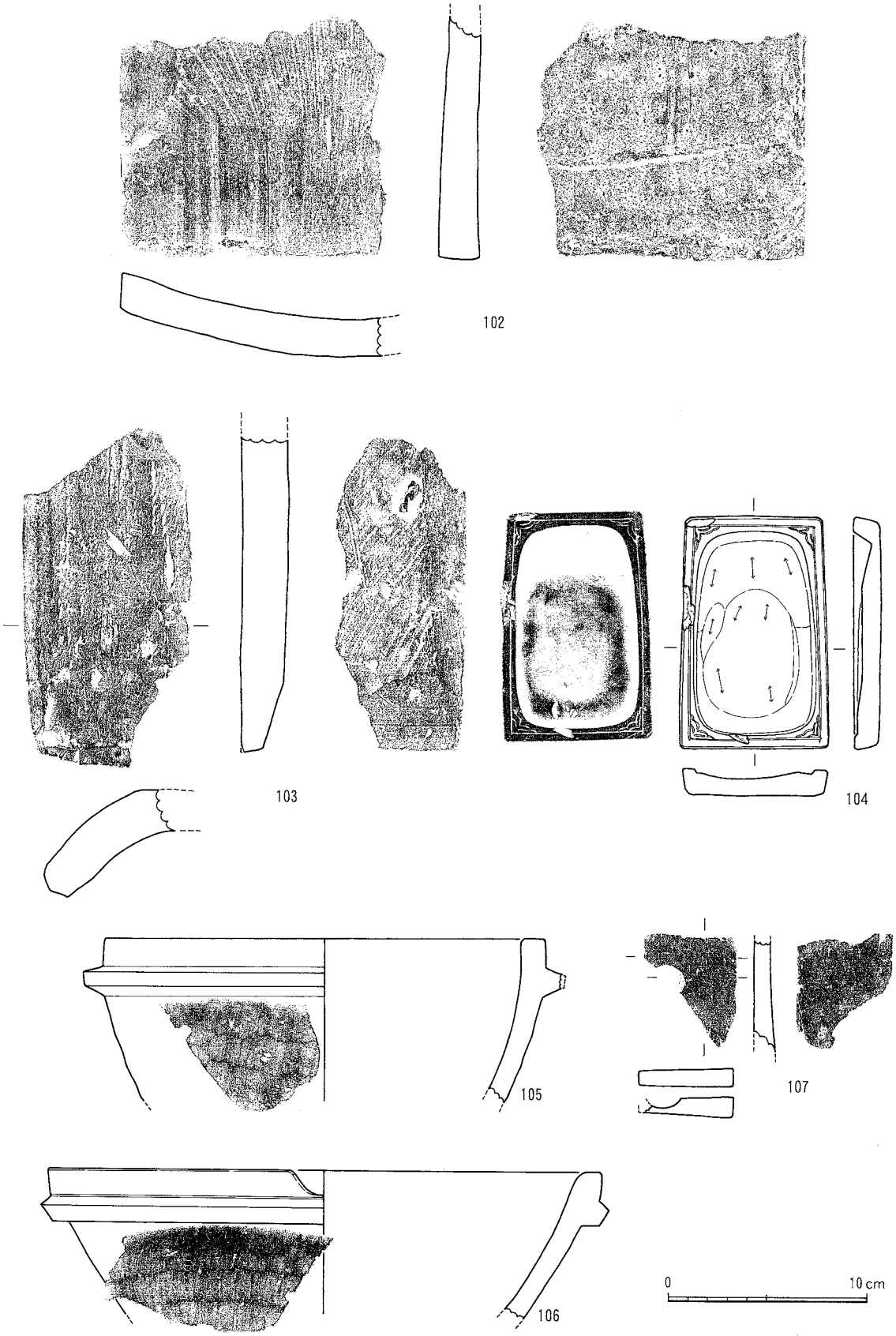


Fig. 198　094号遺構出土遺物実測図 6（1/3）

100号遺構

第２面の北西壁際で検出した大型土坑である。調査の都合上、半ば以上が未掘で、平面的にも全形を知り得ない。調査できた範囲で、一辺が約400cm、深さ50cm を測る。

出土遺物を Fig.199・200に示す。１～12は、土師器である。１～７は皿、８～12は坏で、８～10

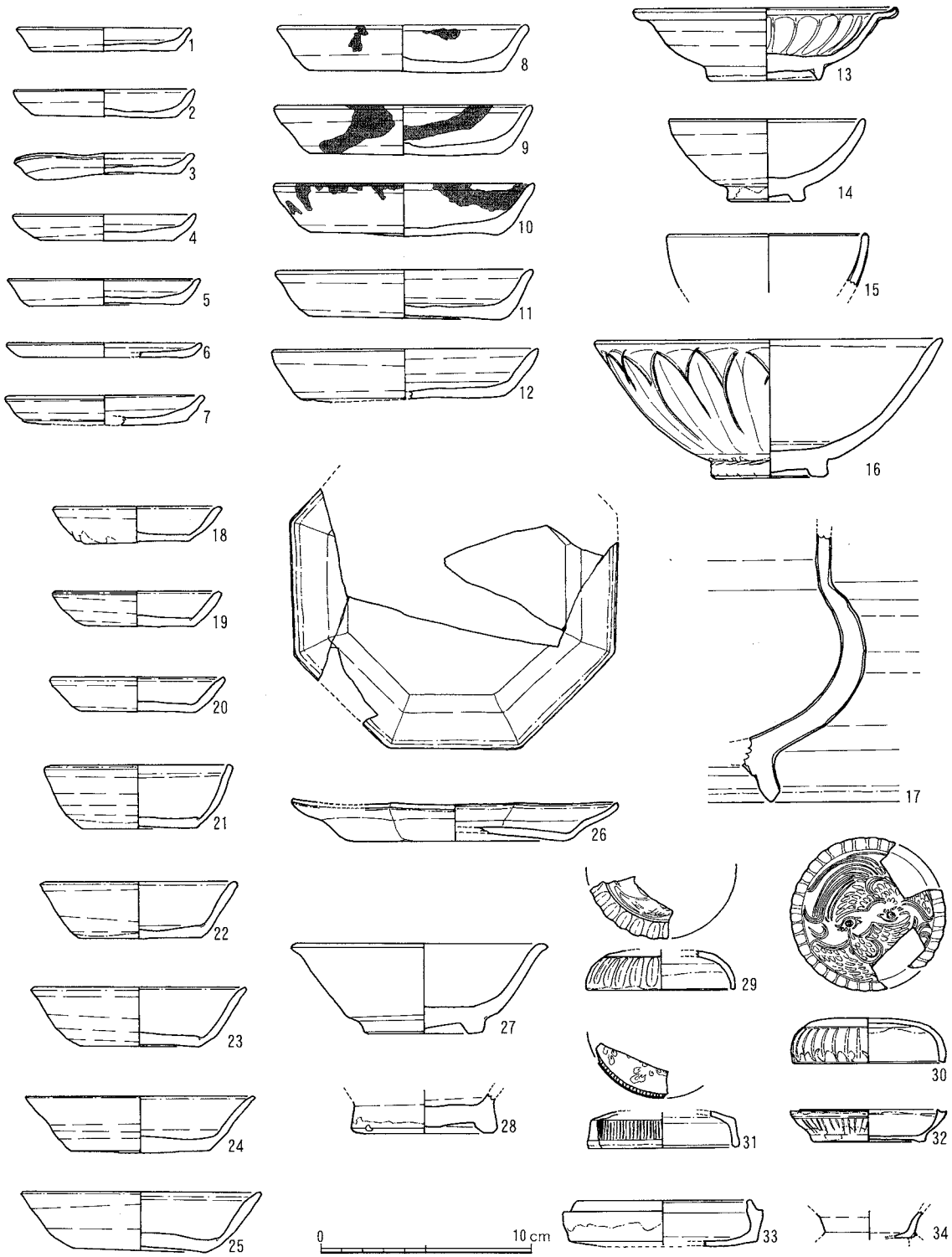


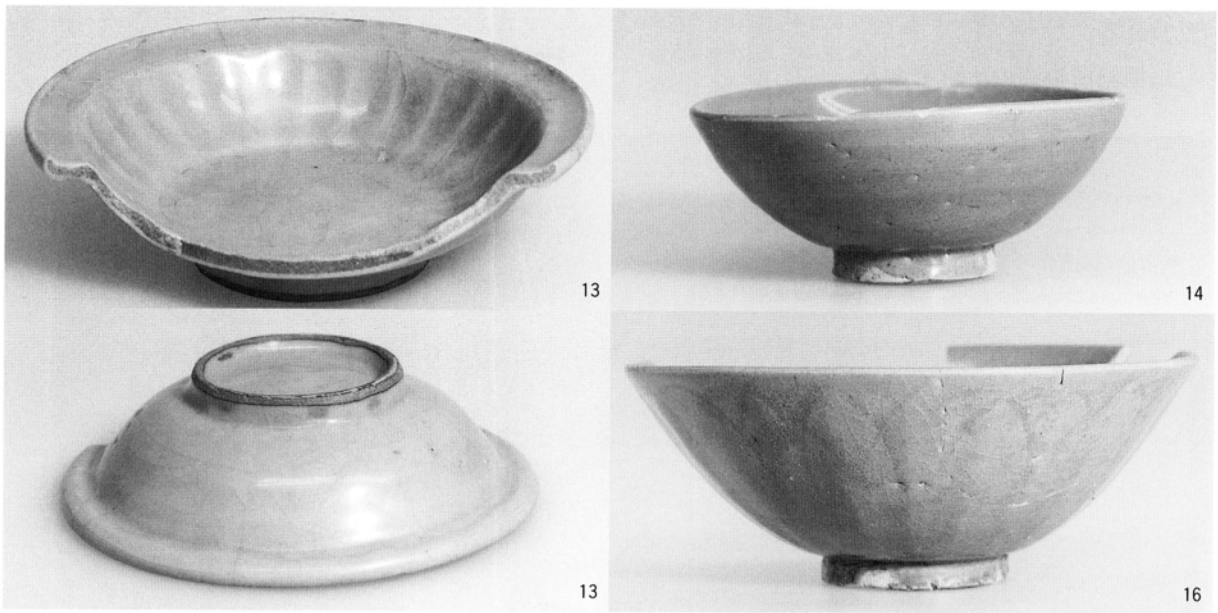
Fig.199　100号遺構出土遺物実測図１（1/3）

には油煙が付着している。底部は回転糸切りである。

13～17は**青磁**である。17は、香炉である。全面に厚く施釉し、高台畳付きを削り取って露胎とする。18～28は**白磁**である。18～25は、口禿皿である。26は、八角皿となる。浅い皿で、体部は屈曲して二段に開く。全面施釉だが、口縁部は削って、口禿とする。27は小鉢である。畳付きの際まで、透明釉をかける。見込みには、使用による細かい傷が多数付いている。外面は、黒く煤けている。28は壺の底部である。29～34は、**青白磁**である。29～33は合子、34は上下とも欠失するが、灯火器であろう。35～41は、**陶器**である。35・36は褐釉の瓶、37～41は黄釉の盤である。

42は滑石製の**石鍋**である。外面には煤が付着している。

13世紀後半から14世紀前半に属する土坑である。



Ph.152　100号遺構出土遺物

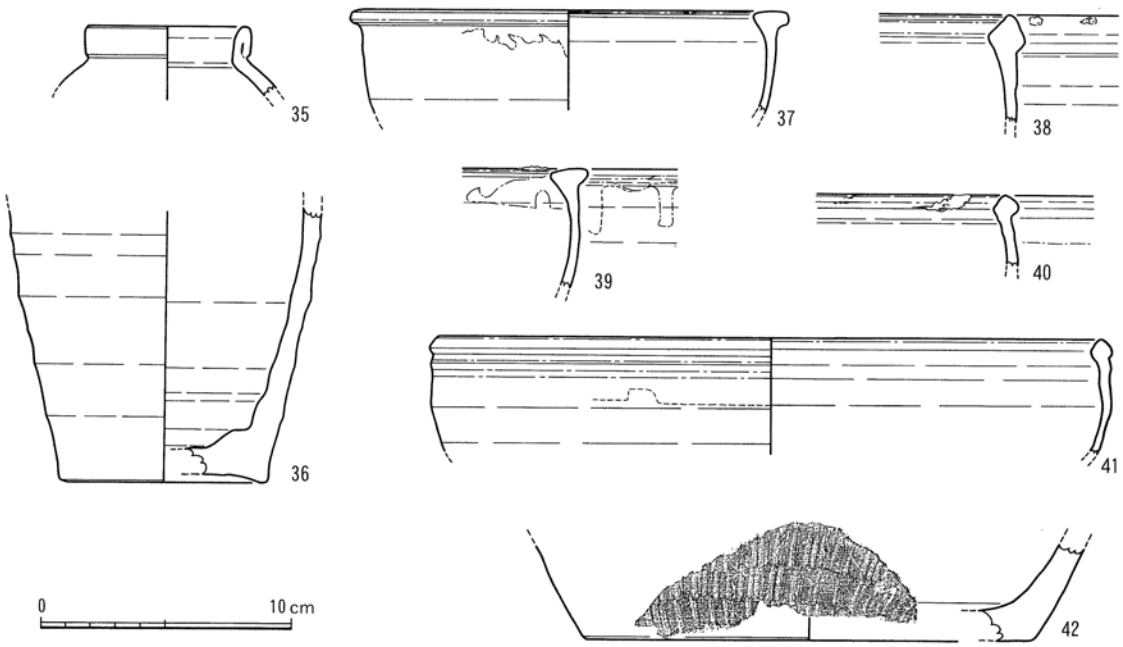


Fig.200　100号遺構出土遺物実測図２（1/3）

103号遺構

第２面で検出した大型土坑である。過半が調査区外に出るため、全容は不明である。

出土遺物の内、特筆すべき物を Fig. 201に示す。１は、**白磁**の印花文小壺である。Ph. 153-４は**青白磁**の合子蓋である。２は**天目茶碗**で、完形で出土した。３は、**石硯**である。赤褐色の凝灰岩（赤間石）を用いる。実測図下端の二辺は生きており、風字硯の再生品と思われる。

14世紀前半頃の土坑である。

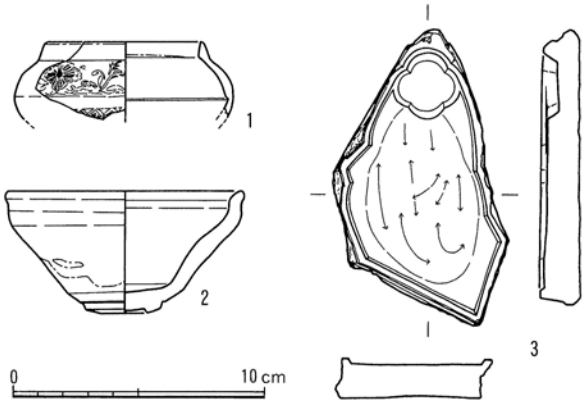
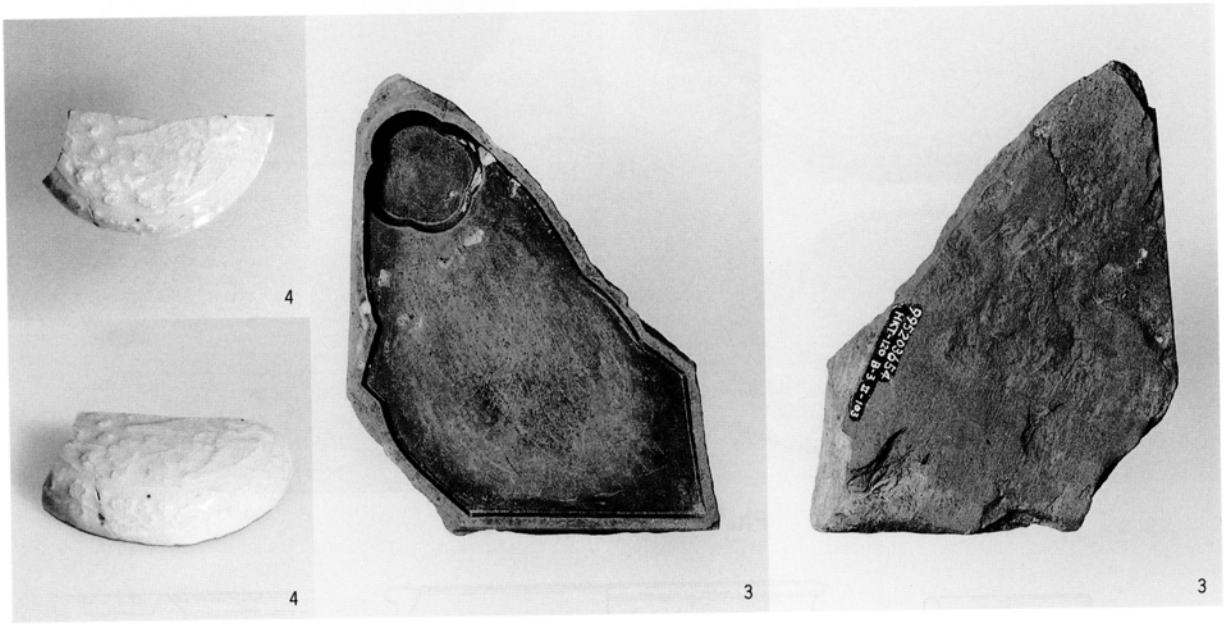


Fig. 201　103号遺構出土遺物実測図（1/3）



Ph. 153　103号遺構出土遺物

133号遺構

第３面より検出した土坑である。長辺180cm、短辺110cm の略長方形を呈し、遺構検出面からの深さは20cm 前後を測る。埋土中位より、完形の土師器皿・白磁皿を中心とした遺物が出土している。

出土遺物の一部を Fig. 203に示す。１～11は、**土師器**である。１～７は皿で、口径7.6～8.8cm、器高0.9～1.2cm を測る。８～11は坏である。口径12.1～13.8cm、器高2.1～2.4cm を測る。土師器皿・坏の底部は、回転糸切りである。

12～14は、**青磁**である。12・13は鎬蓮弁文の碗である。14は小鉢で、前面施釉した上で、畳付きの釉を削り取って、露胎とする。15～25は**白磁**である。

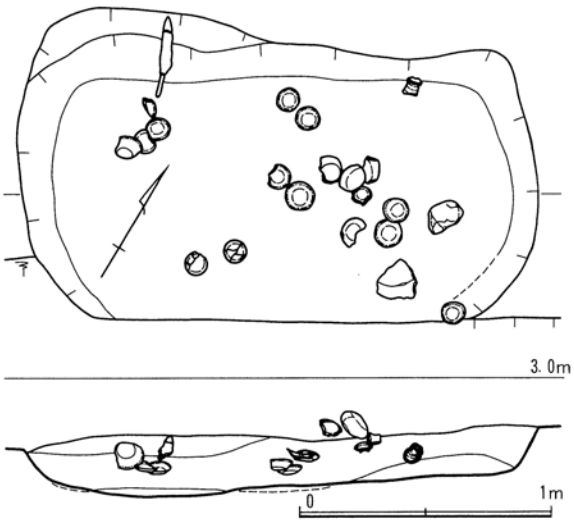


Fig. 202　133号遺構実測図（1/30）

15〜24は口禿皿、25は平底皿である。25の見込みには、片切り掘りの劃花文が描かれている。26〜28は、陶器である。26は天目茶碗で、黒色釉がかけられている。27は褐釉である。器形不明だが、灯火器の部分であろうか。28は、褐釉の甕である。内面には、うっすらと細かい青海波の叩き目が見える。

この他、瓦片・鉄短刀なども出土している。

13世紀後半の遺構であろう。

Ph.154　133号遺構（東より）

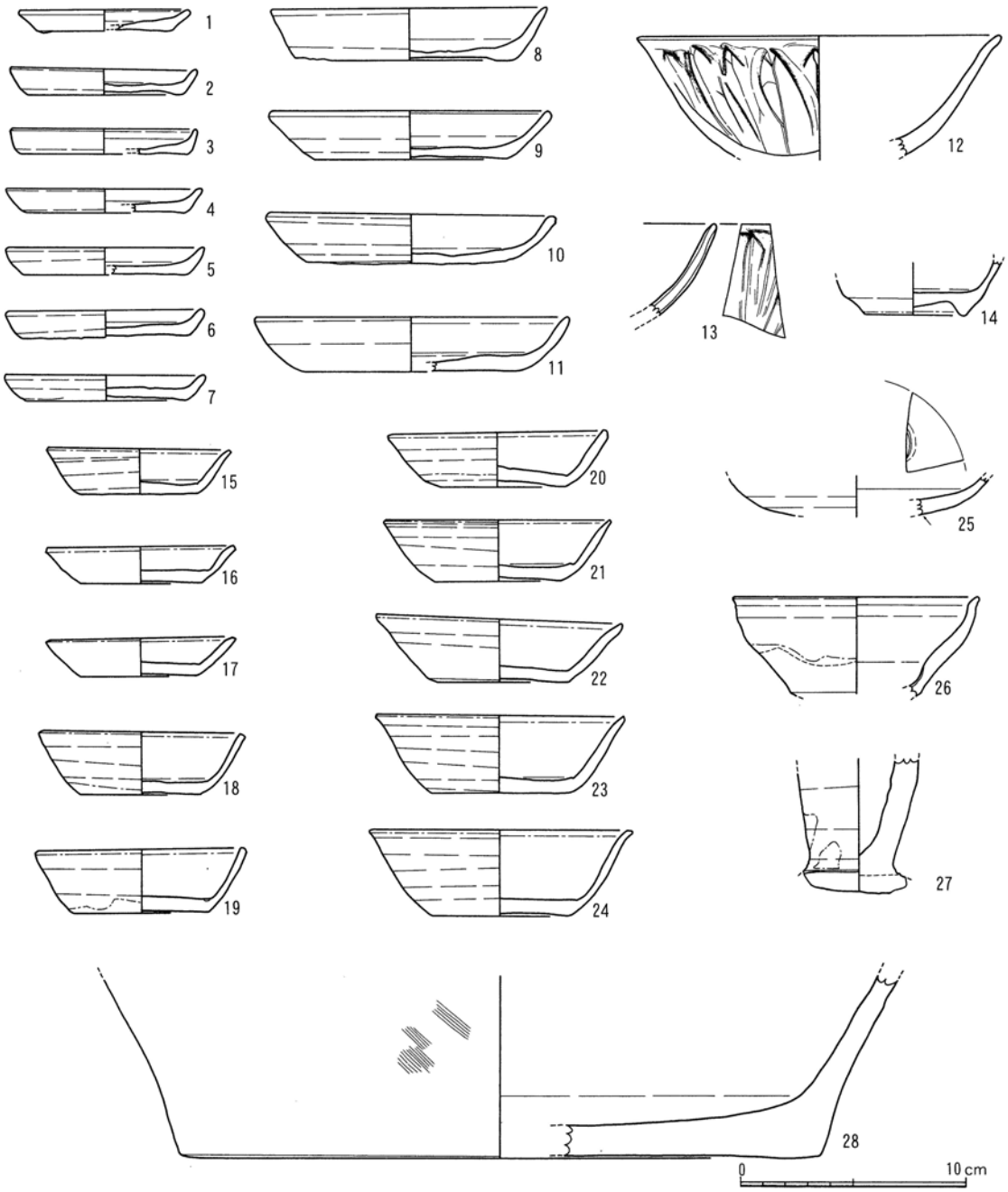


Fig.203　133号遺構出土遺物実測図（1/3）

190号遺構

第３面より検出した土坑である。ふたつの方形板囲い土坑からなり、北側の板囲いを190A、南側の板囲いを190B とした。190A は長辺140cm、短辺90cm、深さ34cm を測る。190B は、調査区矢板の地中梁工事に絡む事前掘削で、一部分を失っており、長辺100cm 以上、短辺120cm、深さ25cm を測る。板壁は、遺存状態が悪く、木質が検出されたのみだが、190Aでは板の内側に杭を打って支えた状況が確認できた。なお、土坑掘り方は、精査によってもひとつしか確認できなかった。また遺物の出土状況も、両遺構が同時に埋まった状況を示している。したがっ

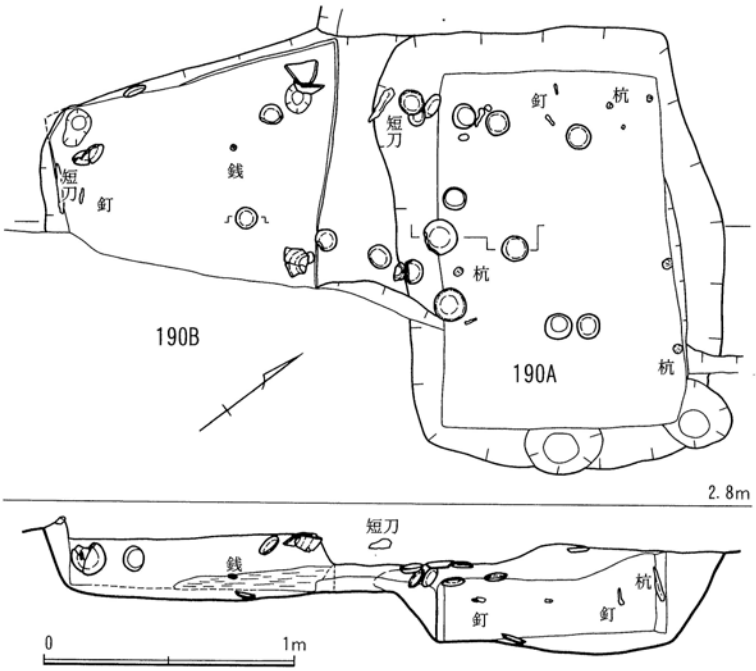


Fig. 204　190号遺構実測図（1/30）

Ph. 155　190号遺構

て、190A と190B は同時に営まれた、二段構造の板囲い土坑と考えられる。残念ながら、機能は不明とせざるを得ない。

出土遺物を Fig. 205に示した。1～19は、土師器である。1～15は皿で、口径8.1～9.4cm、器高0.9～1.3cm を測り、浅くて偏平な皿が多い。16～19は坏で、口径13.0～13.6cm、器高2.5～3.1cm を測る。皿・坏ともに、底部は回転糸切りである。なお、19の内外には、墨書がみられる。文字のようだが、内容は不明。20は、東播系須恵器の鉢である。21～28は白磁である。21～23は、体部が屈曲

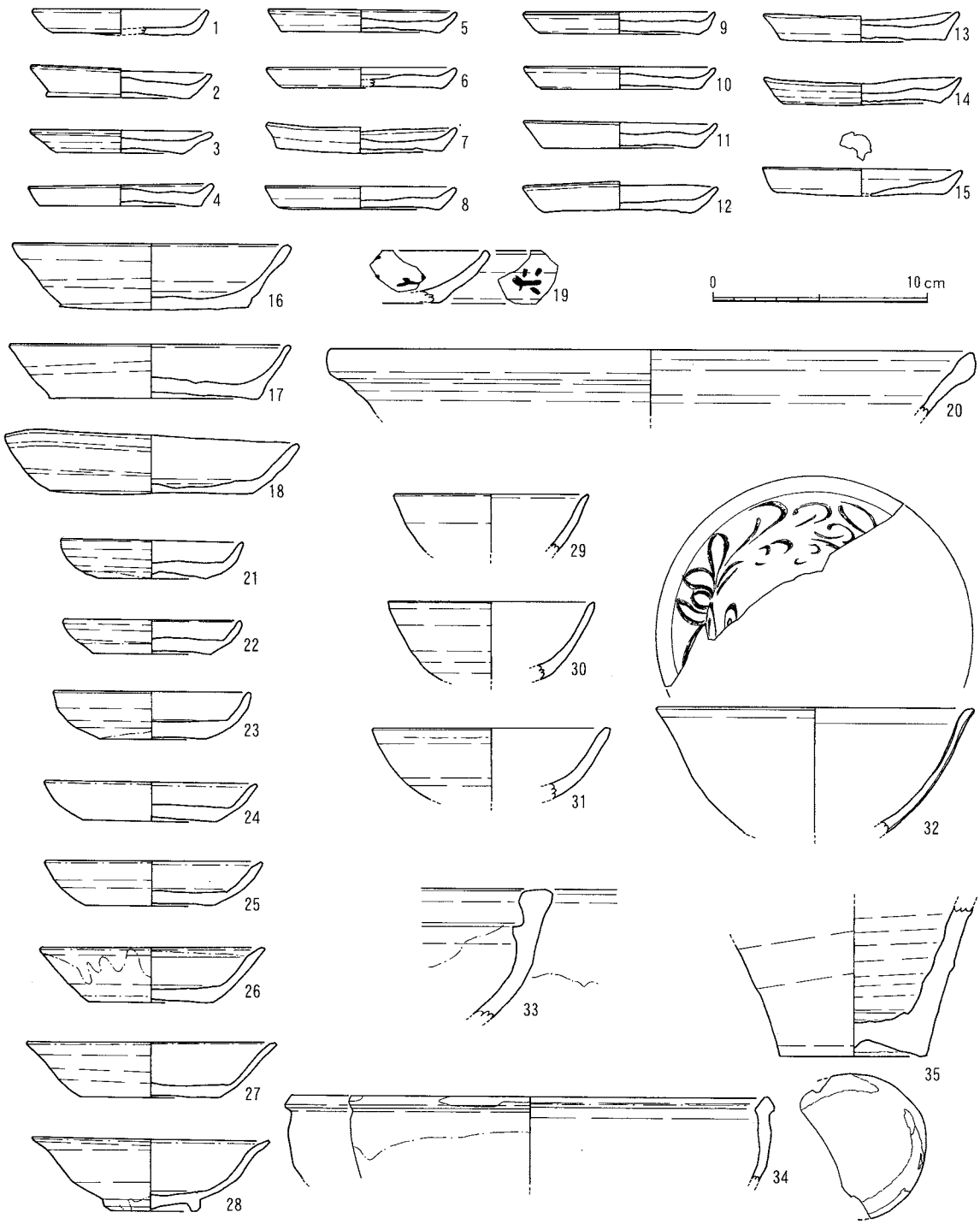


Fig. 205　190号遺構出土遺物実測図（1/3）

して丸みを持つ。24～27は口禿皿である。28は、口禿の高台皿である。外面は、高台の際まで施釉している。29～32は、**青磁**碗である。32の内面には、浅い片切り彫りの牡丹唐草文があしらわれている。33～35は、**陶器**である。33は灰褐釉のこね鉢、34は黄釉の鉢、35は褐釉の壺である。35の外底部には胎土目が付いている。これらの遺物の内、2・4・5・7・9・11～13・15・17・24・26・27は190A、14・16・21・22・35は190Bから出土している。

この他、鉄短刀・鉄釘・銭貨・鉄滓などが出土した。

13世紀後半の土坑と考えられる。

360号遺構

第3面より検出した土坑である。長辺240cm、短辺90cmの長方形を呈し、検出面からの深さは、30cm前後を測る。底面はほぼ平坦で、壁は比較的立つ。形態的には、木棺墓を思わせるが、寸法が大きすぎて難が残る。用途不明として、判断は保留したい。

出土遺物をFig.207に示す。1～11は、**土師器**である。1～8は皿で、口径8.5～9.5cm、器高0.85～1.25cmを測る。9～11は坏で、口径12.0～12.4cm、器高2.3～2.5cm。皿・坏の底部は、回転糸切りである。12～14は、**白磁**である。13は、小鉢である。畳付きの際まで、透明釉を施す。14は、口禿碗である。15～21は**青磁**

Ph.156　360号遺構（北東より）

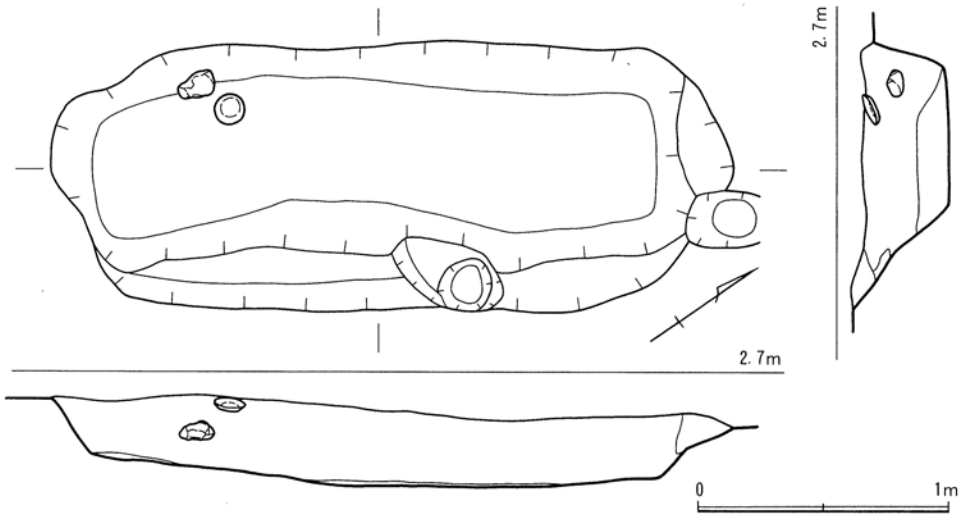


Fig.206　360号遺構実測図（1/30）

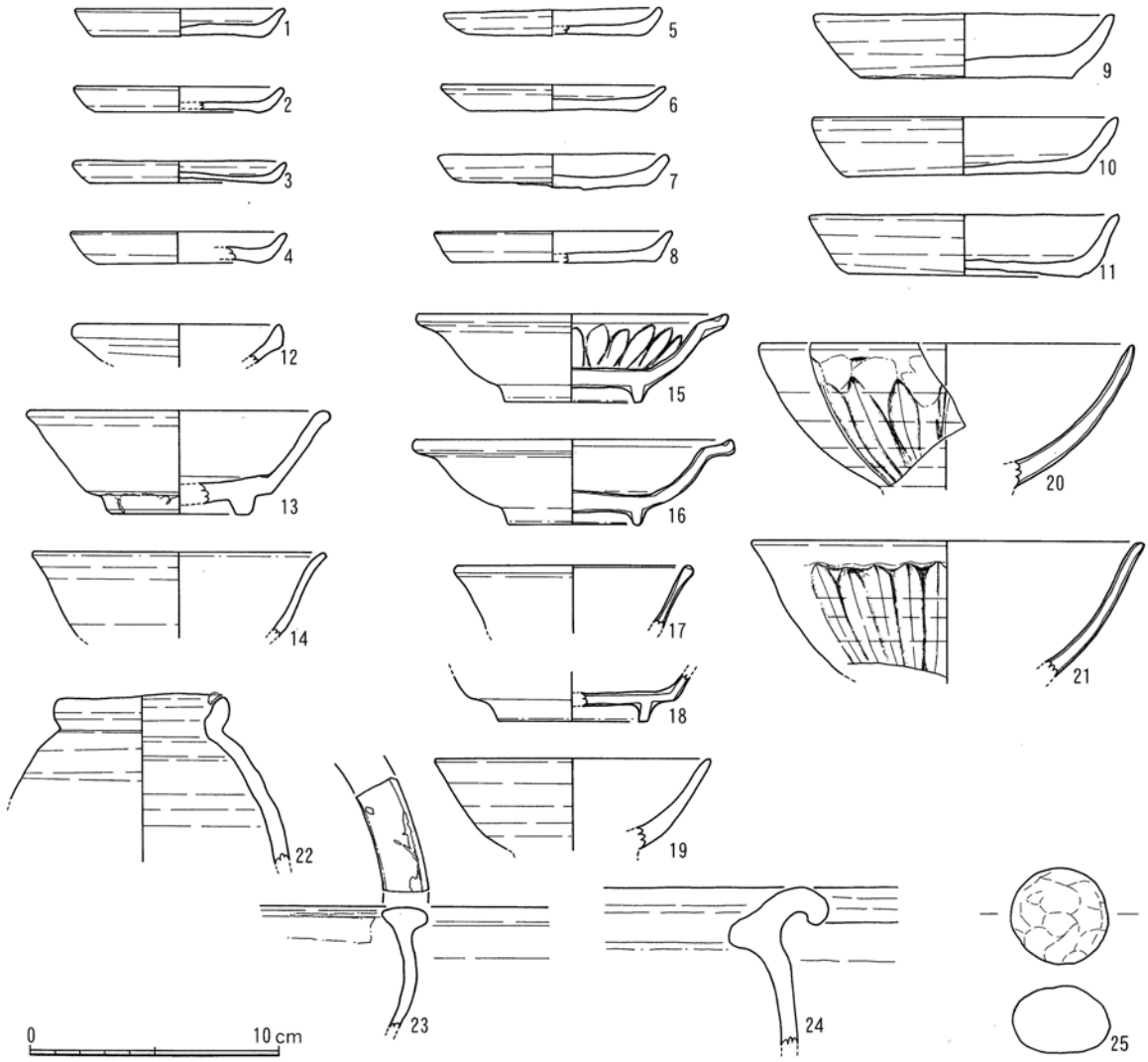


Fig. 207　360号遺構出土遺物実測図（1/3）

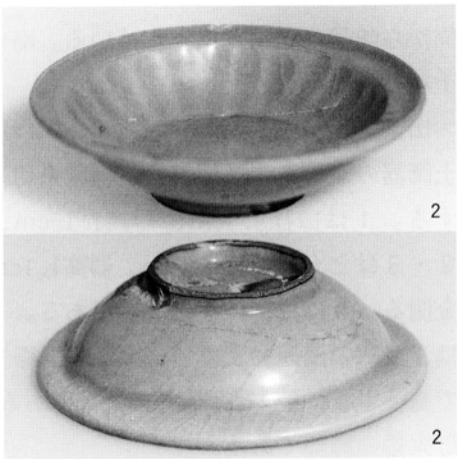
である。青磁では、この他 Fig. 217に示した花生の底部片が出土している。22〜24は、陶器である。22は褐釉瓶、23は黄釉盤、25は黄釉の鉢である。26は、石玉である。ぎっちょう球であろうか。

13世紀後半の遺構であろう。

367号遺構

第３面の、360号遺構のすぐ横で検出した、柱穴状の土坑である。遺構としては、あり触れた柱穴だが、次に示すような優品の青磁がまとまって出土している。

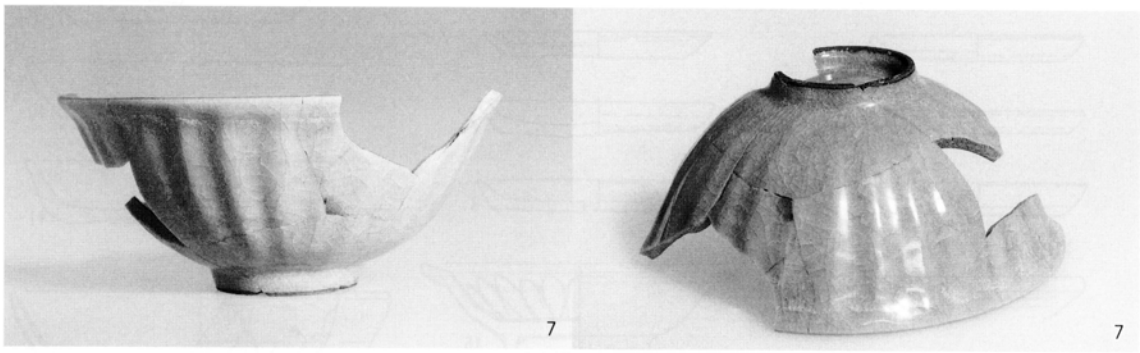
出土遺物を Fig. 208に図示する。１は、白磁の口禿皿である。２〜８は、青磁である。２は完形品の小鉢である。３もほぼ完形で出土した。４は小碗である。５〜８は碗である。すべて鎬蓮弁文の碗である。４〜７は、全面施釉の後、高台



Ph. 157　367号遺構出土遺物１

畳付きの釉を削って露胎とする。8は、畳付き際から外底は、施釉せずに露胎とする。

13世紀後半の遺構であろう。



Ph.158　367号遺構出土遺物2

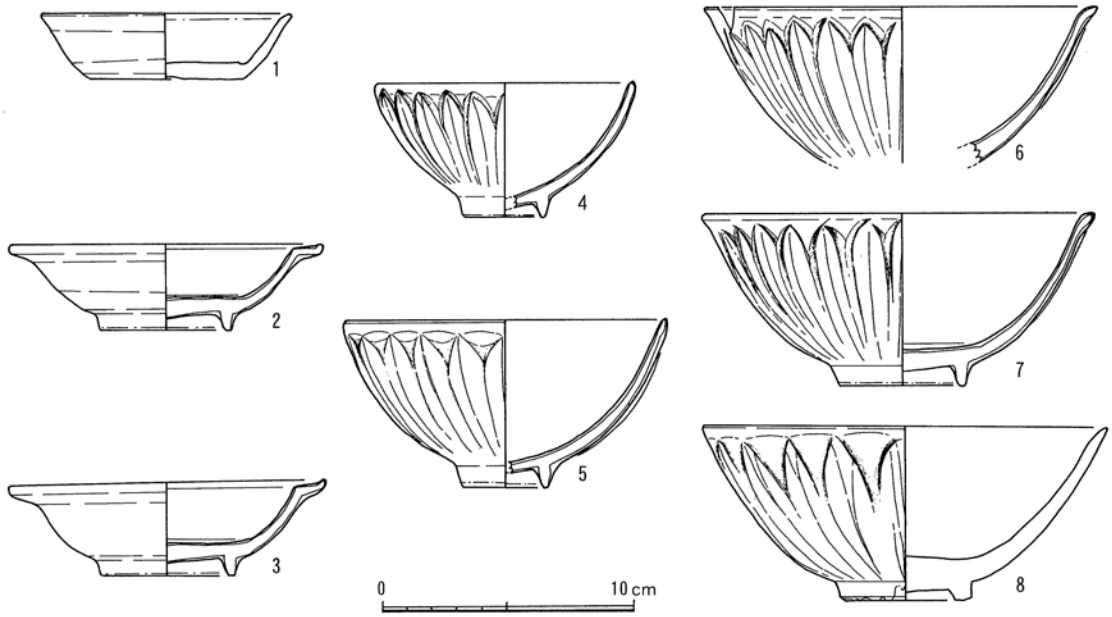


Fig.208　367号遺構出土遺物実測図（1/3）

390号遺構

第3面で検出した土坑である。埋土下位から陶器の脚部が出土している。廃棄土坑であろう。

出土遺物をFig.209に示す。1～3は、土師器の皿である。底部は、回転糸切りする。1は口径8.4cm、器高1.15cm、2・3はともに口径9.4cm、器高1.1cmを測る。4は白磁の、口禿碗である。5は、青磁の鎬蓮弁文碗である。高台際まで施釉する。6は褐釉陶器の脚部である。灯火器の脚部であろう。

13世紀前半代の土坑と思われる。

Ph.159　390号遺構（南西より）

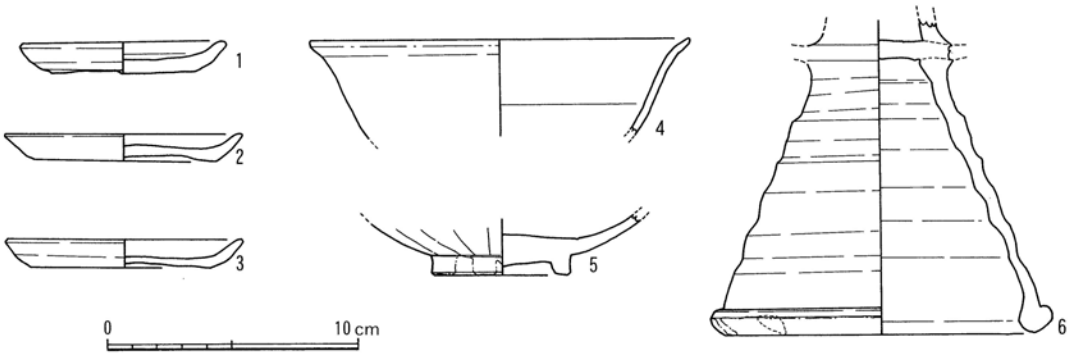


Fig.209　390号遺構出土遺物実測図（1/3）

451号遺構

第３面より検出した浅い土坑である。

埋土上位より、金箔を貼った漆器皿が出土した。木地の木質はほとんど残らず、漆皮膜の上に金箔がのっていたのみである。周囲の土ごと切りとって取り上げた。

他に土師器の小片（底部糸切り）が出土している。

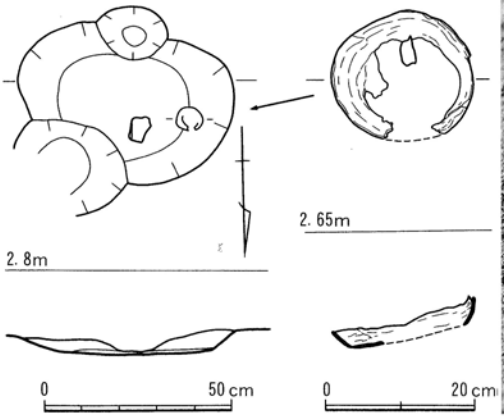


Fig.210　451号遺構実測図（1/10, 1/5）

Ph.160　451号遺構金箔皿出土状況（北東より）

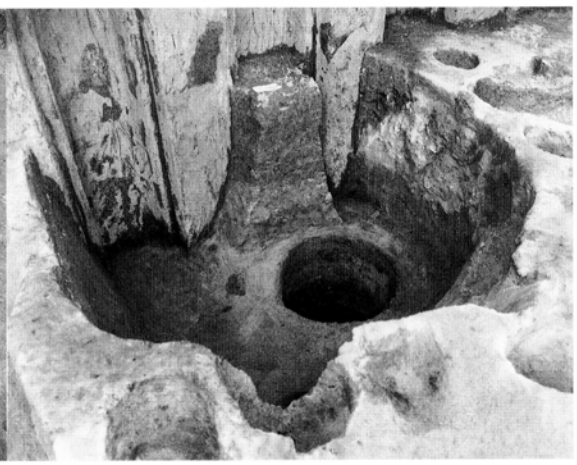
時期を判断するに足る資料はないが、13世紀代と考えれば大過なかろう。

（４）井戸

233号遺構

第３面で検出した井戸である。前述した094号遺構に切られており、094号遺構の底面において検出したことになる。したがって、掘り込み面として第３面に伴うか否かは、明かではない。

Ph.161　233号遺構（南より）



Ph.162　308号遺構（南西より）

直径160cm 程の円形の掘り方のほぼ中央に、径70cm 程の結い桶を据えて、井側とする。

土師器、青磁、白磁（口禿）などが出土している。

13世紀から14世紀前半の井戸であろう。

Ph. 163　324号遺構（北西より）

308号遺構

第３面で検出した井戸である。掘り方の一部が調査区外にかかるが、おおむね直径170cm の掘り方に、60cm ほどの結い桶を据えて井側とする。

土師器、青磁（蓮弁）、白磁（口禿）、陶器、瓦質土器こね鉢、東播系須恵器鉢、瓦（コビキ）などが出土している。

14世紀前半頃の井戸であろう。

324号遺構

第３面で検出した井戸である。径230cm 前後の掘り方を持ち、井側には結い桶を据える。

埋土からは、多様な遺物が出土した。Fig. 211－1は、**山茶碗系こね鉢**である。内底部は、使用のため摩滅している。Ph. 164－2は、**白磁**の陶枕である。そのほか、青磁・白磁・陶器・常滑・備前・東播系須恵器・瓦・石鍋などが出土した。

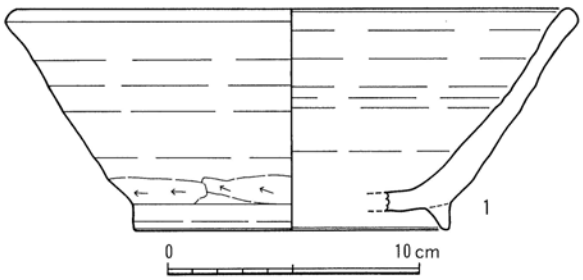
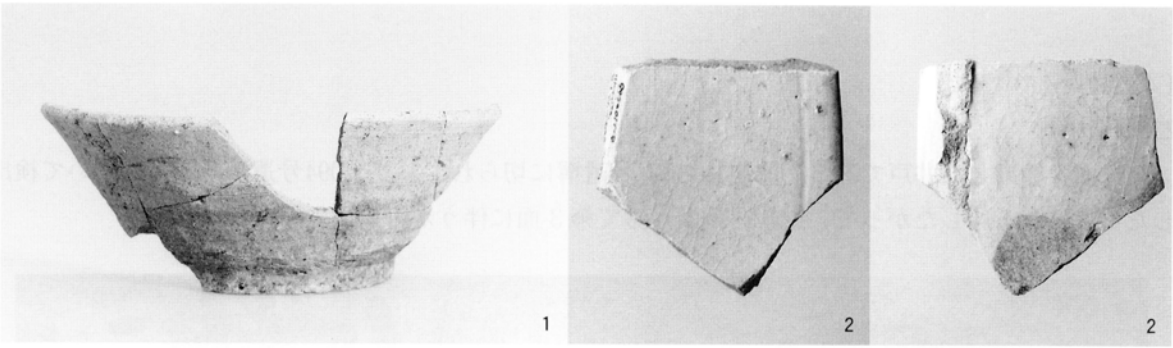


Fig. 211　324号遺構出土遺物実測図（1/3）



Ph. 164　324号遺構出土遺物

13世紀後半から14世紀前半頃の井戸であろう。

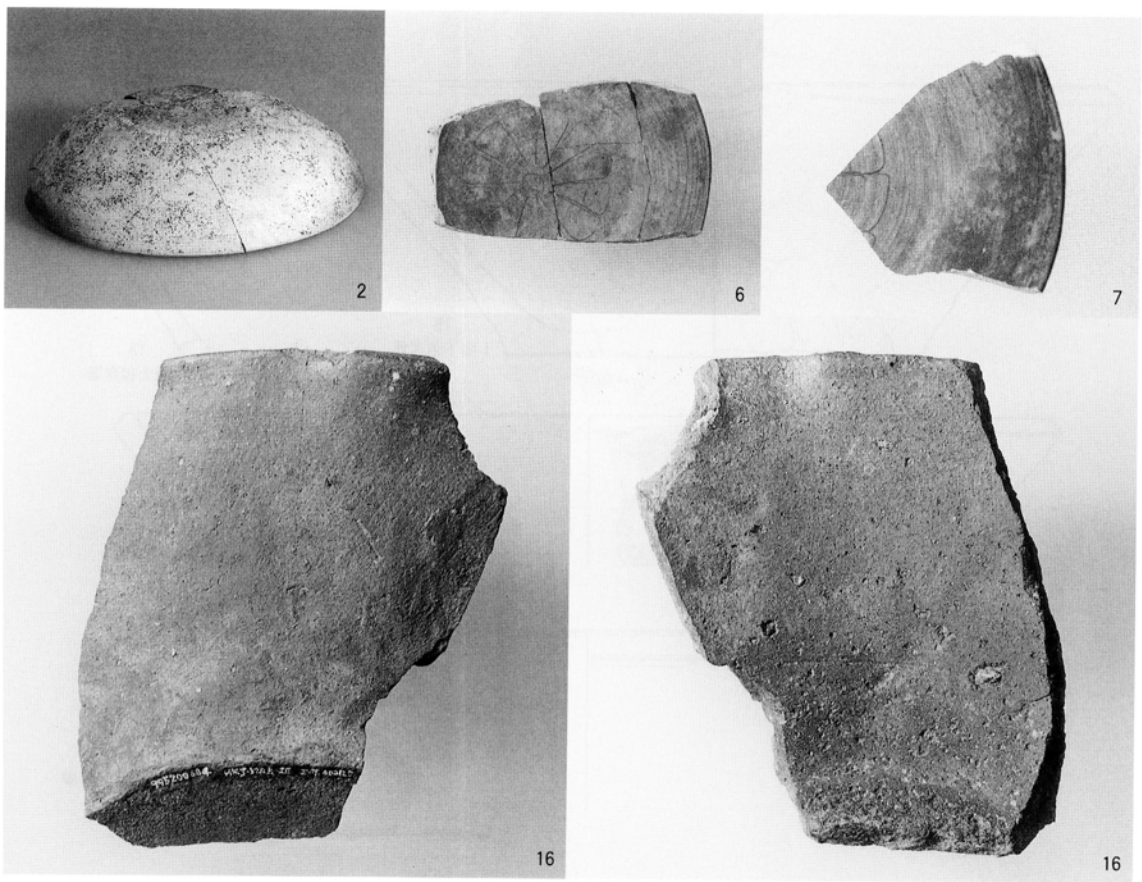
（５）その他の出土遺物

これまでの報告から漏れた遺構出土遺物・包含層出土遺物の内、特徴的なものを Fig. 212～215に示す。１～３は、**土師器**である。１は口径に対して極端に底径が小さい皿で、器壁は薄く、強いロクロ目が残る。**白色系土師器**である。２は、**京都系土師器**である。内面は平滑で、外面には掌で押さえた跡がみられる。伊野分類 Ga－１タイプに属する。３は、**吉備系土師質土器**碗である。以上の土師器は、いずれも搬入土師器と考えられる。４～７は、**楠葉型瓦器**である。４は碗で、内面は密に篦磨

き、外面にはやや疎らな分割篦磨きがみられる。5～7は、坏である。見込みには暗文で花文を描く。体部は、内面に指を二本当てて外側から篦で押し、輪花に作る。

8・9は、**中世須恵器**である。8は、香川県の**十瓶山**南麓で焼かれた製品と推定される甕である。口縁の内外面は横撫で、体部外面は格子叩きであるが、口縁部外面の横撫での下には、格子叩き目が薄く残っている。9は、生産地不明の壺である。口縁は、外側から折り曲げて玉縁状に作る。10は、**瀬戸**の壺の口縁である。前Ⅰb期の瓶子や小型三耳壺の口縁形態に類似する。11～14は、**備前焼**である。11は間壁編年Ⅲ期、12はⅣB期のすり鉢、13・14はⅢ期の甕の口縁である。15～20は、**常滑焼き**である。15は中野編年1b型式の甕である。16～19はこね鉢で、16・17・19は7型式、18は8型式に該当する。20は、6a型式の甕である。口径42cmを測る。

21～23は、**越州窯系青磁碗**である。21はきめ細かい胎土の精品、22は胎土が灰色がかって粗く体部下位が露胎となる粗製品、23は総釉で高台内側に目痕が付く精品である。24～27は、**龍泉窯系青磁**である。24は、印花文碗である。25は、乳鉢であろう。内面の露胎部分は、平滑に摩耗している。26は鉢である。見込みには片切り彫りで水波、貼花で双魚を配し、体部内面にも片切り彫りで波をあしらう。総釉で、畳付きのみ釉を掻き取る。27は、酒会壺の底部である。内側に稜をなしてすぼまった体部に円盤を落として、底部とする。落とし底と体部は、釉で接着する。28～35は**白磁**である。28・29は型作りの小鉢である。30・31・34の口縁も口禿に作る。35は、**青白磁**の皿である。体部下位は露胎、見込みは輪禿にする。36～38は**陶器**である。36は、磁竈窯の黄釉褐彩水注である。体部下位から外底部は露胎となるが、化粧土が覗いている。37は褐釉、38は黒褐釉の瓶である。Ph.167-39は、**天目茶碗**である。火を受け、釉表は荒れている。40は、**青磁**の香炉である。袴腰に作る。41・42は、**白磁**の



Ph.165　その他の出土遺物1

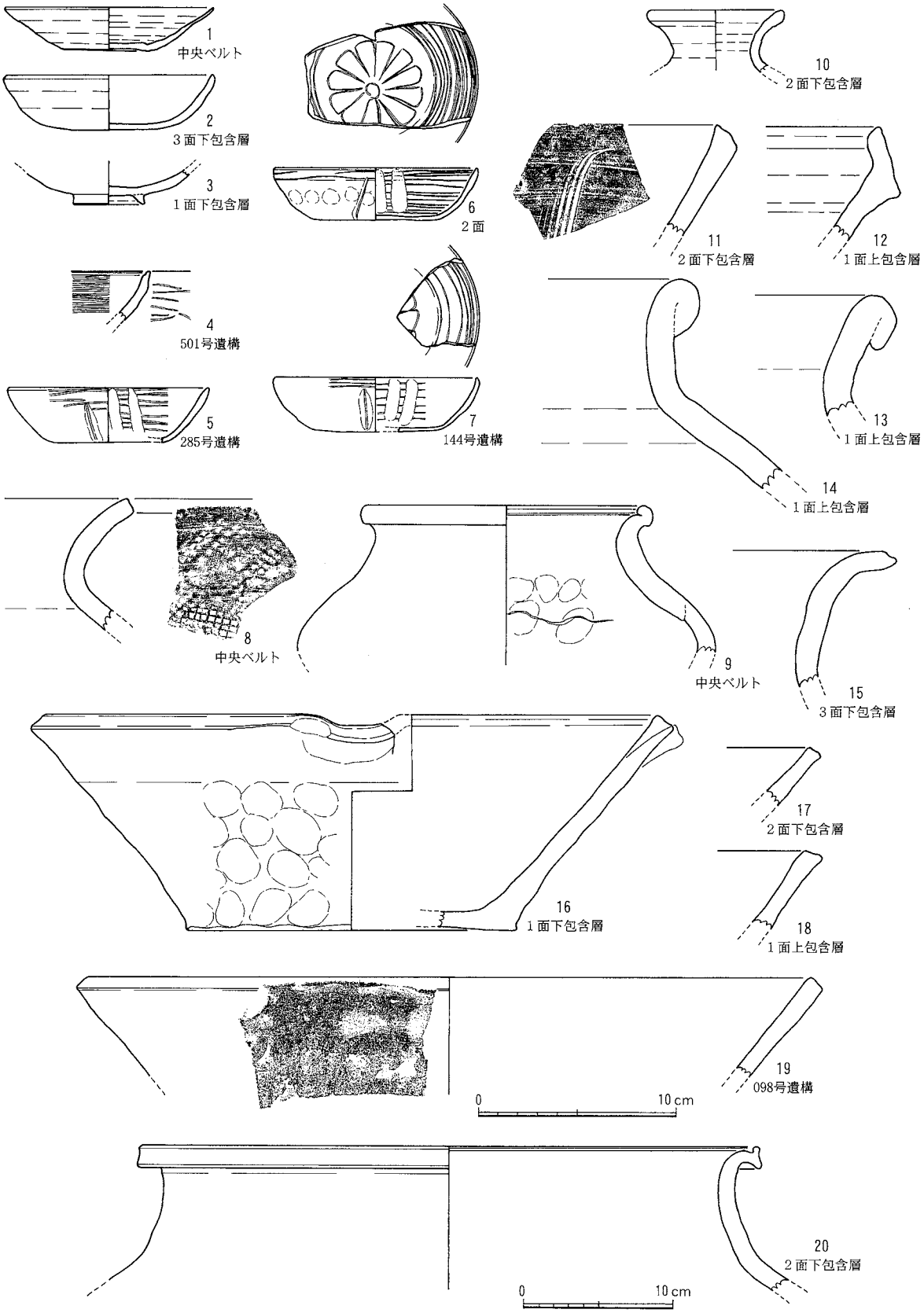


Fig. 212　その他の出土遺物実測図1（1～19…1/3，20…1/4）

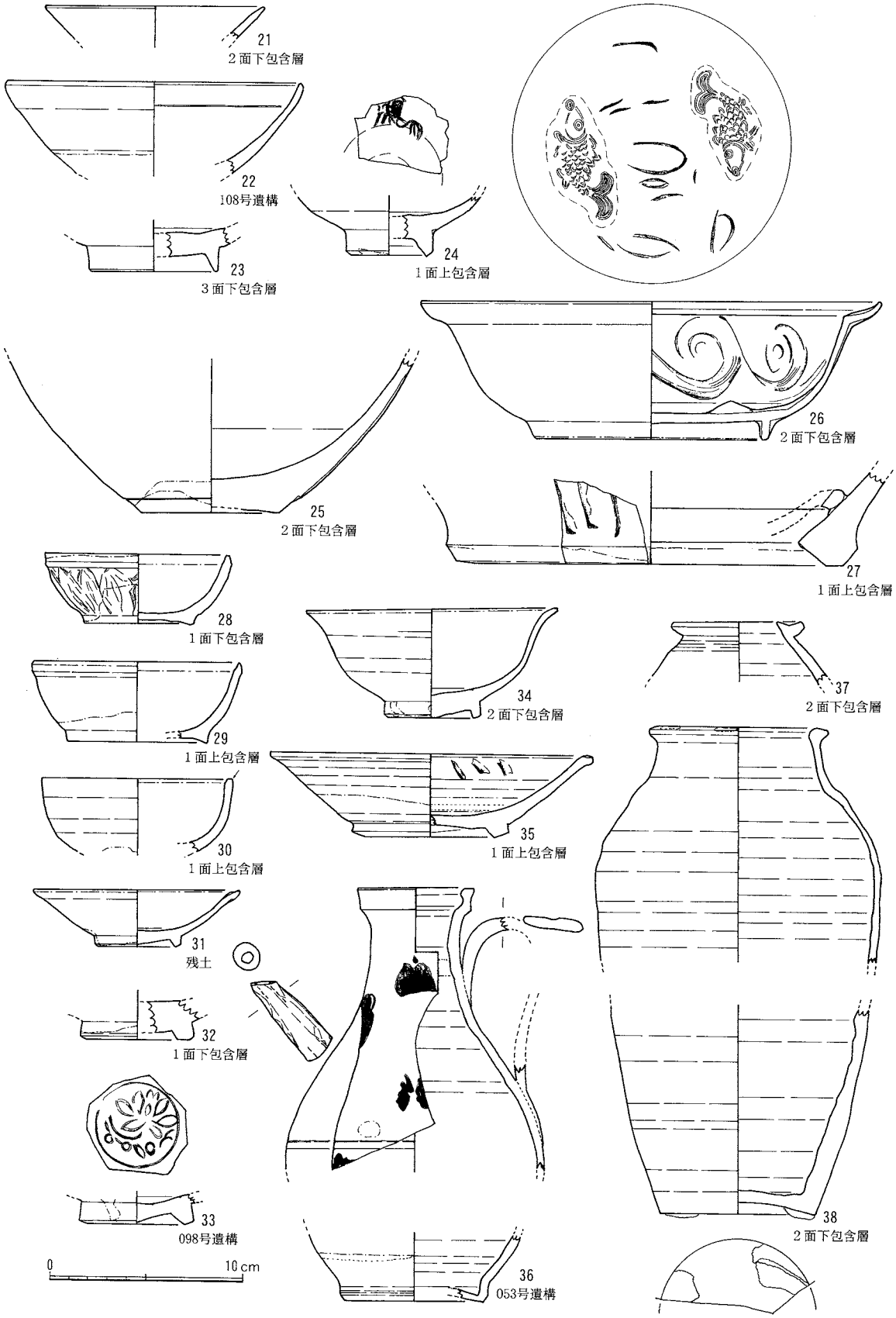
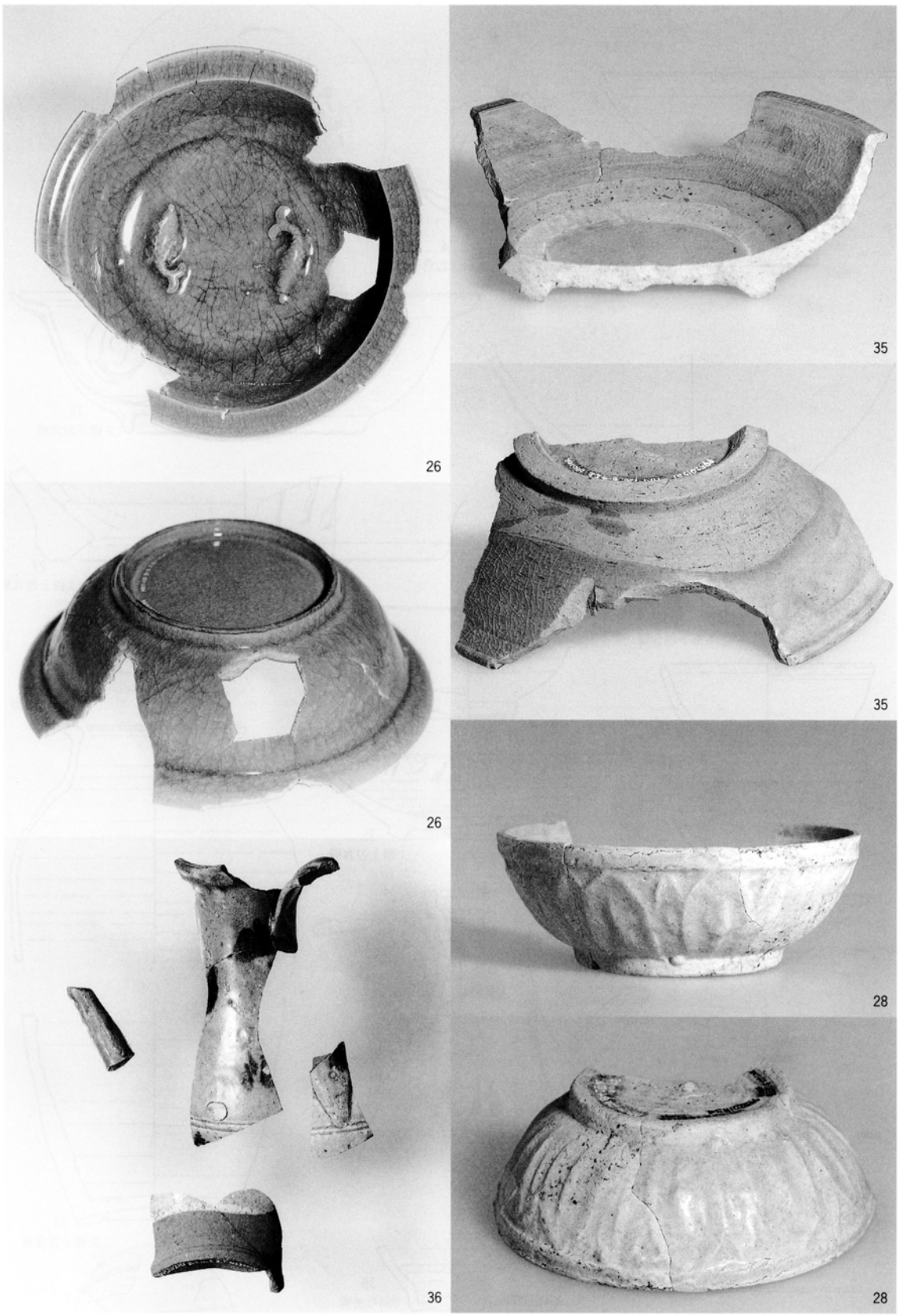
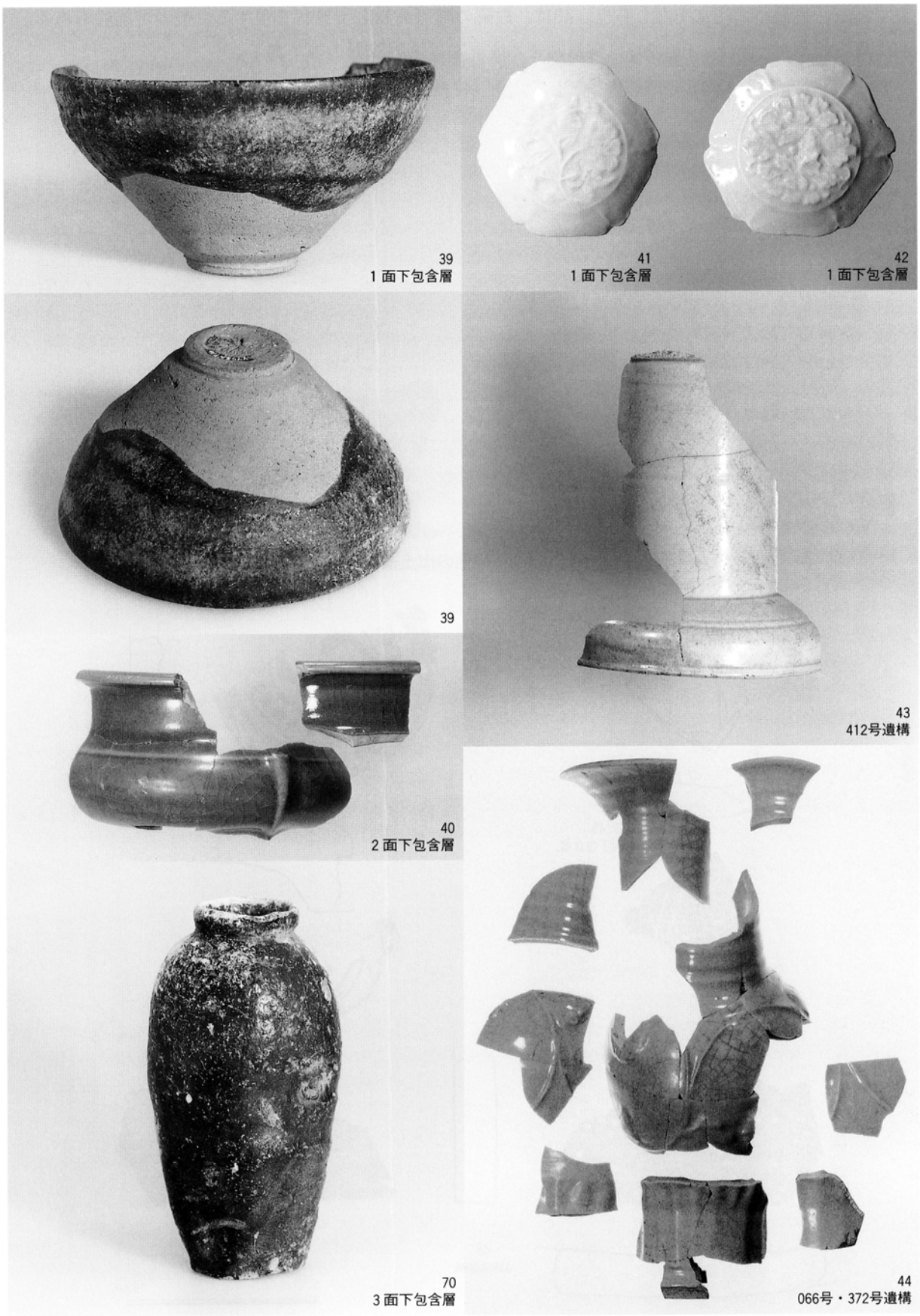


Fig. 213　その他の出土遺物実測図２（1/3）

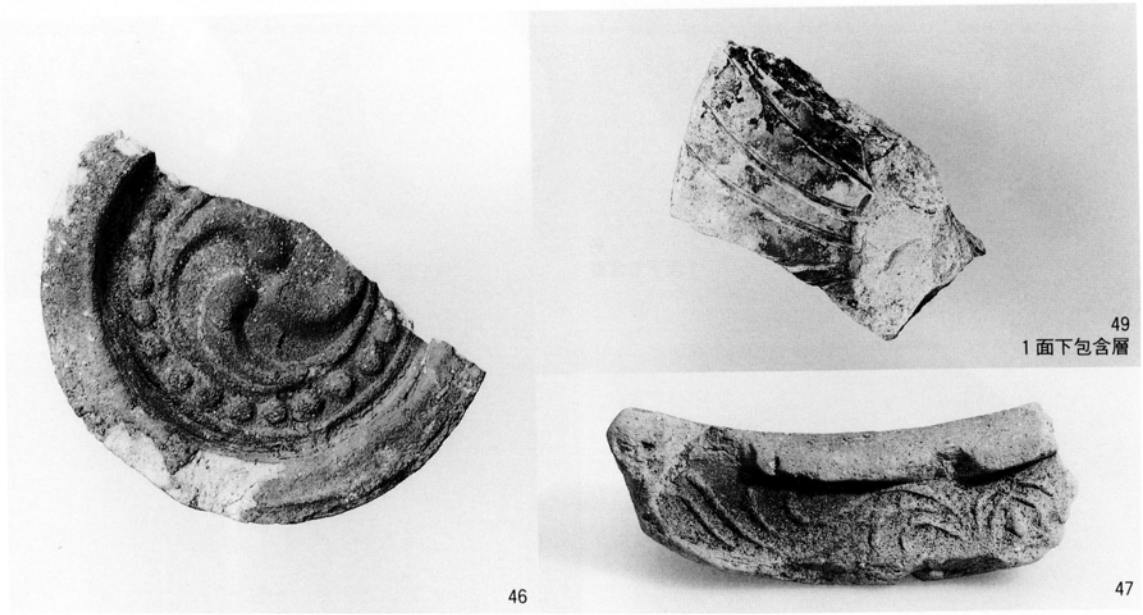


Ph. 166　その他の出土遺物 2



Ph. 167　その他の出土遺物 3

蓋である。上面に印花文をあしらう。43は、白磁の脚である。土管状を呈する。鼓の可能性もある。44は青磁の花生である。Fig. 217に実測図を示す。70は褐釉陶器の瓶である。



Ph. 168　その他の出土遺物 4

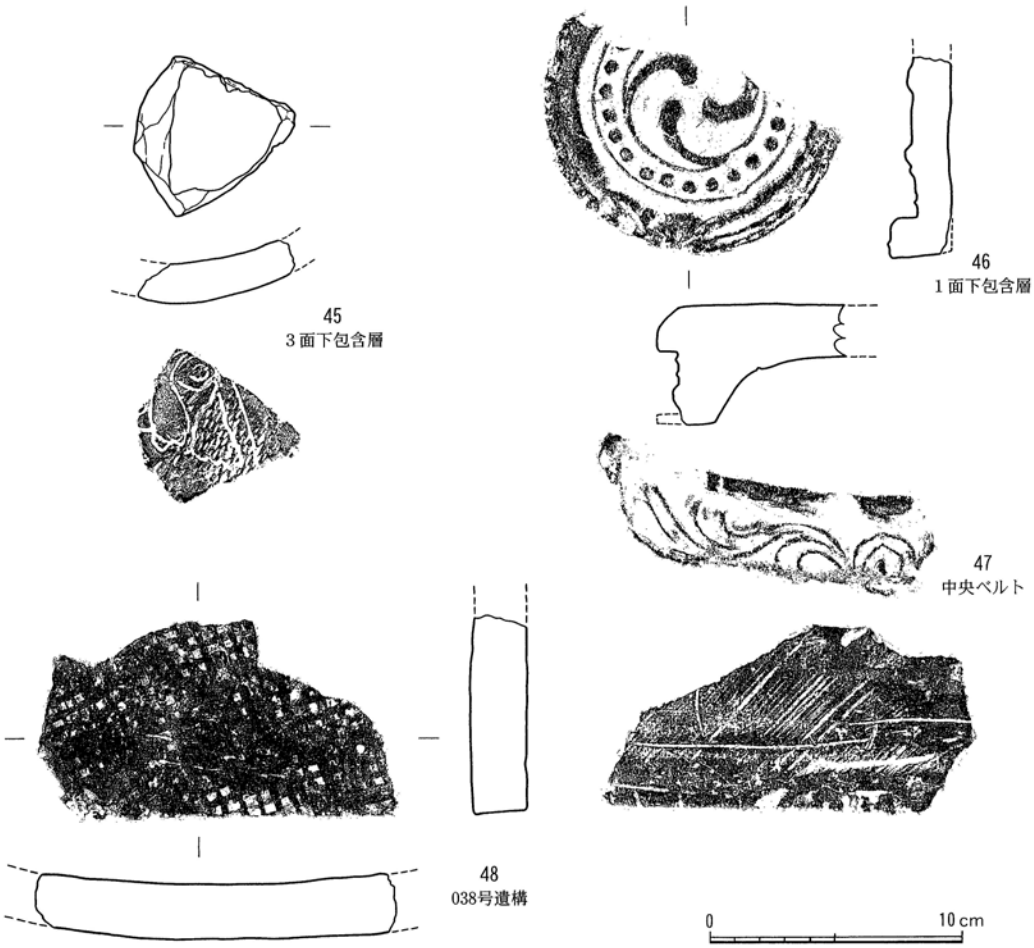
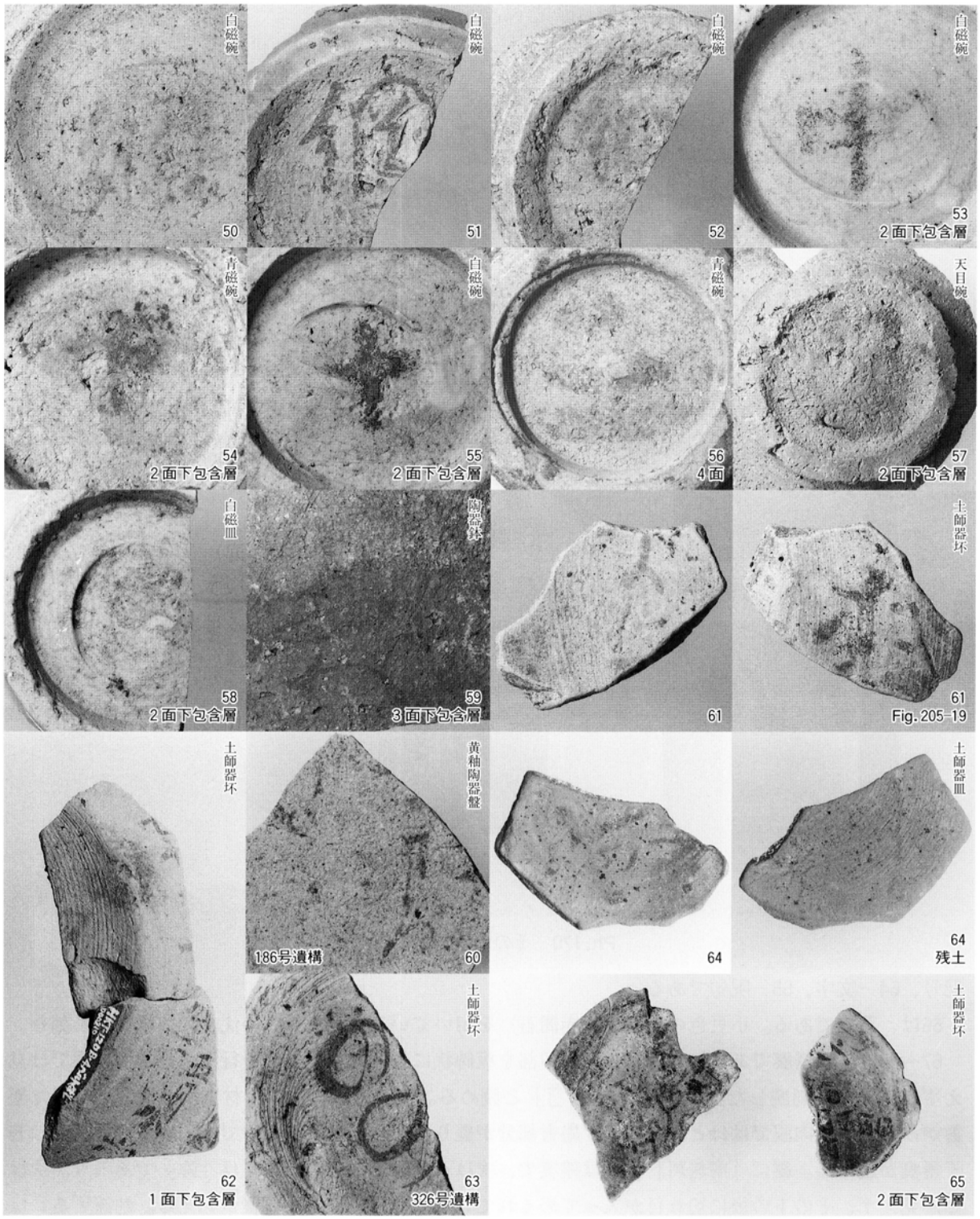


Fig. 214　その他の出土遺物実測図 3（1/3）

45～49は、**瓦**である。45は平瓦であるが、下面に沈線で文様を描く。意匠は不明である。46は軒丸瓦の瓦当である。珠文は24個と推定される。47は、軒平瓦である。48の平瓦の上面は、格子叩きの後撫で、下面には板状工具による擦過痕が見られる。49は、鬼瓦片である。

Ph.169には、**墨書資料**を示した。50－「王綱」、51－「綱」□、52－「綱」、53－「中」、54－「下」、55－「十」、56－「三」、57～59－文字、60－仮名、61－習字、62－「［ ］ 五月小六日 ［ ］」、63－



Ph.169　その他の出土遺物5

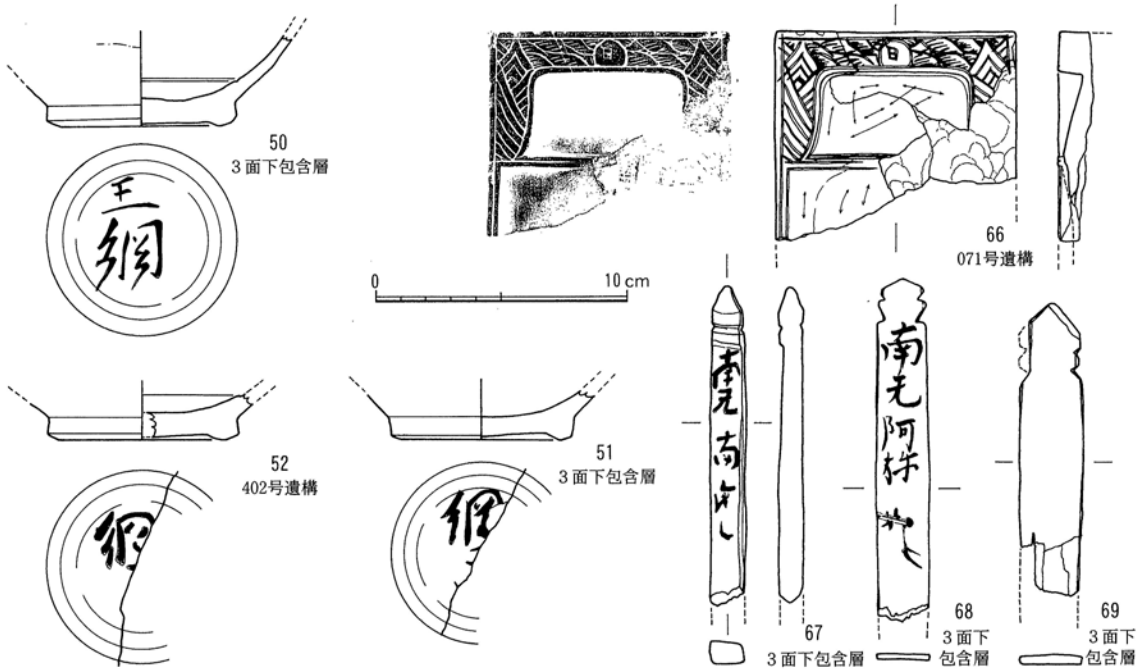
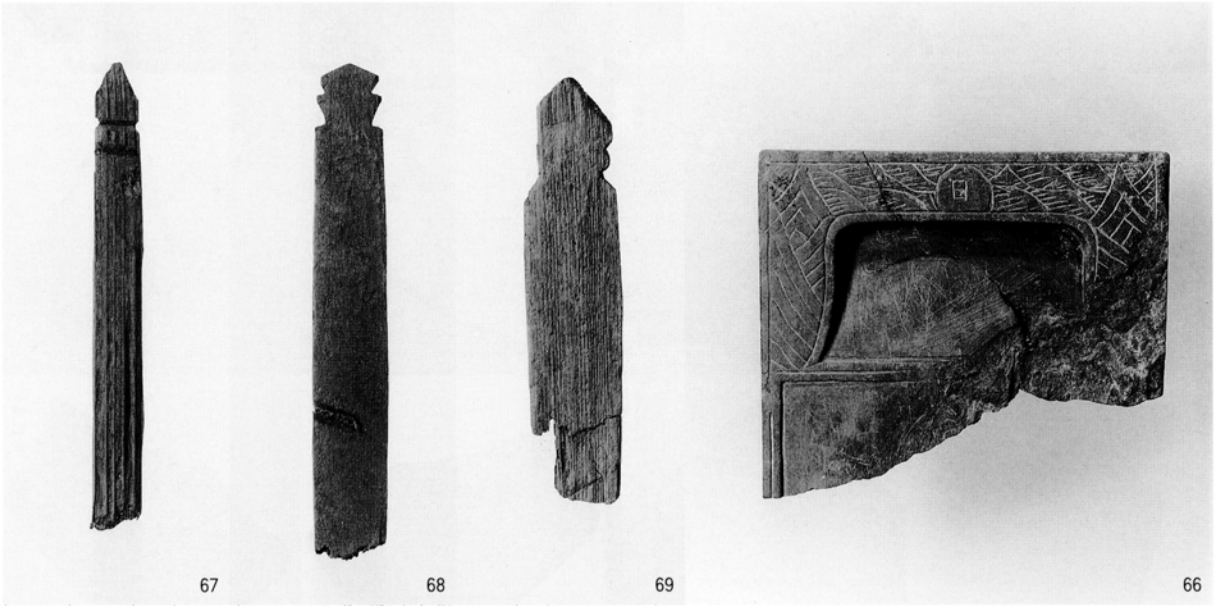


Fig. 215　その他の出土遺物実測図 4（1/3）



Ph. 170　その他の出土遺物 6

記号、64－文字、65－呪句である。

66は、**石硯**である。小豆色の凝灰岩（赤間石）を用いている。額部に細い沈線で、波模様を刻む。

67～69は、**板塔婆**である。67は、角柱の頭部を板碑状に削りだし、墨書を行う。墨書は肉眼では見えず、赤外線で判読した。「南無南無ヵ［ ］」と読める。68・69は、薄い板材を削り出す。68には墨書がみられる。肉眼ではほとんど見えず墨書部分が盛り上がって見えるだけであるが、赤外線では若干墨痕が追える。縦に「南無阿」までは確実で、次は不明瞭ながら形としては「弥」であろう。次は墨が見えず、その下の板に切れ目が入ってめくれている部分で、鮮明な墨痕が見える。判読するにはいたらないが、形から、「如」ではなかろうか。もう一文字分の墨痕が残るが、漢字の払いの一部が

見えるだけで、形はつかめない。以上を総合して推定すると、「南無阿弥陀如来」と読めそうである。69には、墨痕は認められなかった。

B区からは70点の銅銭が出土した。その内、錆や破損のため判読できなかったり、銭文を確定できなかった銭が46点、近代銅貨が1点含まれている。銭銘が判読できた内訳は前漢1点、唐2点、北宋18点、金1点、南宋1点である。一覧表と拓本を示す。元豊通寶に磨り輪銭（Fig.216中段中央）がある点と、切断した銭（Fig.216中段左端）がある点に注目したい。

表7　第120次B区調査出土銅銭一覧

銭貨名	初鋳年	王朝名	年号	枚数	銭貨名	初鋳年	王朝名	年号	枚数
五銖	BC 118	前漢	元狩5年	1	元豊通寶	1078	北宋	元豊元年	2
開元通寶	621	唐	武徳4年	2	元祐通寶	1086	北宋	元祐元年	1
景徳元寶	1004	北宋	景徳元年	2	聖宋元寶	1101	北宋	建中靖国元年	1
祥符通寶	1009	北宋	大中祥符元年	1	政和通寶	1111	北宋	政和元年	3
明道元寶	1032	北宋	明道元年	1	正隆元寶	1157	金	正隆2年	1
皇宋通寶	1038	北宋	寶元元年	3	嘉定通寶	1208	南宋	嘉定元年	1
嘉祐元寶	1056	北宋	嘉祐元年	1	近代銭(一銭)				1
治平元寶	1064	北宋	治平元年	2	解読不能				46
熙寧元寶	1068	北宋	熙寧元年	1	総数				70

表8　出土遺構別銅銭一覧

遺構番号	銭貨名	初鋳年	王朝名	径(cm)	備考
1面008	明道元寶	1032	北宋	2.25	
1面050	政和通寶	1111	北宋	2.48	
1面056	解読不能				
1面056	解読不能				折二・粗悪
2面070	五銖	BC118	前漢		1/2残
2面094	開元通寶	621	唐	2.43	
2面094	解読不能				細片
2面094	解読不能				
2面094	解読不能				細片・もろい
2面094	解読不能				錆激しい
2面094	解読不能				1/2残
2面094	(　)(　)(　)寶				錆激しい
2面094	解読不能			2.45	錆激しい
2面094	解読不能				錆激しい
2面094	解読不能				錆激しくもろい
2面094	解読不能				錆激しい
2面094	解読不能				錆激しい
2面094	解読不能				細片
2面094	解読不能				錆激しい
2面094	解読不能				錆激しい
2面120	太(　)(　)寶				錆激しくもろい
3面153	解読不能				錆激しい
3面190B	解読不能				錆激しくもろい
3面385	元豊通寶	1078	北宋	2.48	青味

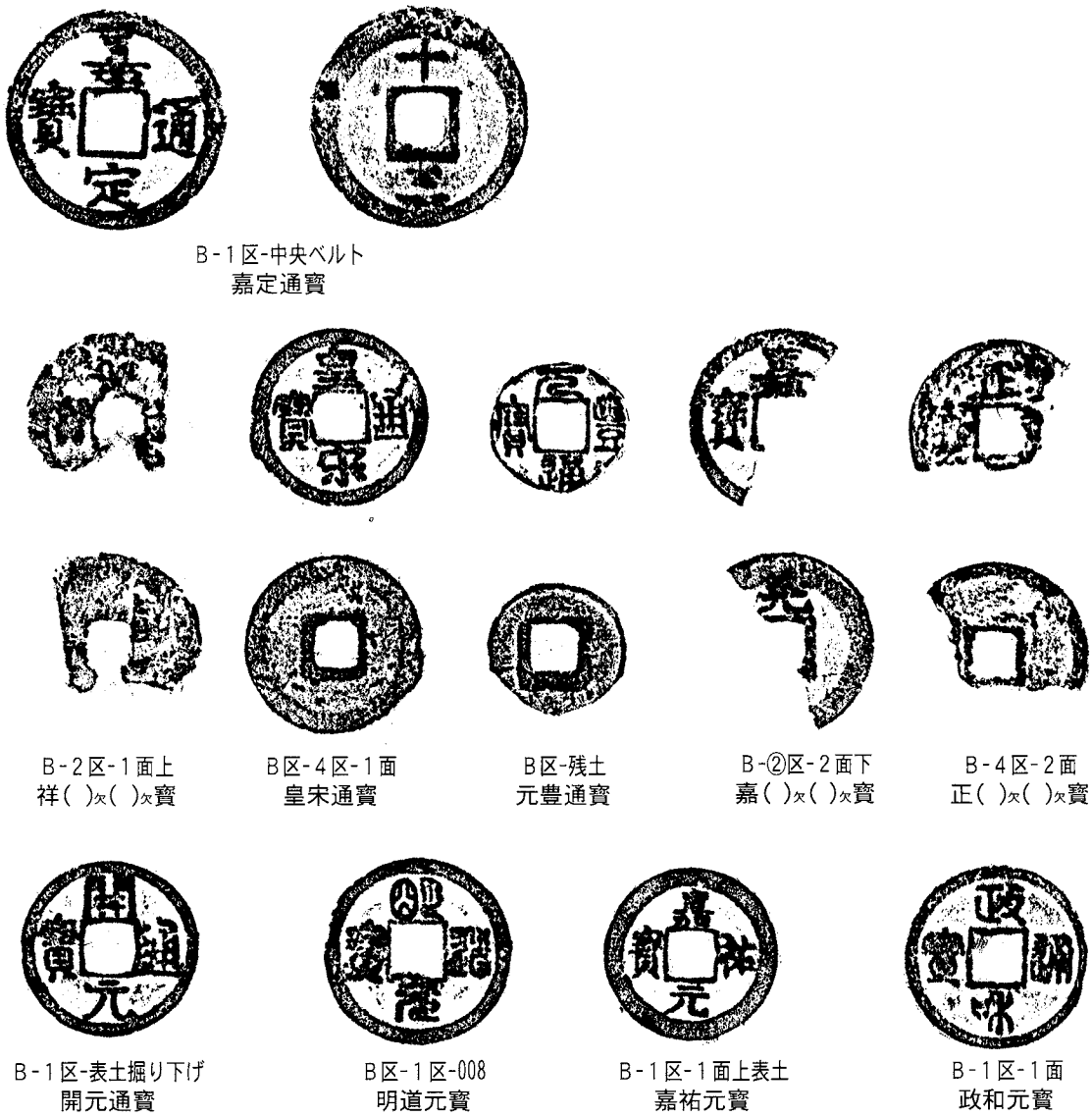


Fig. 216　120次B区出土銅銭拓本（1/1）

第六章　ま　と　め

本書を終えるに当たって、若干の問題点に基づいて調査成果を整理し、発掘調査の総括に代えたい。なお、本書作成と並行して行っていた、資料収蔵のための整理の過程で、これまで破片として取り上げていた青磁の花生が、かなり接合でき、口縁から底部までつながった。既に破片の集合写真は Ph. 167に掲載したが、実測図を改めたので、Fig. 217に示すこととする。

1．地形環境の復元

既に述べてきたように、102次・120次A区・120次B区調査地点は、砂丘状に立地していない。博多遺跡群は、全体として博多湾岸に形成された数列の砂丘状に立地していることが知られているが、

今回報告した4地点は、砂丘間低地をL字型に調査した形となる。

これら各地点に関して、西南大学の磯望教授から自然地理学の見地からのご教授をいただいたので、それに基づいて検討を試みたい。

102次調査地点では、最下層が、河口性の砂であることが指摘された。それを覆うのは、湿地的な環境を示す、グライ化した土と鉄分を含む砂の互層であり、それまでが自然堆積とされた。言い替えれば、最下層とその上20cm程度分を除けば、すべて人為的な堆積ということになる。

類似の指摘は、120次B区においてもなされた。120次B区の第3面下の堆積砂層は、すべて埋立層とされたのである（Fig.182参照）。120次B区の下層は、調査区南東辺側から急傾斜で落ち込んでいた。この落ち込んだ砂の堆積が、120次B区全体を覆い、120次A区の中程から南東側の砂丘の落ち（Fig.140）につながるものと思われる。なお、120次B区では、南東辺側の急傾斜の落ちの背後に、砂の水平堆積が確認されており、これが自然堆積層と判断された。磯教授によると、102次調査地点方向から120次B区方向に河口を開いていた谷を人為的に池状に整形して、そこに水が溜まった。やがて、全体を一度埋め立てて池状の地形を作りなおし、しばらくは水が溜まったまま放置され、黒色粘土層が形成された。その後、砂丘の風成砂を大量に客土し、埋立を完成させたと言う。

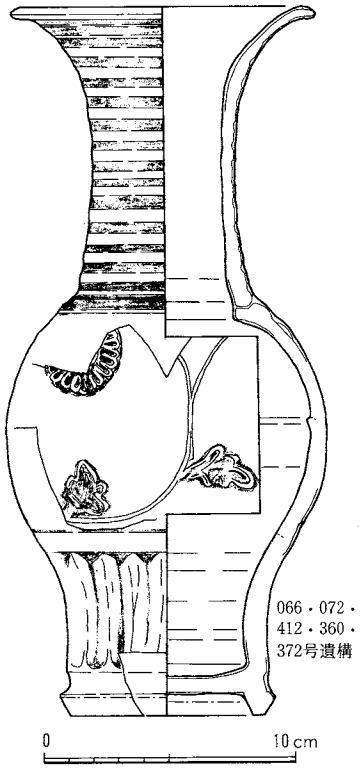


Fig.217　120次B区出土青磁花生

整理しよう。102次調査地点付近から北東に砂丘の谷地形が存在し、小河川が流れ込んで河口性の砂が堆積しつつあった（平安時代後期以前）。その後、102次調査地点付近で大規模な埋め立てが行われる一方で、120次B区から120次A区にかけては、大きな池状の地形が人為的に作り出された。この池は、一度全体に埋め立てられはしたが埋まりきらず、維持され続けた。池の周囲の埋立が進行した時期は、102次調査の457号遺構、120次A区の410号遺構からみて、12世紀前半から後半にかけてである。またこの段階で、120次B区の人骨や板塔婆が流れ込んでいる。本格的にこの旧谷地形を埋め立てたのは、13世紀前半代であり、以後、粘質土を敷いた細かい単位の整地が繰り返されて、安定した生活面を作り続けることとなる。

2．寺院の内と外

室町時代以降、120次B区付近には、聖福寺塔頭の継光庵が存在した。B区の礎石建物や分厚く堆積した粘土による広範囲の整地層群は、この寺院に伴う可能性が高いと思われる。同様な整地は、102次調査地点や120次A区でも見られ、池状遺構などの庭園と考えられる遺構が調査されていることを考え合わせれば、102次調査地点・120次A区調査地点を含む範囲に、寺院敷地が展開していたものと考えて大過ないだろう。

一方、107次調査地点では、このような整地層は検出されなかった。107次調査地点は、砂丘上に立地しており、古墳時代の6世紀以降古代・中世を通じて、多数の遺構が営まれていた。特に9世紀から12世紀には、土壙墓が営まれ、祭祀土坑が掘られ、経筒が埋められるなど、特殊な空間であったことを思わせる。その後、場としての特殊性は感じられなくなるが、逆に生活遺構の密度は高く、他の

3地点とは好対照をなしている。102次調査地点や120次調査地点が寺院敷地となった当初、おそらく107次調査地点がそれに取り込まれることは無かったに違いない。120次A区調査地点と107次調査地点の間には、現在路地が通っている。この道筋は、かつて74次調査でその延長が発掘されており、14世紀初頭に作られた道路であることが判明した。102次・120次調査地点を含む寺院敷地と町屋とは、恐らくこの道路を境にして対峙していたのであろう。

3．東海系S字状口縁台付甕について

102次調査からは、東海系S字状口縁台付甕（以下、S字甕と略称する）の遺存状態の良好な破片が出土した。口縁部はほぼ全周残り、胴部は3分の2、底部は完存、脚部も一部が残り、口縁部から脚端まで接合、復元することができた。この遺物については、愛知県埋蔵文化財センターの赤塚次郎氏・永草康次氏に実見していただき、ご教示を賜った。また、接合できなかった小片を試料として提供し、胎土分析からの検討を加えていただいた。本来ならば、両氏から原稿をいただくところではあるが、報告書作成のさまざまな都合から果たせなかったので、両氏からいただいたコメントのエッセンスに触れておきたい。

まず、胎土については、花崗岩とそれを起源とする砂礫によって特徴付けられ、尾張地域で出土するS字甕の本来的な胎土と比較すると、細部にわたって共通点が認められる。しかし、博多周辺も花崗岩類が分布しており、在地の土器も花崗岩質であることが予想されるので、尾張出土の同形式の土器胎土と類似することが直接搬入であることを示すとは断言できない。

次に、S字甕の形態であるが、B類古段階の資料であり、外面および内面調整、台付部の補充技法など、尾張地域出土の同時期資料と同様な技法が観察できる。細部の形態や色調・焼成からも違和感は無く、東海地域からもたらされた搬入品と考えられる。

以上のご指摘から、このS字甕が東海からの直接搬入品である可能性は高いと思われる。また、一緒に博多遺跡群出土と、博多遺跡群の北東に隣接する堅粕遺跡群出土のS字甕を見ていただいたが、胎土、技法、形態的にはいずれも搬入の可能性が指摘されていることも付け加えておく。

4．107次調査検出の経筒埋納

107次調査104号遺構からは、経筒用陶器の埋納遺構が検出された。経筒に用いられた中国製の陶磁器については、杉山洋氏による研究がある（「北部九州の陶製経筒」『楢崎彰一先生古希記念論文集』楢崎彰一先生古希記念論文集刊行会、1998年）。杉山氏の分類に則すると、107号遺構の経筒はA1型式にあたり、12世紀前半に位置づけられることとなる。

さて、104号遺構が、蓋と身を正しく組み合わせて、正置して埋納するなど、経塚と考えられることについては異論はないだろう。問題は、これが営まれた時点での107次調査地点の景観・性格である。第2遺構検出面を見ても、遺構の上からは、何等特殊な要素は認められない。いわば、町中に唐突に営まれている、という感は拭えない。この類の簡易な経塚については、より日常的な埋納行為であったという可能性も考えて良いのではなかろうか。

本書を持って、御供所疎開跡地道路新設に伴う、博多遺跡群第102次・107次・120次調査の報告は完了する。とはいえ、出土した遺物は膨大であり、そのすべてについて整理を終えたわけではない。また、期間・予算の制約から、本書からもれた遺構・遺物は多く、調査担当者として十分に意を尽くせたとは、およそ言い難い。いずれ機会を作って、再論を期したい。

博多遺跡群第107次・120次調査出土の古代～中世人骨

九州大学大学院比較社会文化研究院
中　橋　孝　博

はじめに

日本でも有数の古い歴史を持つ港町、博多は、永年に渡るこれまでの発掘調査によって次第にその往時の姿を鮮明にしつつあるが、同時にまた相当数の古人骨資料が出土して、人類学的にも過去の住民に関する興味深い情報が蓄積されている。とりわけ全国的に出土例が少ない古代～中世初期にかけての人骨が出土する点で、貴重なフィールドと言えよう。今回、福岡市教育委員会によって1998年～1999年に実施された発掘調査により、また新たに古代から中世にかけての人骨が出土した。残念ながら少数の、しかも保存状態が悪い資料であったため得られた情報は限られたものになったが、精査する機会を得たので以下にその検討結果を報告する。

遺跡・資料・方法

今回人骨が出土した遺跡は、共に福岡市博多区上呉服町の旧砂丘上に位置し、福岡市教育委員会によって、1998年に第107次調査が、1999年に第120次調査が実施された。第107次調査区は聖福寺の西に近接し、12世紀頃の経筒が出土している。また、第120次調査区はその境内に含まれるが、寺が建設される以前は旧河口近くの堆積層であり、塔婆状木製品等と共に人骨が流れ込んだものと考えられている。

出土人骨を表１に一覧した。10世紀から11世紀所属の人骨が３体で、12世紀のものが１体、それに16世紀のものと思われる未成人骨２体を加えた、計６体が出土した。人骨の計測は、Martin-Saller（1957）に従い、性判定には筆者らの方法（中橋、1988）を援用した。

表１．博多遺跡群第107次・120次調査出土人骨

遺構番号	性別	年齢	時代	埋葬施設	副葬品
第107次調査					
133号－A	不明	小児	16C.	なし	なし
－B	不明	幼児			
159号	女性	熟年～	10C.後半～11C.前半	土壙墓	黒色土器椀１
310号	男性	熟年～	10C.前半	土壙墓	土師器皿１，黒色土器椀１
311号	男性	成人	10C.前半	なし	なし
第120次調査					
B区最下層	男性	(成年)	12C.	なし	なし

観察・計測結果

Ⅰ．第107次調査

1．133号遺構

埋葬遺構は検出されず、計２体分の未成人骨が、かなり乱れた状態で出土した。人骨の殆どはＡ号のもので占められ、ほぼ全身各部の骨を確認できるが、Ｂ号の骨は頭蓋片のみ検出された。

1－1、133-Ａ号

保存状態は不良ながら、頭蓋を初めとして、ほぼ全身各部が確認された。関節した部位は無く、また寛骨のように移動の激しい部位はあるものの、南西から北東の方向に、頭蓋、上肢、下肢の順序で並び、元の解剖学的な位置関係からそれほど大きくは外れない状況で検出された。頭蓋は土圧による歪みがあり、詳しい計測による検討は出来なかったが、一応、以下にＡ号の歯式を示しておく。

／ ／ M^1 m^2 m^1 ／ ／ ／	I^1 I^2 ／ m^1 m^2 $M^1(M^2)$／
／ ／ M_1 m_2 ／ ／ ／ I_1	I_1 I_2(C) ／ m_2 M_1 ／ ／

（／：欠損、（ ）：未萌出）

乳歯がまだ残存しており、歯の萌出状況、歯根の形成段階から判断して、10～11歳程度の小児骨と見なされる。性別は不明である。

1－2、133-Ｂ号

頭蓋片のみで、前頭骨、頭頂骨、側頭骨の各破片と、顔面部の左右頬骨、上顎骨が確認できた。歯式を以下に示す。

	(I^1) (I^1) (C)
／ ／ $(M^1)m^2$ m^1 ／ ／ i^1	／ ／ ／ m^1 $m^2(M^1)$／ ／
／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／	／ ／ ／ ／ ／ ／ ／ ／

歯の萌出状況、歯根の形成段階から、2歳前後の幼児と見なされる。

表２．大腿骨計測値（男性、左）

		博多107（古代）		北部九州[1)]（弥生）		津雲[2)]（縄文）		西日本[3)]（古墳）		吉母浜[4)]（中世）		九州[5)]（現代）	
		310号	311号	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	最大長	－	－	60	430.9	19	414.1	3	426.3	18	419.1	59	406.5
2	自然位長	－	－	18	427.7	19	411.0	3	422.0	15	418.1	59	403.2
6	中央矢状径	27	30	162	29.7	47	29.0	22	27.2	19	28.1	59	26.5
7	中央横径	32	26	166	28.0	47	26.0	22	26.8	19	27.7	59	25.6
8	中央周	91	88	161	90.8	47	87.4	21	85.9	19	87.8	59	82.4
9	骨体上横径	－	30	115	32.6	43	30.7	20	29.0	19	32.1	59	29.4
10	骨体上矢状径	－	26	115	26.2	43	25.5	17	28.4	19	24.1	59	24.3
8/2	長厚示数	－	－	18	21.4	19	21.2	3	20.1	14	21.2	59	20.4
6/7	中央断面示数	84.4	115.4	162	106.4	47	111.8	22	101.8	19	101.3	58	103.8
10/9	上骨体断面示数	－	86.7	115	80.5	43	83.1	17	98.1	19	76.1	58	82.8

1）中橋・永井(1989)、2）池田(1988)、3）城(1938)、4）中橋・永井(1985)、5）阿部(1955)

2．159号

土壙墓から検出されたもので、頭蓋片と、左右大腿骨のみ遺存していた。頭蓋の左側に黒色土器碗が1個副葬されていた。遺存部から判断する限り、頭位は北東で、左右の大腿骨近位端が開いていることから、一応、仰臥位で膝を緩く曲げた状態で埋葬されていた可能性が窺われる。頭蓋の縫合に癒合が認められるので、熟年以上であった可能性が高い。また、大腿骨がかなり華著であることから、女性と見なされる。

計測結果を比較群と共に表３に示した。骨幹の諸径はほぼ現代人並で、粗線の発達は微弱であり、その断面示数の小ささが目立つ。骨体上部にも扁平性は認められない。

3．310号

土壙墓出土人骨で、頭蓋の他、右鎖骨、右上腕骨、及び左右の大腿骨と腰骨が遺存していた。頭の左側に、黒色土器碗と土師器皿各１個が副葬されていた。頭位は東で、下肢は強屈して右に倒している。上半身は仰臥位の可能性もあるが、大腿骨の位置関係から、やや右側臥に近い埋葬姿勢が窺われる。歯の咬耗がかなり進行し、頭蓋縫合に癒合部位が認められるので、熟年以上と推定される。また、下顎の大きさ、四肢の太さなどから、男性と見なされる。

大腿骨の計測値が得られたので、比較群と共に表２に示した。骨幹の周計は太い大腿骨を持つことで知られる弥生人の平均を上回っているが、粗線の発達が弱く、骨体断面示数は84.4と非常に小さい特徴が見られる。

4．311号

土壙墓出土人骨で、下肢骨及び一部の上肢骨らしき破片が検出された。一応、下肢を強屈していたことが窺えるが、上半身の状況が不明なので、頭位や詳しい埋葬姿勢は不明である。下肢骨の太さ、粗線の発達の良さなどから、男性と見なされる。一応、成人であったと思われるが、詳しい年齢は不明である。

大腿骨の計測結果を表２に示した。310号とは対照的に、粗線の発達が良好で、その断面示数は

表３．大腿骨計測値（女性、左）

		博多107（古代）	北部九州（弥生）		津雲（縄文）		西日本（古墳）		吉母浜（中世）		九州（現代）	
		159号	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	最大長	－	34	405.5	22	388.2	2	401.0	25	378.0	13	308.1
2	自然位長	－	11	403.0	22	381.7	2	401.0	24	375.8	13	375.9
6	中央矢状径	23	112	25.7	45	25.2	23	24.5	28	23.3	13	23.6
7	中央横径	26	112	26.3	45	24.2	24	24.7	28	24.8	13	23.2
8	中央周	74	111	81.5	45	78.0	23	78.1	28	76.1	13	74.2
9	骨体上横径	(28)	86	30.5	42	28.4	19	28.2	28	29.1	13	27.5
10	骨体上矢状径	(22)	86	23.2	42	22.2	17	26.6	28	20.9	13	21.3
8/2	長厚示数	－	11	20.8	21	20.3	1	20.6	24	20.4	13	19.8
6/7	中央断面示数	88.5	112	98.3	45	104.5	23	100.0	28	84.5	13	102.0
10/9	上骨体断面示数	78.6	86	76.4	42	78.2	19	72.2	28	72.0	13	77.1

115.4と、この時代のものとしてはかなり高い。骨体上部に扇平性は認められない。なお、計測は出来なかったが、脛骨の骨体にもかなりの扁平性が認められた。

Ⅱ．第120次調査

B区最下層

埋葬遺構はなく、元々湿地帯であったところに人骨が流れ込み、集積した状況で検出された。頭頂骨、左右側頭骨、後頭骨の各破片が分離した状態で出土した。なお左頭頂骨の下部に獣骨（種不明）も検出された。

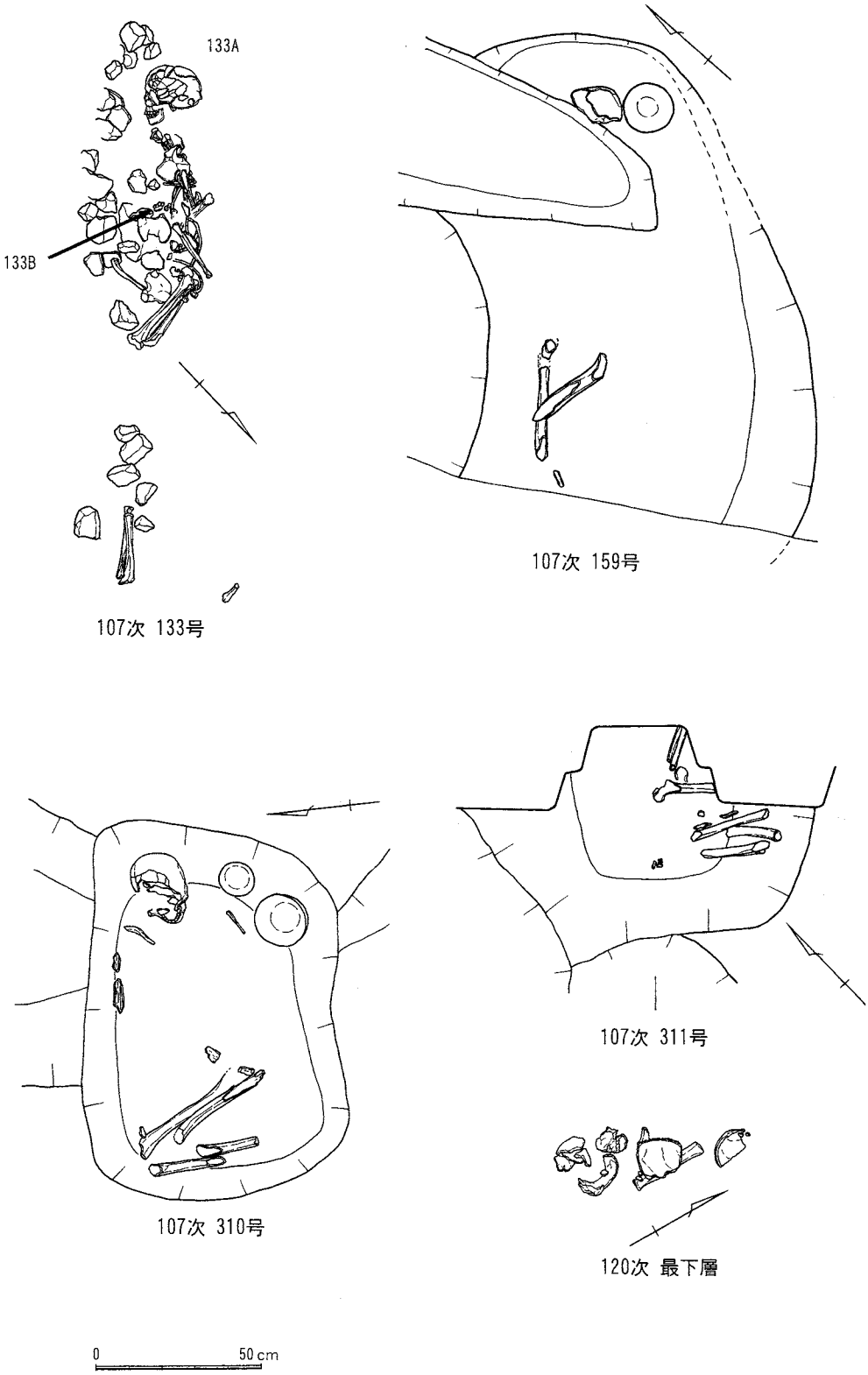
外後頭隆起、及び乳様突起の発達の程度から男性とみなされる。年齢については、不明確ながら、頭蓋冠の各部が縫合部で分離しており癒合の兆候が見られないことから、比較的若い成年期の人骨である可能性が高い。断片的な資料のため形態的な特徴については不明である。

謝　辞

当遺跡出土人骨について貴重なご教示を頂いた福岡市教育委員会の諸先生、諸氏に深謝いたします。

文　献

阿部英世（1955）：「現代九州人大腿骨の人類学的研究」、人類学研究２。
池田次郎（1988）：「吉備地方海岸部の縄文時代人骨」、考古学と関連科学（鎌木義昌先生古希記念論集）
城一郎（1938）：「古墳時代人人骨の人類学的研究　第三部　下肢骨」、人類学輯報１
Martin-Saller（1957）：Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.
中橋孝博（1988）：「古人骨の性判定法」、日本民族・文化の生成（永井昌文教授退官記念論文集）、六興出版。
中橋孝博・永井昌文（1985）：「山口県吉母浜遺跡出土人骨」、吉母浜遺跡、下関市教育委員会。
中橋孝博・永井昌文（1989）：「弥生人」「弥生文化の研究』１、雄山閣。



第107次・120次調査出土人骨（1/20）

博多遺跡群第102次調査出土の銅銭について

櫻　木　晋　一

博多遺跡群第102次調査で出土した銭貨について報告する。本遺跡には一括出土銭と呼べる状況のものは存在せず、一遺構から出土している最多のものでも第２面225の10枚である。出土総数は表２で示したように101枚で、総枚数も決して多いとは言えない。しかし、銭貨の出土地点が層位的に把握できており、これらのデータは流通銭貨の復元資料として活用できる可能性をもっており重要である。

近年、出土銭貨研究の進展には目を見張るものがあるが、今後の新たな研究視点として、個別発見貨をどのように歴史資料として整備・活用していくかという問題が生じてきていると考えられる[i]。偶然の機会に遺失された銭貨は、埋納銭などのように意図的選択がなされた銭貨ではないので、流通している貨幣の実態をより正確に反映していると考えられるからである。個別発見貨にはこのような遺失銭貨が多く含まれているのである。これらの銭貨を集成・資料化していけば、真の歴史資料として有効なデータとなることは明らかである。都市遺跡博多は商品流通の拠点でもあり、その対価として使用される貨幣が実際はどのような種類のものであったのかということを解明することは、貨幣経済史研究上からも重要であり、そのために考古学の果たす役割は大きいと考える。層位で時期決定を行いながら、それぞれの時期にどのような銭貨が存在・流通していたのかを研究することが、今後の重要課題の一つであり、そのための基礎資料を提供するのが本報告のねらいである。

さらに、博多遺跡群第85次調査で出土した２点の無文銭についても、金属組成分析が完了したので、ここに併せて報告する。中世末のわが国では、商品流通の進展による通貨不足や銭貨そのものの貶質化の結果、無文銭や模鋳銭などの流通量が増加してきたと考えられており、これらの銭貨については、その実態把握のためにも注意を払っていかなければならない。

第102次調査で出土した銭貨の総体的特徴は、遺存状態の悪い銭貨が多く、従って判読不能の銭貨数が多いということである。遺跡発掘の貨幣は総じてこのような状況であると言ってよい。錆取りをすることによって文字の判読が完全にできたものは、47枚（46.5%）にすぎない。銭種の判別できたものは、開元通寶・元豊通寶・皇宋通寶など唐や北宋の銭貨が多く、大半が過去の出土銭貨データで上位25位に入る銭貨である[ii]。この点では、備蓄銭研究結果とも一致する極めてノーマルな出土銭貨の状況であると言える。大型銭については、折二銭が少なくとも５枚は確認できているので、これまでの研究で明らかになっているようにその出土率が高いといえる[iii]。中世博多には大型銭がもたらされているのである。無文銭については、確認できなかった。

本遺跡で特色ある銭貨としては、萬暦通寶の出土が挙げられる。明末・清初に鋳造された銭貨は鋳造量そのものが少ないということの反映である可能性も高いが、明末に鋳造されたこの銭貨のわが国での出土例は少ない。管見の限りでは、萬暦通寶の出土例は長崎市家庭裁判所敷地遺跡[iv]・栄町遺跡[v]など数例しか存在しないし、九州に偏在している。この銭貨は16世紀第４四半期に、福建省からジャワに流入したことなどが知られており、広汎に流通していた銭貨ではあるが[vi]、日本ではほとんど出土しない。当該期シナ海交易の解明のカギを握っている貨幣なので、この貨幣の出土地点を把握していく必要がある。さらに銭貨鋳造の技術史的観点から見ても、これは重要な貨幣である。なぜならば、中国銭貨は明末の嘉靖通寶（1527年初鋳）以来、青銅銭から真鍮銭へと材質変化することが知られて

いるが、考古資料からその変化を確認する必要があると考えるからである。従って、表1のとおり本遺跡から出土した萬暦通寶を含め6枚の銭貨の金属組成分析を実施した。萬暦通寶以外の小平銭（一文銭）4枚については、外観観察で文字が稚拙なもの（天聖元寶）、仕上がりが悪いもの（祥符元寶）、孔が星のように見えるもの（開元通寶）、公鋳銭（熙寧元寶）、さらに大型銭である折二銭（政和通寶）1枚の分析を試みた。発掘された折二銭の組成分析は管見の限り過去になされておらず、初めての試みとして行った。それらの分析結果については次節に譲るが、結論だけを述べれば、考古資料からも萬暦通寶は真鍮銭であることを確認でき、折二銭についても中国本銭の金属組成と同一の範疇に入ることが確認できた。他の銭貨の分析結果も、中国公鋳銭の範疇に入るとの所見であるが、開元通寶は錫の比率がやや低いし、祥符元寶は鉛の比率が低いと考えられる。公鋳銭を溶かしたものを主たる原料とすれば、成分的には公鋳銭・私鋳銭の区別がつけられないという組成分析の限界も存在する。これらの資料について中国私鋳銭や国内模鋳銭の可能性も棄てきれないと考えている。

出土銭貨は1面出土の萬暦通寶を除くと、最新銭が南宋銭なので、調査された本遺跡の主体的時期は14世紀の中期までで収まりそうである。これは第1面が14世紀前半から中ごろ、第2面が13世紀末から14世紀初め、第3面が13世紀後半頃という、遺構面の時期認識と一致する[vii]。1面から3面までの個別層位間の時期差については、残念ながら貨幣からは説明できない。遺構として注目したいものは、2面225である。枚数が10枚と多いだけではなく、白色化したものを2枚確認できる。白色化はその成分に鉛分を多く含んでいる結果であると考えられ、銭貨に鉛の含有量が増加するのは、銅や錫の原材料不足と考えられている。鉛を多く含む銭貨の存在と、判読不能銭が大半であることを考え併せると、この時期には流通貨幣が貶質化・不足している可能性が考えられる。3面293は折二を含む北宋銭と南宋銭で構成されており、同様に1面050も2枚のみの出土ではあるが、南宋銭と折二銭の組み合わせで興味深い。これは博多で折二銭や南宋銭の使用頻度が高かった可能性と、恣意的にこれらの銭貨を埋納した遺構が存在する可能性を示していると考えられる。

博多遺跡群第85次調査で出土した無文銭については、発掘担当者が別稿[viii]で考古学的所見を発表しているので、ここではその金属組成分析値について簡単に所見を述べる。表1のようにICP－AES法によって定量分析値が計測されており、重要な点は銅の割合が95％を超える純銅系の銭貨であるということである。本来の銭貨は銅・錫・鉛3合金系であるのに対し、中世末にわが国で生産された銭貨にはこのような純銅系銭貨が登場してくる。大量の鋳型とともに出土した堺市の無文銭については、金属組成の計測値が明らかにされている。[ix]これによると堺で生産されていた無文銭は純銅系無文銭である。博多遺跡群第85次調査地点は博多における銅製品や銭貨の生産地に比定されており[x]、16世紀に国内で生産された無文銭は、堺に限らず博多でも純銅系であった可能性が高い。この2点の無文銭に含まれる他の金属は少量であるが、この2点の鉛（Pb）錫（Sn）の量に差が有り、鉄（Fe）砒素（As）銀（Ag）などの微量元素についても個体差が大きく、特徴が明確にできない。その特徴を把握するため、多くの資料を収集・分析する必要がある。また、これらの無文銭については、孔の縁が

表1　無文銭定量分析値（ICP－AES法）　（μg/g）

銭　貨	Cu	Pb	Sn	Fe	As	Sb	Ni	Au	Ag	Zn
無文銭1	1000000	27000	150	2300	7800	110	2100	56	4800	68
無文銭2	920000	4300	2600	5900	2600	220	2200	15	76	66

打ち抜いたようにめくれている事実があり、鋳造方法などその製作技術についても再検討する必要がある。

今後、遺跡出土の個別銭貨についても、出土遺構や層位を明らかにすることにより、歴史資料として活用できると考えられるので、その報告が待たれる。本報告がそのための一助となれば幸いである。

本稿は、平成11～13年度文部省科学研究費補助金（基盤研究C）「九州・沖縄における中世貨幣の生産と流通」（課題番号11630083）の成果の一部である。

文　献

i　森本芳樹　1998「個別発見貨の意味 ── イギリス中世古銭学による問題提起と所領明細帳研究への波及 ──」『久留米大学比較文化研究』第21輯

ii　鈴木公雄　1999『出土銭貨の研究』東京大学出版会

iii　櫻木晋一　1992「博多遺跡群の出土銭貨（1）」博多研究会『博多研究会誌』第１号
大型銭の流通問題についは、小畑弘己（1997「出土銭貨にみる中世九州・沖縄の銭貨流通」『文学部論叢』第57号、熊本大学文学会）の考察がある。

iv　長崎市教育委員会　1992『家庭裁判所敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』

v　長崎県教育委員会　2001『栄町遺跡』長崎県文化財調査報告書162集

vi　黒田明伸　1999「16・17世紀環シナ海経済と銭貨流通」『越境する貨幣』青木書店

vii　本遺跡の調査担当者である大庭康時氏のご教示。

viii　大庭康時　2000「博多遺跡群第85次調査地点における銭貨鋳造」『博多研究会誌』第８号

ix　富沢威・嶋谷和彦ほか　1997「中世銭貨の化学組成」『堺市文化財調査概要報告第61冊』堺市教育委員会

x　福岡市教育委員会　1997『博多57』福岡市埋蔵文化財調査報告書第522集

表２　博多遺跡群第102次調査出土銭貨一覧表

番号	層位・遺構	銭名	初鋳年	備　考
1	1面008	□道元寶	995	草書
2	1面008	景徳元寶	1004	
3	1面008	元豊通寶	1078	篆書
4	1面023	皇宋通寶	1038	真書
5	1面050	景定元寶	1260	背不明、白色化
6	1面050	判読不能		折二
7	1面058	元□□□		
8	1面084	熈寧元寶	1068	真書
9	1面108	皇□通□		
10	2面110	大観通寶	1107	
11	2面126	紹聖元寶	1094	行書
12	2面136	聖宋元寶	1101	行書、折二
13	2面142付近	元符通寶	1098	篆書
14	2面166	元豊通寶	1078	行書
15	2面173	判読不能		
16	2面173	判読不能		
17	2面184	紹聖元寶	1094	篆書
18	2面195	紹聖元寳	1094	篆書
19	2面195	皇宋通寶	1038	篆書
20	2面203	判読不能		
21	2面203	元豊通寶	1078	行書
22	2面204	判読不能		
23	2面206	大観通寶	1107	
24	2面212	開元通寶	621	
25	2面215	元豊通寶	1078	篆書
26	2面215	開元通寶	621	
27	2面222	元祐通寶	1086	篆書
28	2面225	判読不能		1/2残存
29	2面225	祥符元寶	1009	
30	2面225	判読不能		細片、白色
31	2面225	判読不能		細片
32	2面225	淳□元寶	南宋	
33	2面225	判読不能		2枚銹着
34	2面225	判読不能		細片
35	2面225	判読不能		細片
36	2面225	判読不能		1/4残存、白色
37	2面225下掘り下げ	判読不能		2/3残存
38	3面256	□□□寶		篆書
39	3面267	判読不能		細片
40	3面293	元豊通寶	1078	行書
41	3面293	聖宋元寶	1101	行書
42	3面293	判読不能		
43	3面293	□寧□寶	1071	真書、折二
44	3面293	判読不能		細片、1/2残存
45	3面293	□定□□	南宋	
46	3面293, 295, 296	祥符元寶	1009	
47	3面293, 295, 296	判読不能		
49	3面293, 295, 296	判読不能		細片
50	北側トレンチ	判読不能		1/2残存
51	北側トレンチ	熈寧元寶	1068	真書
52	中央トレンチ	熈寧元寶	1068	篆書
53	中央トレンチ4～5面	判読不能		
54	Bトレンチ黒ベタ層	開元通寶	621	白色
55	中央ベルト1～4面下	政和通寶	1111	やや白色、折二
56	中央ベルト	祥符元寶	1009	
57	中央ベルト1～4面上半	判読不能		1/2残存
58	表採	判読不能		1/2残存
59	1面表採	判読不能		1/2残存
60	表採	判読不能		
61	1面	開元通寶	621	白色
62	1面	咸平元寶	998	
63	1面	萬暦通寶	1576	
64	1面	元符通寶	1098	
65	1面	判読不能		1/4残存
66	1面下	嘉祐通寶	1056	
67	1面下掘り下げ	開元通寶	621	
68	1面下掘り下げ	元豊通寶	1078	行書
69	1面下掘り下げ	□□□寶		篆書
70	1面下掘り下げ	判読不能		1/2残存
71	1面下掘り下げ	判読不能		1/4残存
72	1面下掘り下げ	判読不能		
73	1面下掘り下げ	明道元寶	1032	真書
75	1面下掘り下げ	景徳元寶	1004	
76	1面下掘り下げ	判読不能		1/4残存
77	2面	元祐通寶	1086	蒙書、折二
78	2面	皇宋通寶	1038	真書
79	2面	判読不能		1/3残存
80	2面下	判読不能		1/4残存
81	2面下225掘り下げ	大観通寶	1107	
82	2面下掘り下げ	元豊通寶	1078	篆書
83	2面下掘り下げ	判読不能		
84	2面下掘り下げ	判読不能		
85	2面下掘り下げ	判読不能		
86	2面下掘り下げ	判読不能		2枚銹着
87	2面下掘り下げ	判読不能		
88	3面	天聖元寶	1023	真書
89	3面下掘り下げ	判読不能		
90	3面下掘り下げ	天禧通寶	1017	
91	3面下掘り下げ	判読不能		
92	3面下掘り下げ	判読不能		
93	3面下掘り下げ	判読不能		
94	3面下掘り下げ	判読不能		
95	3面下掘り下げ	判読不能		
96	3面下掘り下げ	皇宋通寶	1038	
97	4面	皇宋通寶	1038	篆書
98	4面	元祐通寶	1086	行書
99	4面下掘り下げ	判読不能		
100	4面下掘り下げ	元符通寶	1098	真書
101	3面229	天聖元寶	1023	真書

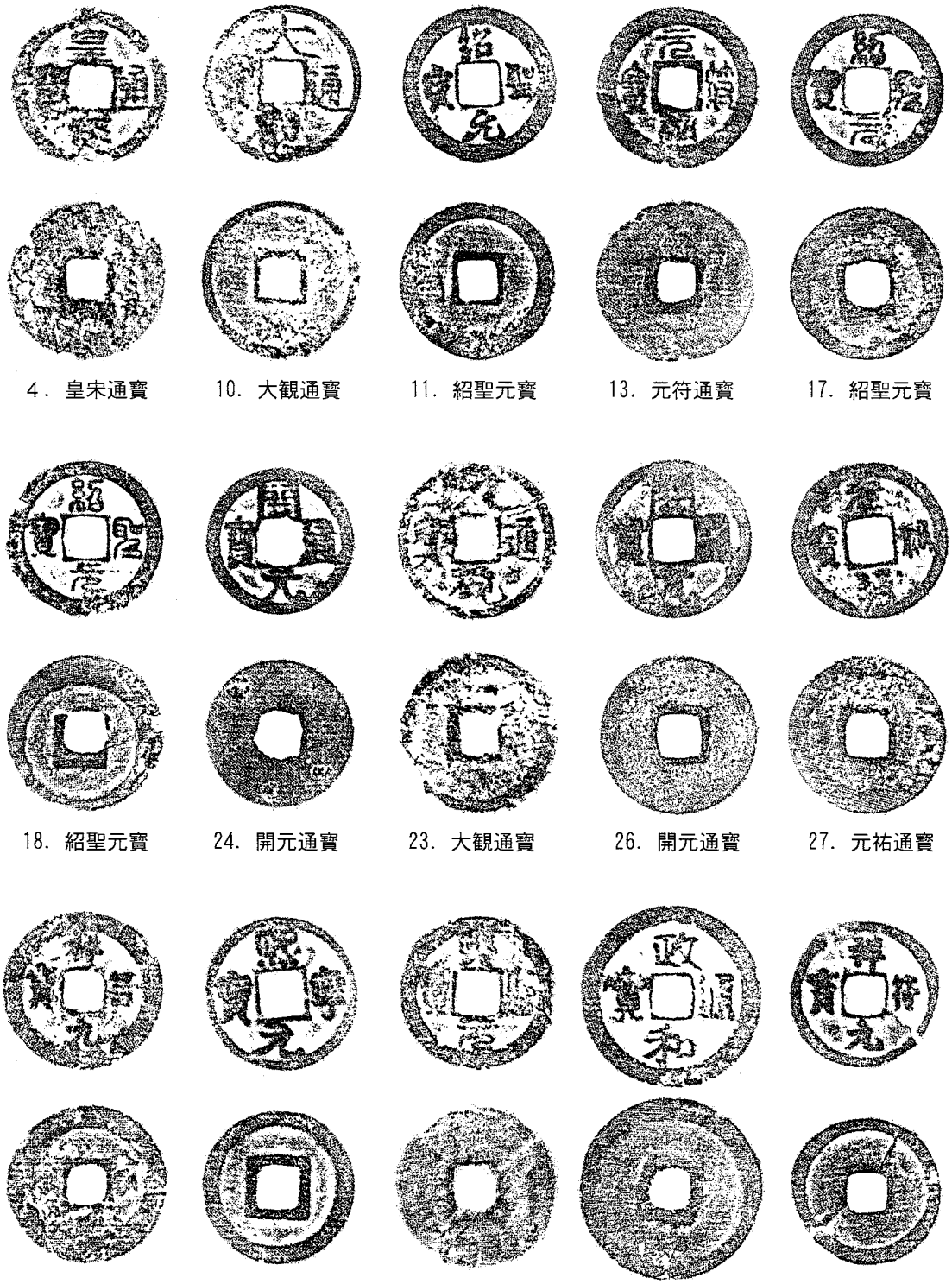
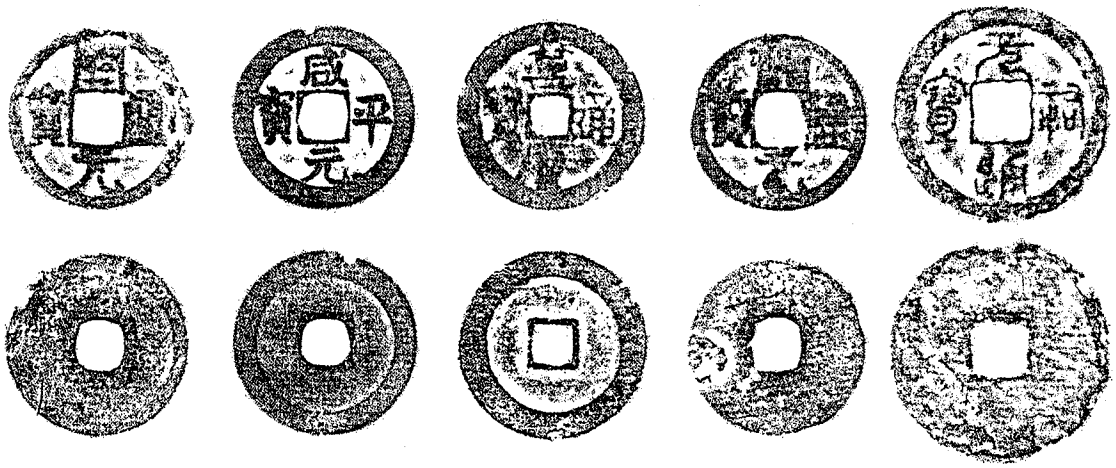
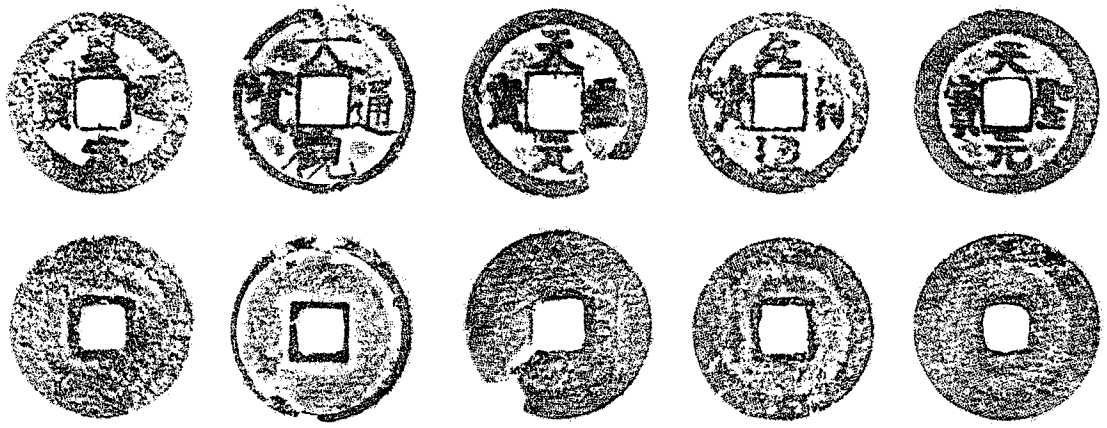


図１　第102次調査出土銭貨拓本１（１／１）（櫻木拓）



61. 開元通寶　62. 咸平元寶　63. 萬曆通寶　67. 開元通寶　77. 元祐通寶



78. 皇宋通寶　81. 大観通寶　88. 天聖元寶　100. 元符通寶　101. 天聖元寶

図２　第102次調査出土銭貨拓本２（１／１）（櫻木拓）

福岡市博多遺跡群第102次調査出土銭貨の誘導結合プラズマ発光分光分析法による分析

岩手県立博物館　咲　山　まどか
赤　沼　英　男

福岡市博多遺跡群第102次調査から出土した銭貨について誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP－AES法）により分析を行った。以下にその結果を報告する。

1　分析資料

分析した資料は開元通寶他5点である。錆で覆われてはいるものの、状態の良い完形品である。資料の形状、外観（拓本、写真）を図1に示す。

2　分析試料の調整ならびに分析方法

資料表面に付着している錆層をダイヤモンドカッターを装着したハンドドリルを用いて除去し金属面を露出させた。次にダイヤモンドペーストを使って上述の金属面を平滑にし、アルコールで超音波洗浄後、十分に乾燥した。このようにして得られた平滑な金属面から微量のメタル片を削り取り秤量後、硝酸で溶解し、塩酸を加え1モル溶液となるように希釈して試料溶液を作成した[1)]。得られた溶液はICP－AES法により、銅（Cu）、鉛（Pb）、錫（Sn）、鉄（Fe）、砒素（As）、アンチモン（Sb）、亜鉛（Zn）、金（Au）、銀（Ag）、コバルト（Co）、ニッケル（Ni）の定量分析を行った。

ICP－AES法の測定条件は以下のとおりである。

ICP－AES法（定量分析）
　出力：1.1kW
　アルゴンガス流量
　　プラズマガス：15l/min
　　補助ガス：1.0l/min
　　ネブライザー：0.4l/min

3　分析結果ならびに考察

表1はICP－AES法による定量分析結果である。No.9、No.11、No.13、No.24、はCu分、Pb分、Sn分がそれぞれ61％～67％、8.6％～19％、6.7％～9.7％含有されており、また0.5％以下のFe分、As分、Sb分が検出された。No.7、No.21は上述の資料と比較するとCu分とSn分が55％～56％、1.8％～4.4％と少ない。Pb分についてはNo.7が27％と多く含まれており、No.21では2.4％である。さらにNo.7にはFeが3％、No.21にはZnが14％含有されていた。

この値を基に、主成分であるCu、Sn、Pbの3成分について含有量を100％に規格化し、ダイヤグラムにプロットした（図2）。図2に佐々木らによる輸入明銭と国内模鋳銭の化学成分組成範囲の概念図[2)]を重ねると、博多遺跡群の銭貨No.9、No.11、No.13、No.24は公鋳銭領域に属することが明らかとなった。No.21は、Cu－Zn系合金であり、Cu、Sn、Znについてダイヤグラムにプロットす

ると図3のようになる。これについては今後、国内におけるCu－Zn系合金で鋳造されている銭貨のデータを参考にし、検討する必要があろう。

註）

1）内田哲男、平尾良光「ICP分析法による銅製考古学的資料分析の基礎的研究」『保存科学、29』1990，43～49

2）佐々木稔「出土銭貨の自然科学的解析法」『出土銭貨、7』1997，93～105

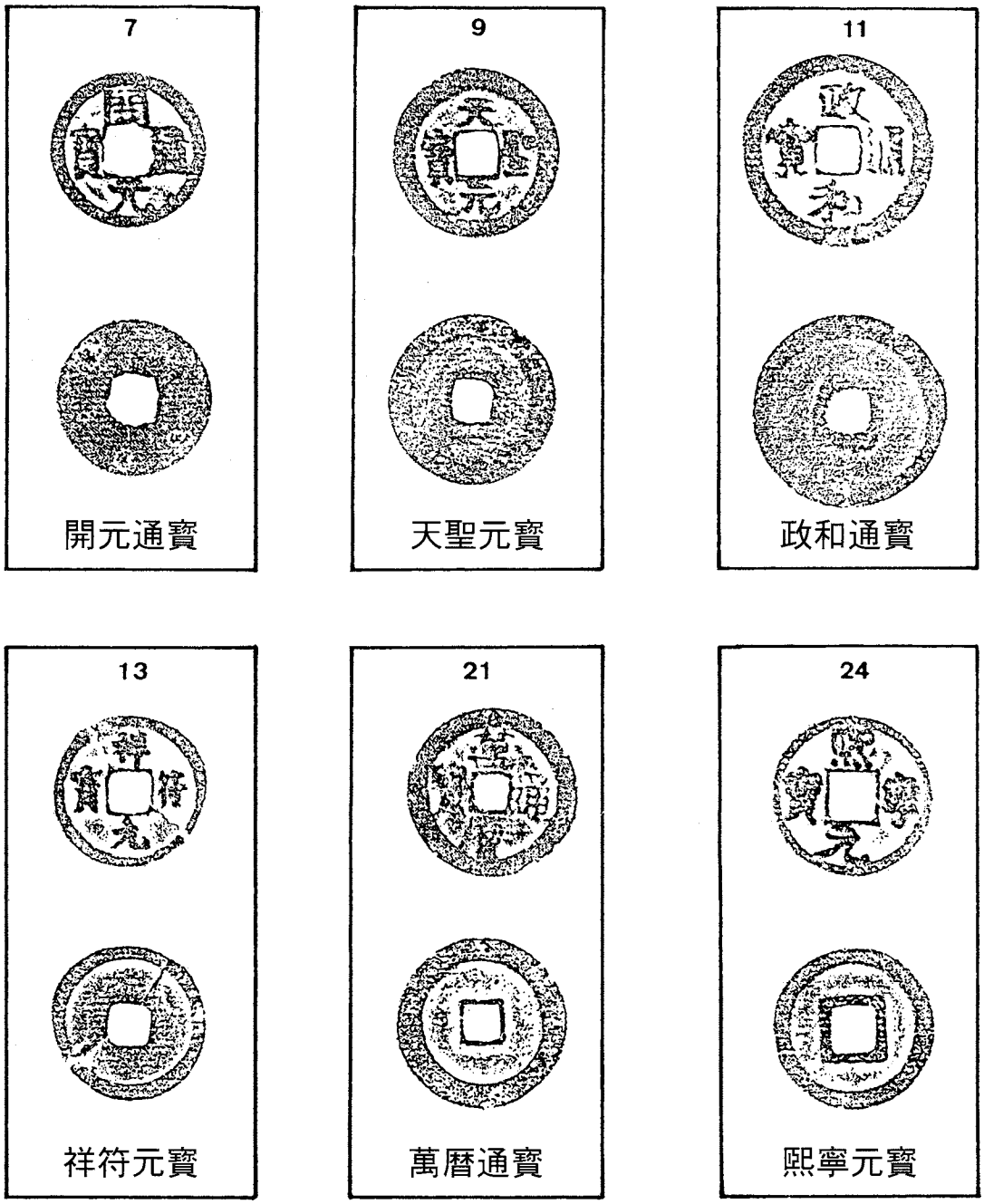


図1　資料の拓本（1/1）

表1　ICP－AES 法による古銭の定量分析結果

		化学成分（%）											
No.	資料名	Cu	Pb	Sn	Fe	As	Sb	Co	Ni	Ag	Au	Zn	合計
7	開元通寶	56.0	27.0	4.4	3	0.05	0.14	0.0051	0.029	0.19	0.0013	0.5	91.3
9	天聖元寶	67.0	15.0	9	0.059	0.043	0.025	0.0062	0.052	0.012	＜0.003	0.59	91.8
11	政和通寶	61.0	16.0	6.7	0.096	0.24	0.42	0.0048	0.02	0.052	＜0.003	0.52	85.1
13	祥符元寶	67	8.6	8	0.046	0.024	0.024	0.0013	0.026	0.012	0	0.59	84.3
21	萬曆通寶	55	2.4	1.8	0.83	0.29	0.2	0.0051	0.084	0.011	＜0.003	14	74.6
24	熙寧元寶	61	19	9.7	0.12	0.1	0.05	0.006	0.0079	0.027	＜0.003	0.81	90.8

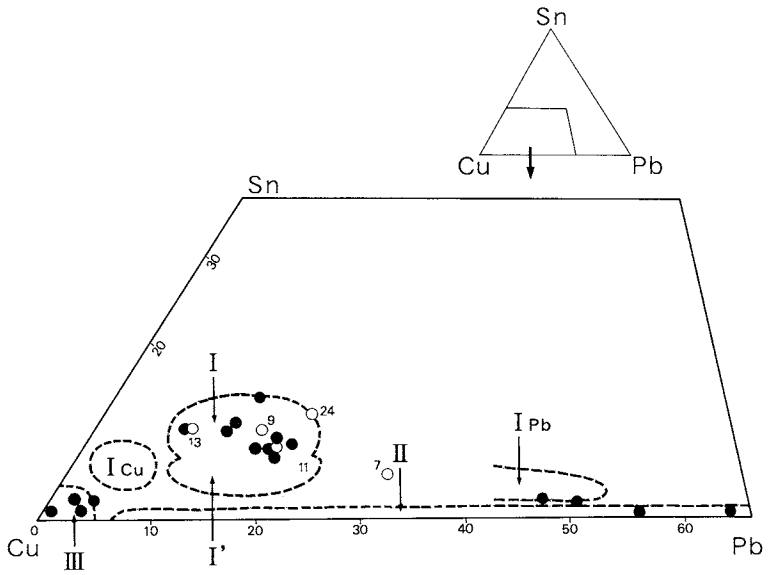


図2　分析した試料の三角ダイヤグラム（Cu－Sn－Pb）

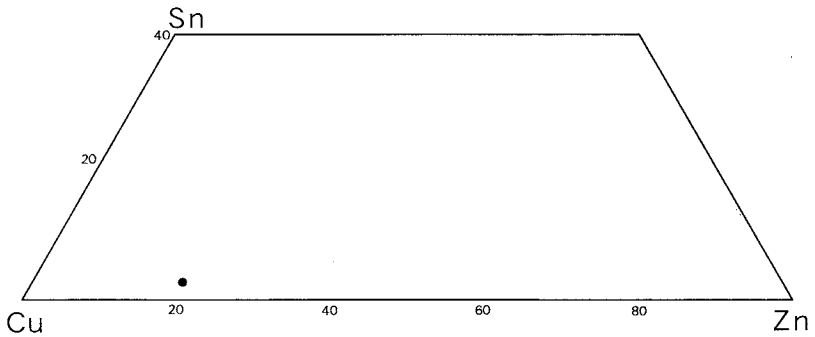


図3　分析した試料の三角ダイヤグラム（Cu－Sn－Zn）

福　岡　市

博多80

福岡市埋蔵文化財報告書第706集

2002年３月29日発行

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８－１

印　刷　城島印刷有限会社
福岡市中央区白金２丁目９－６

福岡市埋蔵文化財調査報告書第706集
2002
福岡市教育委員会